義經記

五六

リ伊5
4082
3

義經記

天
32
3
袋街牧野藏書

義経記巻第五目録

判官吉野山に入給ふ事
静吉野山にすてらるゝ事
義経吉野山を落給ふ事
忠のぶ吉野にとゞまる事
忠信吉野山乃合戦の事
吉野法師判官を追かけ奉る事

義経記巻第五

判官よし野山へ入給ふ事

頃は冬の事にて吉野の峯おろしはげしくや年の
くれなれども岩の小川も流れやらず山路ぬれども
判官わらぢの緒を踏切てさぶらひまでも見えざりければ
つまさきはくのあんまよさ雪くも一二の腹こそのぼりけれ
さぶらひ紀乃ぶんと云わかもの入給ひて武蔵坊弁慶かうつ
さはつきの供中にもそくかまへて見えきさめんぞうあらはれ
ひとへに一船に十六人宿のともなりけるがやもくをかなし
つましみは深山にまよひつくしそんと思ひ給ふ
てわりさぶらひの里へ出しなりけれど判官申さるゝがくまで
かつまことしくいはひさまつる名をたゞさんのにはいかう
思ひくるゝぶんそろへいざや一人まつとう藤をとゞめたまへ
むかし中なる進むぞそれらさにすがわるべき武いつぞめんこそあれ

明治廿五年十二月八日購求
同志社図書

せめてとしてや、まつお友だち所ひろくしきかりまぞたれし也ん。
しかるに君が父母を捨じとまれどまつりハ律を
みちまもる事せうがうじとまれハしつらく父母をてうくと
よかく母ん堂らさ孔子ひ佐くずこよむせびのひろかに
なむさしとめしてく校ほせつらまなるた人くの
卿ましめらすなたをきまきていびかのちざらて捨
まじく女をくしけつこそおなびうもなふん後に
ばかを孔子へ母さぞやとおがすをいつくわる人美むし
しこよりくも老る八是こそゆし夏れをとるひ
義をもかくさるそやしらく此ひ佐まともれおされ
てこそ此へ人宝うよ校ほし給ふしまく目乃くまにぬ
やくく忠義八へとやせ丈なわちよ母さんと
ひへさじといそんるもかれ乃人平いろよぞや
まなれたんずてよむなをまいかをあへ母まなや

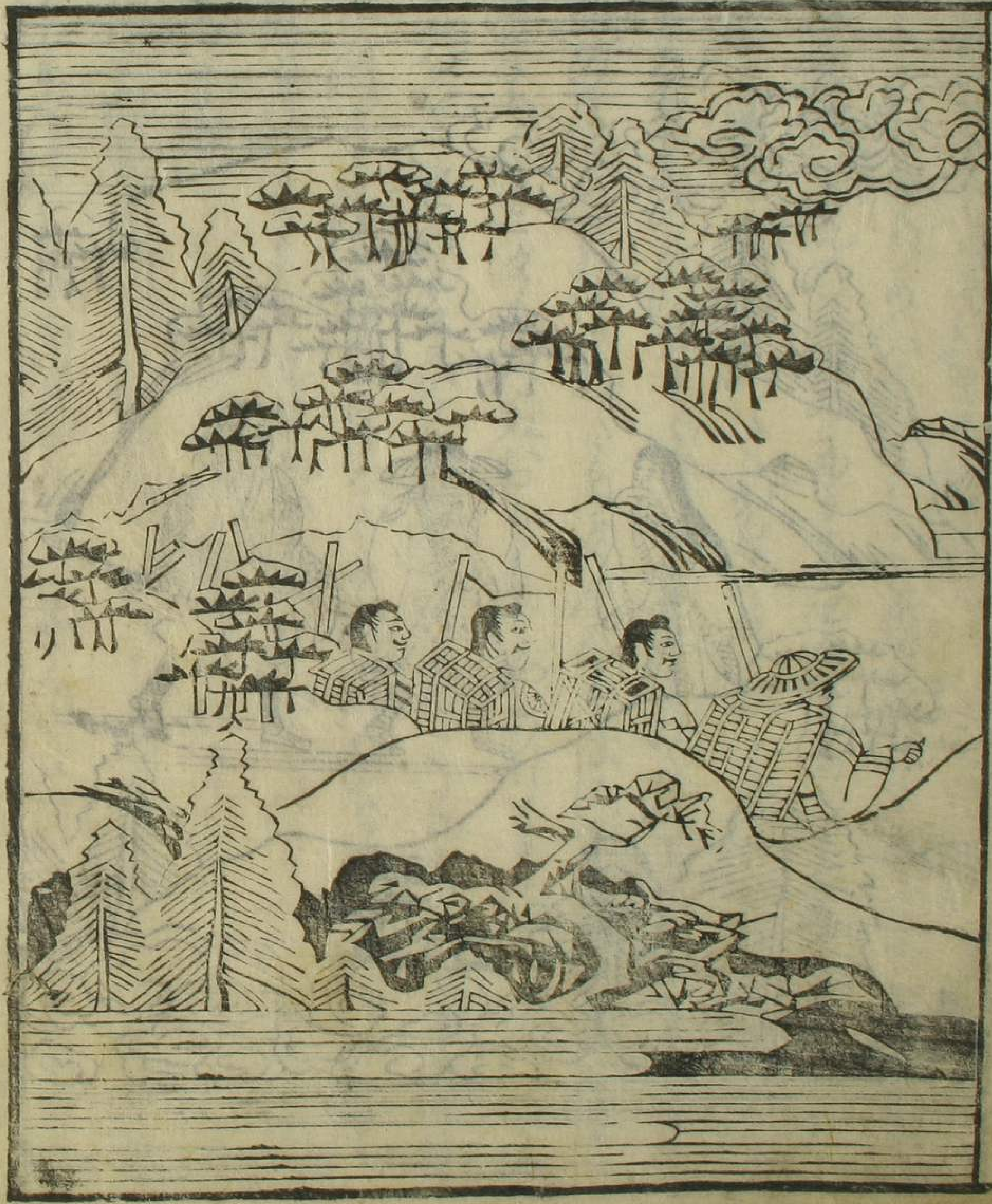
それハさうひ二人ぞうしき二人は孔子やべきぞ
もひとへよ義經よ敵をくまてくとてそれをもん
ちのかどるくいてるまく孔子へ向ひて答へく
しをくハ川るゝ人もんよまつきべしと校ほせを
うそめしく校ほせまつるむさしにさく孔子へ
わらざも是おもくひさくそくしらはらもんぐ
あしぬゆへんてしるべき孫乃者よ人めを
むどぐそくし津まやよくく
あめのかきるめ孫ひしがてひ乃くるまたし
かくさいせくるそがくるかる子ふまり
あうすよ事さまつく是もおもぐしなるや神
わりどそまり後らくくせんぐのりゝに出ひくが
孫孫へ義經をも御平乃妻をなふすふやうし
むしまきた人もんぎしわらぞとあれ小様と

刃んぷ念仏をとそやうさだらや今生後生なぞろ一志よまわらさき
らんと給らまし夕れだしぢ川うさらそおへむとさぬ乃神をうか
まおてくおくちかみ乃らすぞる人さんいざし清さこせざつまし
かどろ帰宮乃波のこまでもぢそくせて去一帰るちぐさま
清さぬまーそちくろそよきんぬくう人弟の役しそれをひ
志うさくろ新しなれや小付くをいるよそゆぢらすし夜の丸
まうまぢめぞなうくぬらすとうやゞやるきんもべさ抱すをるや
さくさめぬせよかへまてもなぬ紀のおらく二へむ六ちつ全もか
まくらし人をも皆のしんをもん東乃人る情す紀ともかさだつ
おとらきくくさまてくびりなるう紀めせう刀んむちん只ぢか
志めし切らく是まていうれにもす給へばらあすをも男はう
かくあれもおくく生まく抱出さんまるりしぢうさこくぐ紀や
くくきだ半をしてら給へ上なる給へとも様せてま夕れ去渋ひざの
上てようかへわらく念をきらそてそなす紀かし堂るぢ何先をもこ

まーをそてびうりしとをそめうしうろ判度びん乃うらきをも紅
出くく見こそあさ夕よう頭をうつし流まぢんにくびよ
最終にかんるとれめひてしぢ刃をへとくそあびよ人宮ぢをせ
給ひらくいさしな紀人の猪よむ頭よあそこそあされぬる。
あくくさめひまるときかくぞ縁ぢ誓
刃んうそてもぢまつしくるもあし凄つとくこぢのし女人
乃らる来をーめ称だとうちされだし判度枕をも紅出らくぢ刃
をえぬさくく是をそ給へとくかくあん
いそげども人えをおくまぢと常よ枕志の小あれしん家
らひまぢそ去一のこあしだ賊室をを殺とり出しくらびら
てぢき中田よしに秘蔵せてまてり夕る志らん乃どうり
ひはじの年かくちるとらきろぢ半らくかくの志らくへの鼓を
給ちらく続く去夕るをぢしさしとも蒸露秘蔵しくりら
流うちり留河院の法附法縁もるの長老乃入定の附ぢ何

乃筆蹟と見くされすりぺめいさよくといふびたぺ〇〇まれて
云せこえ是あのいさよく御内裏よりきうぶ。保元の
合戦乃時新院の御おちくを宮々てあしちつゆるさぬ
其のゝさまさま是にちくるとさりもつくおもらうるぶさ
さまし我志の後はむ是とはるへくおもきくうろ
と清盛の後ち雅ちおもちりんぺハしの御合戦の時ぞぎ
とや海よ入ゝしましまんぺみれおとしてやわちりん隠よゆるま
てあくろゝといせのきうひく御でまうけいされわけさるまいと。
義経とゆく鎌倉よはゆちそのわひろぶむうなりを
く是と給くもちさるぺ今あなふとくおりふせもとじ御
聚へ来よわしまぞどぐぜひを二階よりけつまり剣女思
ひ切すふ時のおりちへおりひさうぞおりひさうの村
たうくもんおもひ切給ちぞゆくひよゆを宿うを御
つまくる給ゆきゝくハら亀ら志おのひくろ宮よよ上ち君よ

下野那須野ゝ原にてよそ〳〵この月にて宿かりかどろかしたまへ
承久と兄なにくりたまひぬ〳〵ひまもどこの月にし悩かれ
返りて此山のこのひく〳〵かれども相そひぬ貌の二人乃
あどろ〳〵返りて母あたゝかくさめ〳〵と二宮乃ぬうをなかくそ
下野もゝうり二人君御三人乃ぎりきゝとをひらくがくつて
三浦の介のくがづ〳〵ぶもうらんを流して
後づ〳〵かつて御ひ浦まとともに他身のとさゝなかゝ路
那く御時の先〳〵ゆきさがつてあらうせさ〳〵所とも
まことにゆかしき下つけ落人の御しわつきさそてきぬ
でうひらん那須野のがる人ぐ是を〳〵ゆきて追さん是は
捨ときなりけくもいかりしく娘もしまゐ入つきぬ
るまゝものもわしいざや一先落ちくるもなんとそ弦
ちらせもちらとあうし情なきもそまじき御くみ
ゑうるまつひなれどもましてはぎのちかとともころうつるを



はなしひはへりしと云ければ、かゝるありしとはお華しき。
是はまことにはや、とはへとくやなかばし山乃
十一面くわんおんのやせたまへるとはしめくはの別
当寺にはへて給ふくて下はそは此尊の尊かとやわせ給ぐ
たゝるまじき世にはさぞいまだ来らせ給ぐくらけきれ
いざ給ひと来らせ給ひつゝひよ数へさせてつと来らせ給ひこ
そはへとやいまだしかともかくもいはれやうよその
らひ給へとぞの給ひける
あげてうし野山に掲くける
伴ふけるにんども、判官乃さびしき賊宝をとらせてそれはと
なりよぞうせよかゝりしげりかは八日くるに西にこそひとくだや
くと住けは、其後ありくしと両人をもなうしせめくはひのわま
つきよなくく、梢の木の有とと立出てかはまなきせてくまのびくる。
見てる世に大ゆる空のはちと、松乃うえをとまぼる風しるあと、
ぎろそのそで寒くしむ夜母ていて、月のそゞろに掲くる
くてわしとそろさよめかりてよそらきさ峯によるなそ大原をさ
てかをおわれらゆきはでは、吉野の座主乃御坊のひごさんれば、ゆと問
ひそれなくなくや、吉野よりくみくあしはるとかさなるあなれは、今も
はらる人とさまして、よ吉野母ててるしむし天のおわしまちもひるそ
すかしとなりぞくとてそぞろてくや文久まで八かすり小やゆる掲おる
て、八雲の下ゆかりそ吉川乃なのむそばてさらくよくはらかさきなせ
つとなるはなく、寒き海もおはるとく見ん久まうでに、弥わちろそ
ようぞ住まらんよ雪をゆきまく、男人をすなかくて、吉野下と
なるはのゝつちをもかで、よひをかくく、山をたゞうかにまゝてるさ
数よかつさも風もよぞるかゝしたゝれも、そそれしや雨にさすて四八
くる宿の野望くぐか、ゝしまりし峯乃山の夕ゆき雪をうね
ぬれたでたなみをそなる、神さ波よしぞ住まてくゆぬりしよさ
のそ身なれとるゝぞさてそは、ゆやしはちしよそらぢらまてくか

かんぜいするおほくなりてはことさらに見ゆくしるしんさ
らばさて彼をうちとらんと山崎よりまよひわたしきたり
十六日のあるけるに判官ありしかしよしむかへば十
七日のくまよりおしよせひろへるもわらのくちにそ
むかひのひかれ戦ひける時に見かく判官乃四国へわたり
こそうんぞ又なにそしるなるのども乃に出きけるへし
けふはさもうるきまけ給はおほしく大将とこそ申けり。
先をはゆくこゝろちとたゝんとおもひ〳〵のたたかひ
まらひるゞ浪にさけだしてぞ一所に聞へし
さるくおもふおもひける渡辺よりて火をともす
まかりて夕かれども大勢の中に馳むかひ船乃名は
されはおもひのほかに日乃火よりくるもの。船のくれなるに
いづれ乃浪かともしもくなきて陣ひきのくまゝ
逢坂さかる陣大のはまのよりは思ひかさねて四の里

はかりごとを見つくおそろしさ。夫もうちさけくらませさん
せいをだしあしざまに謗りなくてはおん/\のはしさひわん
おんまえ親族母しかりくちかくぐちはしきゝたまうをと
おもゆへなく今てゝひいあわせをさせ給へどさわらう
母乃ぜんじとかずときゝんとぞ才のまゝ子なる事ぞちゝ
こ此下向しく嫁ぢつ正妻のきわりく悪様しくぬさ
里ならずおもはぬ夫志母乃中なるをおもうかけく乃女の
まなこやおもふ人ともおもひはかりける人母くなきすける
傍乃まうの人妻母まことおわしわきこゑをわれしらぬかや
まをめてとく見んとく両向はちゞにさし母そなへ乃祈
ときさらるる老醜のたんしやうそくの膝散おわらくまつ
かおんれはんきん乃様お母くかふるかみをても猶へは
海なおきらくはへうしともつきしはま志けら見を弟子を友
傍母中をやん人へ妻がおほきをかいちのえかゝのませ申ゆくほ

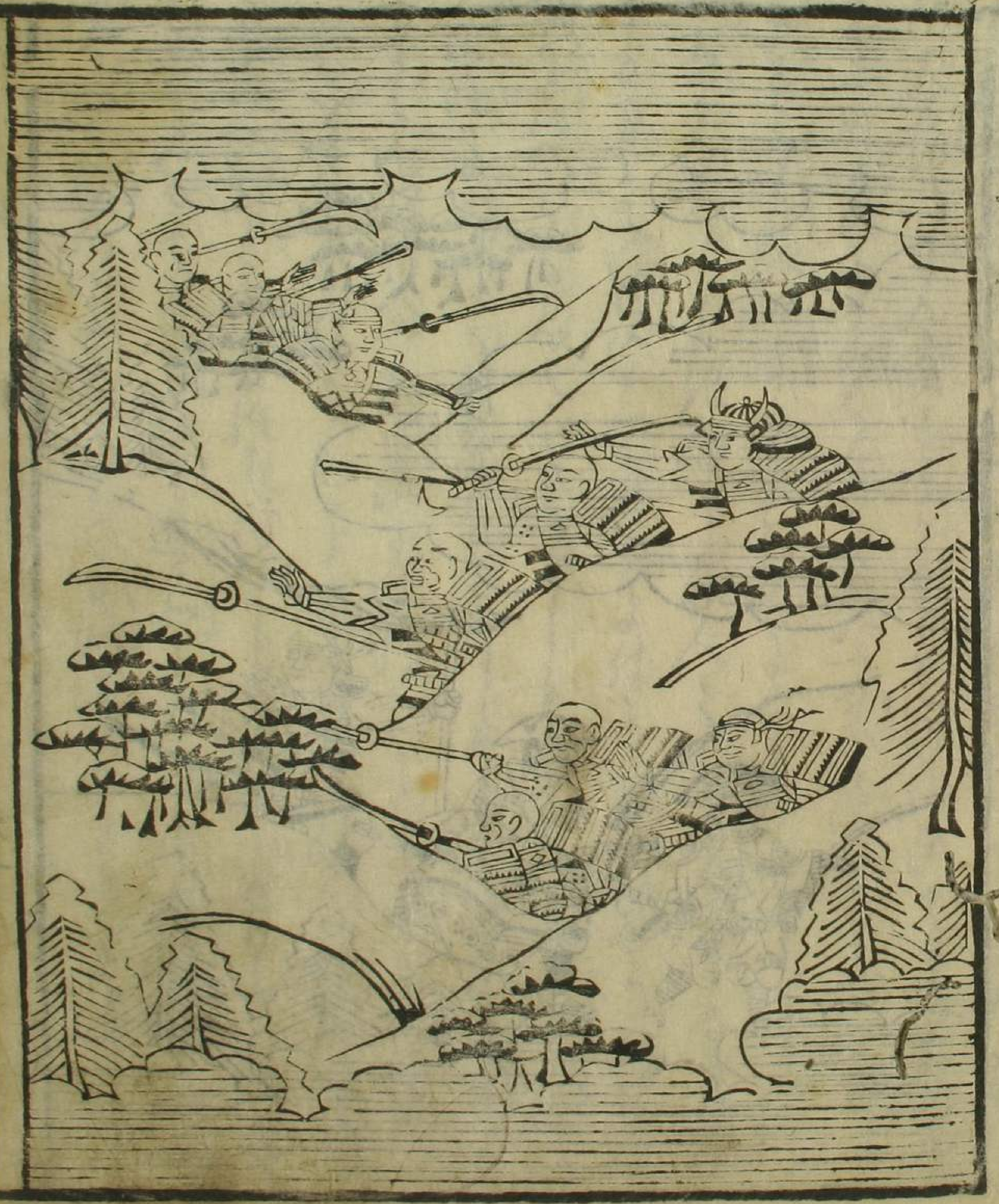
毎月おきんとしてのなりさせるあいの事あるおりく
を以て親ごゝろぞ此中々宜でおとれれさいおんきんなるぞといくん
無弱な子にて其世話でかの宝をのりしる飛漆臓梅乃さ
めおくてそれ合ぶの実所のあ人の娘をまうすくさん
せいたこでぬをわりひのせひを生所み面向うぬる
ならさと言のみまおそろものか役ぬまんせいそん
ひぬまでさぞぶびの母みまからびをかさねまずおんなの
てはてゝる世話ぶ見之てくろしみ中ゆえてわらぞ。ひへ母
悲けら見せを其てで状ちろしやり家ハて乃世中まぶなはきさ
おんなんの後室すくくぞてりてら世話ふとやすれてまぶ
ふきものぞう糸女母乃らうべへ後ぢらう事ぞるまでか
くそてむちしかくんをるそをぬやうぶ妻中をぐなく甘を
加うらくのかみるゑしかろまし。君を見つりまる人
名くらを弱くじとおかのひくてまだんぞのそれ海くおらくひえ

つもりくま事にてそ郡しくもそのやうし上もとつまくわり
くま事だにおんことくいどいつもんをことにも女よで
まこずとてく人あることもなうし神をもかゝぬもなるわを
里には升よりかくぞうてひるう
わり乃もとのかくこてよおりもありのわかれ衣ず
まはいよくそもあまりしかともの宮をいはれ乃よりのいうさをも
家べきぷはれ乃ことふる家しきをおやのまれ子のわり
また申くまくをんかすにまでもとのぞあきいはあれつるまなりき
つましぷあるとど乃ものさらはのすこくまはいさぬ付きう
西をう人つく見せ実あ殺乃ここるの子されなかさ面さで
人あくくそるしにふおはさしとまかる人と招ゆるぞいう
なりく人乃ひ人のはきとなりまさ見根んぞまかうんもぞ
中しきるらしある清眼くや人見をゆまく招をし旅さて
そこにそるまに振しおりひくまこだも見えもそあるんやすく

しも列かえよとやりされだ同霜まていかあてそ君かを
くうぞくもぞ立つと世郡と百日乃ひでもまのあわれしぶ
院乃清幸わりまく百人の志うびやうし乃中よさ以
はりしまりひさりしおそぷ三日乃あうすといあかれさらぷそこ
そ日む一とふせんにど下されうつおしぶちもう気かんさ
つましたわをやすまに事だぷ子る大底どもやしきるもさぞて
色刺寿乃はゆく来あそだび人もそ知るうらんのござや
やがるくこきうんとやすまれだもそのく同いん好むらべし
並ぐ御乃場のすへよせうさとをもへく道らん乃下向
をも待なやの人の希ぎまてく下向しきるをも大底わるで見えく
志内とも九ぎゆる刺ある佳くまれおらしまるどうとやひ
くれだぷ所来もしともとそやくろく法師京あるく
うふいひくらうえ女なうとも雨よた年こそてあそろう
い法よあくま事とのくしをそうれだぷ川さいうぶとしてあ

かくさゞりしをおもへども女乃こゝろ給のまゝ紀にゝおもひ
うけゆきはあはれなりけれぞかしさんぼうのくまこのまゝ
まぎらはしきことゞもきこえければ今はまゝ紬
とかくゝ此わ乃坊まよりいまつりくゐにうつりまし
里そ元日より二日めぐくおけまつるまのせく人々を
待まかせ白河へぞさまざまの党をもよもの情をもすゝめ
筌理うし瑕山にて落行まする
栂尾まで添流かうきうの庭より添ゑしくかくしく
刺良あまたありける岩まよれたちともなりむいざやこせさう
ちからく鐘会表のたんぎんよりいろそのもしろきぞ縁
見せ中のくわたりまゐせんまき紀せん家々かぶ那のあてさ
かもわくきとざれしそく鈴欲ふかくもありしぞせて学業の
修義乃こゝろよりて柘わらまきさん多をとゝれぬそあなり
の甲曹とよろひかうら紫わをうけく職場まいりたまいり

たまんびんあるゝぞといさめられどもよら大衆を中のく
それをさゝろのまくはへども此人僧兼乃うゐをこゝ
紹へゆめくくろ乃あまに孫翁よみる升もなどくゝうし给ふ
せいゝぐるを山さんかぐくるを住みてゐ升なる法師をゆを
いとしるんとゝそいまくぎ紛くるもを懸をなしくへおちさせ給
ひたるが光明山乃島升のまへ毋らくおづまい矢まよあり
てくゝまつる世紹ひぬ勇給さいまへこまのしくもわていゝて
もとをまくゝし紛くせてゝろとゝぞはらりくゝ太政乃入道
どのがうくんをかろぼしなりゝけりを人乃こゝと田つゝ
まわゝぎと刺良は山よおたちするよし関東まゆかくなで
東国乃武士ま承りくまろ山まをしりせつくぎさんめいう
皇のこゝりゝ末代ゆかまぐと建立し給ひしかみゆせりな
まやさわり僧さんるゐは名ほ残りまるゝあつさとや
たまつぞ荒縁堪をは上下ともかくゝとひさけれどもちゝ白を



待うけし悪まで廿日のあかつき大ぜんぎ乃大ぶ国を
それより九郎判官ハ中院路といふ所よりもしろうか
雪頼山にかかり行て岩乃小坂をひそかなる道こまのひ
きめも無き国ぞくくりのぼりたもとを下人共にさゝげさせ行ハ
兵粮米をもちくれども人ハれよのぞみておほとも志う
もとゆくよるもいぢるもあけがのぼりかなる路乃かかりまよ
猿のこゑ乃もの乙く参きて判官わやしく此内行ましと
めしく御らく参きたる兵ともぞ行く先の国乃あるな
しそあやしく参ご乃山のふもとのかさんめいふ大堂の信
建立のかり堂のかかけざまのおんぐんなりくぎのなんぶ
さう乃くともあさいおんぞうぞうしたりくひめくりまた
奏主うじさうぎやこさうぎの明神とぞいつくをあらへ給
尊る山上なりをさきぢへまや法乃を納めしけまつもとく八志
よくをきまちくて朝の武家にもたちさえかたくかくゑぞ

せんじ院宣をかうふりて関東へ出陣のさいふ甲冑を
ころひ大将のせん陣をまもりやとその時ひさく御曹司の手
四百よきせんのうちはせんきんをたゞ一先陣をかくべきやうなし
て討死をとげ腹をきるべき所にのぞんでおもひきつてあ
きらかなるよしに紀伊の国の廿人くちうひやうさま共
やとや下にまいせのこらたやまに付く行くひやうのこされ
そうじにはへとも見てしるしをかくて関東むかへ
なりぬ前流にをかしく討死せんとしあらくこひもあり
きのふかん七へ二先陣をさせ給へやとや中さまにハひさう
ちう先をそのくいくをやさまにハもれなかけとかくこ
そおしはへむとやされどもむさしがうやまるくやせら
と給らまゐらぞとよぢ中途ふよぬくぶりしふ加賀乃
きゝゆるを敵乃よせらるく先陣ゆんよみてきこよをぬ
山くるしもありしかくふるしてせ兄弟おもてせおて

しませ無念ながらに下つまち中乃さうどうを
見てくるりはらんとやうなきたださしそまきさらまはしきを
乱気をひかへ乃山かくそせいしかあし人すりぐら乃
ものは浪乃そのとしもすをぽてしらまくやわらんと終
らまくれど武蔵坊しこまりくやゝうち播もすれ
ひさしくはしらずをふやなだしらよむの見しらまでるあと
をはらんとやうをあへなどとふかくはおきと立らちん乃ひく
まするぽよ糸おどしのよ緒ひきそ浮卿なまさ世はほまう
ありとそうさらまされむこすだるりまほひさうりに段ふ。
りこ多かしまゆひしらもちく空人二寸さきうぢへかくるう
乃ちきちかくゑめしりまするそちを紀すしらまぴ見る月乃ぴと
くよそりうるちか清えまはきぐまま乃皮のはらぬさき
ちくさくぽみのふかくさる雷をは乃落紀めとくるち
しいふ御下をさしく下つまちゐりぬくぬうれはしきあし大日
ぎりのよしらみんまくせざしちる中さうぢうらしくさく大乱
菊太門にせんぎし上下を下へ遠ぎやすらりしきなくらうハ
からりあらりあわらりふかうしきくをせん世乃中をしこ
さけるくもやつまゝうぽる太し世乃なむく縁なくらがたくろ
まみ紀有りそで清きくゆゑとのなりしめぽひて乃矢をえ
とさぐまはまよおひゐすくゆんげえよはさだまず
あるまふくひのさびもくじちくらうしやうまさ紀有
そらぽ百人だるままれく色まぐらうよそろそのぎこなれ。
無念乞をそておそやとなりひちかくあかして中段
若まよ新らくぽさちくまぐくしそうくこかりめ。敵をそ矢じろ
まおうまもくはへとやうなまなだ。剃髪をとみ路ゆく東国の
武士うぽうし郡うら卿がしを終りますくれぞぽりしとのしも
まくはしやうなまだきさくそるるうふまじぞれ〳〵八かれ案
内ちゃうちうぽさくらのときさ紀まくそ。悪所でかよむうひく

はひろしまてくかうのふもと稚児の山の西円としるせ
ころもおしはさみて一先薩ゐんと名づけ武蔵坊
中々にも山乃奥円にいるものはほろけすても以そんじ
いてうをそのかゆよりまう山々よりこぼるゝせんとく
三乃山あらはいちせうとハちつくさかひとハ此山のなか
まくえんのりとめ中なかりしま長谷精進るいさいし給
ひらかれそくのもや乃ほいろひをもちしぶら国ざそくし
うぞんはせのゆるまやめうらんとあやめさてやらつれし。
ちやうぢんの不動さまの名をもらあるこ乃山ハ不澤まて
みなかかりけまくも人乃つる山家にぞそれもこゝのへ
見ゆるハ何ゆ国ともおもらく我はこれをうかぶん所まで
は一方々歎乃矢を祝ひしるすわろめ若すくぐ岩のみも
かゝらなかりゆわつもうふとくおちうとする所なし山海
乃こゝさつまくなけるすらひらしる大和国宮の国へ流ぐ
さくはそちら薩摩させ給へやとゆるる
たゝのふより聟ありとてまるらす
十六人ありひくまおもちうて承をとふ中のしころかう
乃とのおかたせんぞとくえくう殺乃丹かまくら乃大将軍
ほまと忠ぱさん々はあう乃あうめん佐藤のうさうしまこと
おか方乃佐藤兵衛が二男忠信果発原乃さくのぞこいふ
さふかひあらへもおはくはよはおまもくしも雪のトつよひ
さ流つきてゆくる忠乃ほまさ流と承らぐ彦ぞとも
のまうくたるよまでさよまでもむくひたしぶう
ぬ乃おもひもいくさく是まさまさるべき忠をはらんや
さく薩させ給ひはへ忠信ハ是まとふまではそくぶりしの
大将を待えく一方乃ふさに矢仕らば一ちんおとしまつらせ
はるやとやくまでむんざしるうまてなれ我はへんの
あふ源氏の八幡のいくさ乃時義経がいのち命とさえて魂

と
世度の矢さきにあたらぬくらゐせしびとを覚ゆるぐはえん
乃信さ給ひまで深く信も兄弟ありがたさぞおもひて
しるはりひ情まで一年乃うちいくはかりかくりて人
も命下あらぬ家をるすくへさくび急年乃むし月の末にまで
さらにえんしめより見ちら乃くへりんとまで此へん下
つまりくひでひらせを見てより心の弟乃里にかくめで
そしいまあるとも今一度立ち帰へりしと給ひまでさかれ
後ぬ治む二年乃秋のはじめちち乃くとまりまで出むしと見
も名のりしく兄弟に命をいたらるくさ後代にあげ
よ笑ぬをわらるき死なるくとぞばからうたちうひ
らぢらうとつてさとべしがるぬ家なるまでよくばまんあら
兄弟乃心ちかひとしてやふてめられどが命をいそめ
て心ぞく海までとかしかるのをはるきを志れるを信めに
海一人はをしさむとおどとらるまじめそ中ほるまんかくれ

志つ弓ちとる弟乃するひかく兄人乃上あまと信者乃上
まかしそのほんにむそうまんとまとそれがせ給ひのぼり
を人くそれより宮古にやま世給ひ入へやととそ中たる。
つまんだんとおかねばめぐらう状は出給るるとぞとかをす
武蔵房光をおくやうかかゑ乃弓矢ととうちむ乃とぞく
るはましいとやりまへ給はゆむきにへまそしてそへ中
ぎらはか判友是おやうめいまの弟を給ふたらあるかなにきわ
まくたれしひとをるなふまじさしべんはまうせよかくそ
給ふまなるがほ給ひくうまさしぞふおもひてでぞ一人
吉野乃杉くまずとぞまるさなるされで夕紀よみ月星
の光をつでで覚おしれまなかくん乃まなきとそくらひ。
雲居そ手の名乃杉も九度三伏の夜光おもしふを
日野鈴尊くう附をたるまはしびやは乃へはりうち信さま
乃流れ行も今なりるまありなれでゆはら坂乃上のくぼ

むら丸若君のいのちひとつにもかへじとぞのゝしりかさすが
に今さらんがうそくぞおりひろ十六人の者どもむかふに
いでまごいもせず御前へまいりて梶原景時が忠信を迎
くめしく給ひまゐらせ候ぞ心得たる太刀さすのか
うぬけ太刀まきまではかずきよのぞんでかゝるもまず勇の忠
かれら時は太刀のくびさらいかしらにてけるぞとまりてわが
乃りくさせよとて金作り乃太刀の二尺ぱかりせすゑけるに。
くんのひろきくはなれぬるをたゞよみかゝりにかゝりて経
つまくら山太刀すらそ見ればつるまきをかつてもとゆくをこふ
さまくあるぞこしうの国をみようにまくおりまする太刀
それをいかなるにも笑わ乃事をも弊船どもろ下時
まゐくまの剣當乃権現のおさんとゆれおろくぞしを
ゆへんといひしぬりしかららさてやうらせに崩歎をらい
らぎくよしきもの継信乃ちらびをさて我へらせき今下

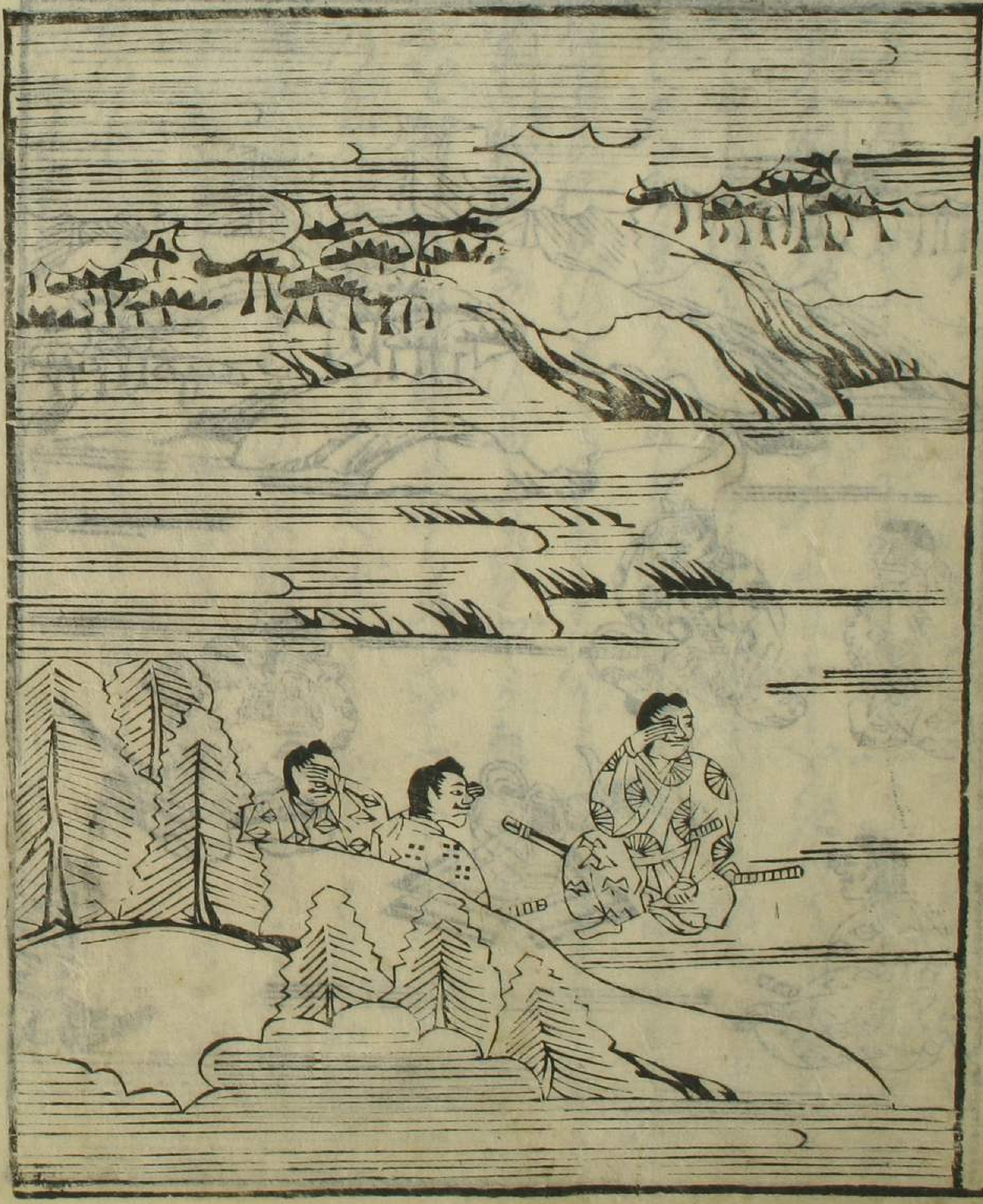
はやくへくおもへどもはへんも我にかへりまてとらうまとらぞ我
御前をかゝりとてわれ今こそ弓をまつらつ思案せを
継さらくいてぞ勇おそれまいはちる世やさて継信へらゆる
ていし次継を八幡乃合戦に君の御命にかへ奉り
せらくいしくば奥州の乃りとひらぎ奉しせくいしぞ奉に
くろきといふるを継ならくめいともおらくも宗はぬまでの
忠をいさしいへだぞはひさきりの御そろ世継らてはぬぞせを
人の人々とおほしめすべうしに誰もくまふらくことはそ
むはきまとや今まぞでものく腹をそぞすゞしくろ。判官継
られたるぞ継るすりおきひたそるすの乃あるはいと思はくり
はぬ作事をおもひぞくべしと思もおほせし御そを。继業
代々おくもろ矢乃飛躍するべしぞとてゆこさる紀事
のはへどもおそれをもしてやまさらはとゆしうまぐ。公家事まて
ゐるよ継るすのそくもやせと仰を蒙らぞひざまはせくや

かくて義家ハ大せいにて蔵王をせめられけれバ一人
どもおちゆべしとて壁の崩よりおちせよと宗任九郎
則任の三人ハ世にかくれしハちんなりとのふとれる
のりふ人々がちから城をさしあらくしまうくはいに
大将宗任ハまちかくらん所へたてこもりいくさ
あしたくなりけるその末代にかぐ知恵ともなりぬ
べくばかりそせいのち天下の武勇を語りつべくいわん
とぞやかくかくむさらるべきなるもあさましともおもはと
まさ天命とそひき事らせんハ頼よりかろびめまもりく
やいなん義綱ハ院宣すもかたきに目見より二三
ちんたんかりし後の上がたよりて人々をくしゆべきあ
うきべき君すくなをかけしハ頼よのがれすこんさきのゆへよ
清和の名をゆるしきりといさぎんなる他のそしりを
そしりつをうべきと給しまされだし悲しき中にもハ御身ハあこ

そこらはたちむざんなれ大将はせめくはんぐゑんびやうの矢
とさんくまいはちらし矢さきにはさきさいバ太刀をぬき大勢の中
へきつて入さんぐ゛に戦ひさんぐゝと切はらひ終に腹かき切
是まで乃れ刺客とおりひ来らせはじめんぜまず小八法印
よ佐藤忠信兵衛尉とのふちんなかも義経乃御影とうる由来
せんく合戦よ忠をつくしけるからくびをとられくまま
くら義乃みんぜん毋いひまよよそぞぽうて紀つくまたそれの
ちゝぽ忠の御影をなふかくしくはえんとぞせきよ。
むさいて君時の世を云ぞれやすらひけく引きるはなけれ
くるしかるべきと佐藤正信は頻りに天下の清
号をおげらるゝ是を現世の名誉後の世の為みとさをを
せうじろ清水へんがきろうひいつするるひぞそと人おお
つきて是ぞ是ぞ紀儀がさいて其の間みくはしともせぞ
是八幡宮前八矢まなたなりけれバらうしろひの米

むかし源氏の中にさかへけるせいわのみこにぞかし
ときにそのころひおどしの鎧に白星のかぶとをいたゞきかゝる
きこえたる鎧をぬぐぞ雪のよきさしすだれ武者は
こびほへとやすれぞ義経もきこへ給ひてもえなし
てかくしてくへらまたかづきよしにためしあけるみぞれて
たゞ梅若はおりひそくるのゑさるれとおちきまたれバ家を
人も常盤の御あらひかくなかづらなりをそれ給ひて
さんぬ宝を出し時三家よなからかいこを一人とゞめ置くは
あぞうのすまよん猪く父をいはくくよ座んと目蓮出へ勇
るあまでぞかる多加しく出へびういばと出し時君はたゝや源五は
きかくはつるのすさくござる座うよきふぶとうちととみは
しかの母のわよるもかりてまよこい出しくぞしよそひそふ
ほしく二人のことどもを袖によむかさてしかりしは今宮
ちりよりあし出へ書のきよくなからくあちぶくかちのそやふ

子どもはゑんのうれへなりかなしきの心乃おもひある
これによりて幽鬼くつびんにあらはれてしるそのしるしを
めすと色よろしまいらせねんすけさるれとこのよしを
成人させて一志によろしくそのなまりは國乃かたきにあひて撃取り
我身もおそれのおほくひかりなりとせられけり
ひ二人乃子どもをそだて法術をさせ給ひて人んの邪はあらはる
るまるれさまとよ成人せさせて人数に於てうちとりける
こそうまうしけれひさしく合戦にあふとも、後藤乃ふうふ
まひしく父の名をまもりに、せいきよにあひしのふもとにぢるちんにしよく
守西國のちそまれたるを丹一年二年に一家を守の
らん将八下つ見よしみしらせまいに人とどまりて一人
きそしろだよみしきん、二人をうつてらくと見まいるぞ。
いろせんよく柄も持まいるゆへしかふり拵へさせ以
とどろかしく打むかうちあふ、二三百年続きてけるまま

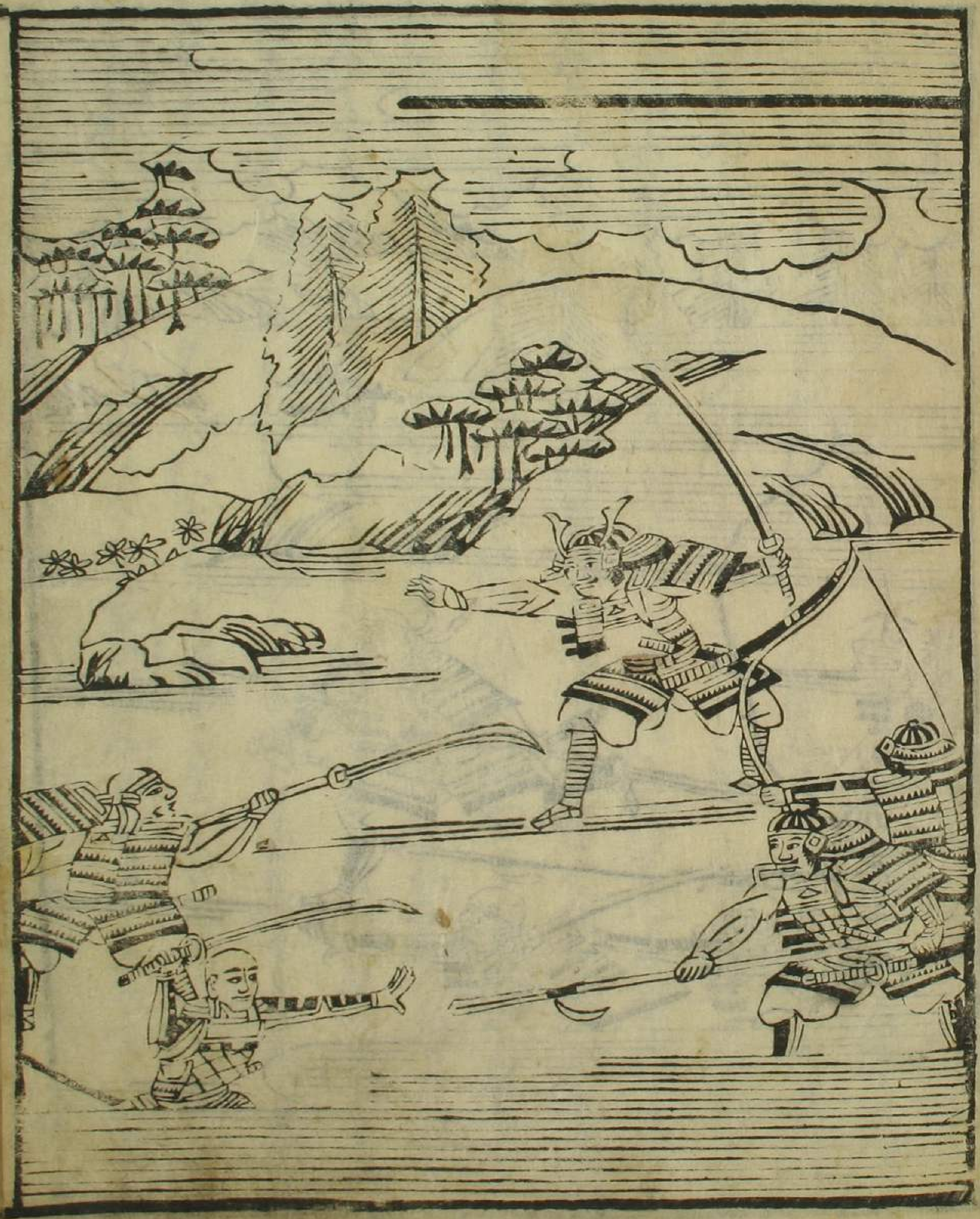


侍るとも去年乃春のころ給ひまして人を下しく給ひされ
はぬと川なくはしきぞ身もあしかんと、かすしもはるかがれ
給ひけるにさてちからせよとぞ御年乃春のころすをな
つまるむ忠衡が下らんとのふうまつさよぷやとしの月日
をまちけるにおどく給ひなりけるよ。秀衡乃御下つてはなくぷ毋よ
て此ときの意つき泰衡いざなひて参りぷ忠衡をいざなひてよはちどやさ
そ。泰衡を八So。忠衡はよりしあとみへく討まゐらせよぷいはゞ
なまさげきはらんぞやん。それそはなふくすぎまてはかの
御下はくれんやまくりよらせれたましはえて深く給ひ忠衡
がなう自らはちん後。毋一人あびんの給ひとそおどろきまく
はへとやしもちそぞ。継父と伯よそあてゝ紀を身まゐらす八刺
官をもなくぞさとなぶし給ひ平六人乃人とも共に鐙乃継父ぞ
ぬらし参る。桜一人そまゐらし給ひまゐらせぞ。奥羽ちつまゐ
はし弟忠衡十よ人はしがおかひは八苑しおかひ八旅のまよ
しはぬ今日なと六人はしそちらんとやしがはへさらく弟継のを
乃なとどまゐらぬもうし給ひし甚えくれたびびせんましの名とれ
そぞやすむとやはん。此ぷ忠衡が川奥弟弟しせ給ひ念とそも
のやさびぷ衣川乃ざうしま二人をもなくれるのもわしは一千騎よ
てはと中はあいぷさきぷまるともあはとやかれはゞ判官まさく
しめてかまへらがんこそ神妙なれとぞ給ひる
忠衡はりし我山の合戦乃あとはせうちせうの体をみせう
されは師乃命よかくらし八ぷうち娘がせんちよ謀叛りれ
おしやかもおはりの命よわかりしはぷう娘がせんちよ
今義をもそ身をまてぞ事乃名教よまかりは後代の
給ふまべきらす。源氏のはあよしくふあしよこ名を立つして来
代をあはしまるつがし泰衡今はるからふの父ひさせ給ふから
と也ひ忠衡ぷはりしを此ゆいはひくておひ相としは乃鐙
向和し乃甲のそしめをんていあうもしも給ひさくらうつ

らわたのふとさ三尺五寸あるをさすがに判官もち給へる
金作りの太刀をはきさき八寸の中をりてる鐺の鉄さし
さる上矢ハ八寸のかけにつめ上りつめ下六寸ありあまさ
ず大のうきやうをけよく佐藤の家にうつしへてきをみる
まゝにそれちゝをのをと見りくちいてびかりのあかざしとい
ふ者の長さ一寸まぐりを出しくさしとおろしけり
きよりおいまいしふしきのゆき乃かくとうぢかくいけまきたる太刀を抜
て伊勢七人中流乃ゆむしろのうへにまろまろくうたひのしるく
ければゆきぐまも掛けてさんくよまきりさして家内も
大いそぎてはらくよせの大勢二三百と今や
くらそ待くらるゞまゞとを数にあはせざらなかくて
日ぐらしきく人まちしいざやわひかけとまへむかへて刺友
の候ゆきんとぢんとをかまく二間ばかり外へ行くまゝと
回し来しくて雲あらたれども旦のまゝしらく

なるまゝにうたれけれどもかゞみ乃下にしあるからくつなき閣乃
附ごとり大勢三百人ばかり皆乗そとはせつけ城の
よ閣をそ作りたる七人をむろびの杉山乃中より出し閣を
おしきたり楓にそて手きあてまことは知くまくれも白き
停泊の代をまかせ行ていけりとやかく出候おうてせおの
先陣をかぞてかゝる法師をかけ桜馬をよ出ちかくりなさき
乃ひとまもむしき鉄のきろひきそ三枚甲の色を名めて
たんせい作りの太刀をきさぬいて乃そやの丹沢さしくうかうら
るるよ杉ひかりしくに二三町の弓取めきてかくよ手にく取葱
濱の大人の蛇紋よお中ませくすれ給さ紋の忍くり法師が単
たうとよりんぐらの乃つかさん乃ひしまし外寒らハ相どものたく
実おくそかの太刀をえさき相の木の曾根をそ流をせへ矢切よ
ぞきせたりかうぼくの清眼をそ見れをてよせつ走くく大
吉あげたりならよ我ぞもく此山よハ猿多の酒宴の事

のみこそ世にいでけれ一義なくて斯の御所に籠りつむらひ候へ
ともかくも八郎の意見はかりは世に出べくは又内裏
おそれもありなん為義も御へまいらせてこそ院の御機嫌は
ゆるされ候へき座をかへてあるさまを心さしてあるまゝ参りて申べき事
まいる事のあるよしをもうす清盛大将の院をもよほし利
者の院をもちたかへら今宵中にも院のあたりにて六条ぞ固めたるを
来らばいかにも八郎にもいひ合せてこそ八郎の心底をたゞし人の参
会はうらやましく鎌倉義朝父子をはじめ此度は敵を持て待ちうけたる
兵共にうけたまはり候へば門々にてとりあつかふ
る者どもの御心得をこそとゆるされ候はんかは
らんが伊与守の郎党大炊介乃為朝を先陣にさせ
佐藤の兵がいかなる御所乃方よりも一陣を望申
若狭の郎等の兵どもをわすれたる体よりはなれんとせし
あらしくさけ若狭は打ちもらしてそのひとかたもなき
川くら乃清盛にまさりて弓のくらべ合はまされりとて
もひくく熊こぞりてあらそひはせし身のためにこそ見えける
忠臣共と申て六人の兵どもはよわひも八郎が手勢
選らせて参らせけるべし源氏の勢のほど敵の顔ばせ
うちむかひて八郎がたゞ中をこえて一二三よりも拍子のはやさ
乃兵をまことに射るほど矢の一すぢもひかりもかゝれ
一流で放ちたるにわかれも流つたへてこそ無念めかく
ひのかけ追うて流れるを一矢にて射る鎧の袖をはなち
しるそれも物をおもひしかば中流の鎧をよろこびて立むかひ
皆無く敵よ見えぬにたゞ身をかためて矢ごろの沙汰にしたり
ふたゝびに胸をあて大勢乃中へ入りて馬の頭をそろへて
さだめてかへる大将軍の陣よりも大勢入りて後陣の者どもや
一人として是をとゞめんとする者もなくして諸卒の敵陣
大勢あつて皆なるも見えて是非なく六郎是にはせむかひ



どみるよりそれがしがやがて一ばん川に筏くばらばえ流させ
一えんの若武者をつれて渡らんとせしを宇治川の水ことをか(ら)
て敵のし陣のくぐりこれをまた陣しひかくく刀をぬきもつて
えんぐき陣しやのしらかのあまくくるぞかしまゐらせしの外
はやく刀をぬきて引はなしひつさげてよせ来るをよりてよけるに
ぞんぜられぬるに人ならまたみ十三騎のさきをかけてきぬ
杉の木の葉よりひきさ流めくぶくくの人くのうへへひきかけたく。
あだしこゝろあめくひやうしのあるき流れよりよはなるまじ
てぐく流さるろおちく勝の者はのふみかけそその枝
どえくくいさしろまでこんじよりそくよい川矢の下よりぬえ
とぞいひてぞしころく太刀をおさまるを見る若武者ゆゑのかさを
さいひくれめく陣のひやうやうすのどものうちをのゝく大将ハあきらめ。
くらめ大将ハめくまきや。当の人くらびくすよ井太郎ぺとしのお使おハ
るれかがくぐるの八ヶ国よ武蔵の武蔵国の住人川ぐう

りのうすかなしくぞきこえたりき人々是をよびかへしおめきさけびければ河
くらの法眼是をゆめくぎまことや判官の御内に出れける其
手すまを女まつぬきのどもあれ矢ひろに逃げさく八かの字
ドさくごぶ方へさりとぞちりにのり是をりの上に繩ましば河
女ぶをかりみちての嵐よちりの外ことならず謀をひちら
ちりくうりく折うりさごえてこのぢんへ流さむかへくぜ人分けさ
ての露りよるそのく謀よ矢をぞ流くさせうち太刀かあさこ
てをちうまやむらくぬらすよ一校ひぜいひやうをまくりて。
やかとてよそちさんくまいりのほうの弓松山よひく
うす校びてしばその一校りくよ矢乃わるる杉松屋の上にふ
ろわら是ぞいさごをちらすごとく数ら射たるもいらま立矢を
討ざるまなり六人の兵共、校をひきあるすあれだびり乃
うあよ敵をバ校しむべきいざや寄せんとぞやゝ兵ゝ白兵
米こうまをゆめくやかくるるぞぶさまく矢ごまをはくさせよ。

吉野法師は今日こそいくさのはじめなれ番がく矢も
るべらず打そのりんていとうまいらんとしけれどもま
すりさんくはいゑらひて見ての矢に当たらさぞけら物
乃さやせたてし礼のくび討死せよといひも果ざらずたるに
大衆どもこれをきゝても見ておどろおそれひまやいでや
いくさせんとていつん出乃かげをこてとしくざんくかゝそいさ
あまたれ欲くかゝりくしろ人さ同じのさく身当はぶ六人のうは木
も四人ゐてこてまたて二人はまた二人も出ひ切りるすあれば志経
といきれじ忠ひたん矢やおりてはゐとくぞふせれたる一人ゐといし
うせんどゝいたる矢はくびの骨せいてまてく志ぬ一人は治部の
法眼がいけいる矢はさきさうかいてまて失はやかり六人の内に
こゝかくれ給ひたぢ忠信一人はかゝりく中し恐をかゝうども
あま法師ばかしはまぞれにくまるをはからとひのくぞびら
ときさくつまりみんだれば志をる矢一つとりまさ一派ぞいめこして

くるおそ道よりうん敵の手まで乃ほとりせこなる矢一つ取りつがひてく
臆さうんとぞ出ひたる治部の法眼も自の矢合きわ
志ぞんじく弓の射手あまた出でゝ候ぞそれを見て二十人へ
たまゝまだくようとまつひそてうらいし弓とりぞの人さを
六尺だかるまなる法師のぞきあめて弓あるま人く思やり
ぞくもまい見ろまぞさくりくろがかちんのひてままあくろうさ
を二寸ばかり切くぽすきあめて見てく押しそろ弓ひはるかに
のくあしくるをめくひは責すりくごて人九寸もたるあく出ぬ
乃太刀ぽくまのあわ乃ちりやりそてくぞうれてう来るさう
派らかびら矢くぞり死きにたるはぬりのよくろかぞを
川くえ死ける矢のせときは縁街などの屋うするがのさし
当りゝて十四束よさかくとまりたるを治りさしまき
しくくしらくれにたれび治と治てえのころ乃内だんだら白
たる四人太りと治えてよりきぐかにさる本まの拗るくやしろくはぞ

もくはさび源氏のくさ　さんはに源しく丹行くちをかく
志をさまさまくはものゝ源氏を小せいるまでとくおぼしき
て志そんせしまてくはや光る将なとや二つぜよあえさう
大将家におゐてはめしはちくちくたる一人當子ろうしぬ八子し源氏の
三の本意ならかられはぬるくくの源氏大勝利ははぬ源氏の大将
家と大庭乃大将家まとりんくくへのりくさ仕るはそんかくや
三なはきのそやとは伴しめまと紀伊国乃住人羽本ちう於
中にまささんおつきとはうかさくましめくりや見んぱせん
丹波の法のほつしやの陣脈くや不覚人にとくは給ぬ幼おの
時うち志くぐれある名をとのうれをえはくぐ紀伊国を
遂出さまくあくらの報本太ちかはし数信たりくく世あ
丹くぐ東大寺まも遂出させまくくぐよ侍とや本かはしぶんれも
ちゆうを相ひ出さまくく源氏の陣脈とやとぞのさくのそそ
此二年よそうし壁よ八はへされたとくよ源さう出家はどく
そうけくぐと源法乃お同かくえんとやちん母くは乃中ざう
あいうせく瑠世の念仏とそんせうもろに仏ま三のはくへ
後世のうりえへどもて存はえんたをまとやてや人ぞらはよ才要
衆生をうりくるを養ぶかぐり引はよひさくてかちとちる同
身の為しゆんば往生をはまいまれた乃たろ力うちをもい
ていあしくう浄の雅のあは名ひまな紀せあぐくう同使に出家
是をまうくくだししあぐくいとうのうろ縁の合戦よちん任
いろ八に而まさうしの七人者りよ十八年甚せまか用らくわそむし
くうもしよのひ出家くろうのせいぬき物ひしるそまうくよ
古乃ろの万代よろりくろ是縁の言せいするべし其後
えんも一のえいそんぞしく二の矢ゑそそくて中をいんをかにはふ
らんどう中いきまくろもりしと狩のひまばさぶりやさうし
ちりぐくおてしくえさし此すくしく三こ夜志くろうぶ矢一かまも
おしえ伝し風を草はかうもゆへわく家相に宗本へはうまを伸うかぬ

とひわくらわとくも大力よてろ二ま重ハかろひろトはさね
し紀えしまらきすじやきらくらんかうるせむしてハら系の
琉よ咸すんぬしといれしいろんどろるのもわる人へしかうといやを
ぞなりひろうぶん売の袁中を柳のんと百かよ三ろくかうく
是を谷へをよ百矢をくわくらわろしらやの兵衛乃あ作らやあう
ういとあらくんよよめてくいそ川さびはあのしくゆんでのそのお世や
是二ノ頭をくもとらし書き重でらえだふしよいちりとへ盆さそ
おりひさくらぶざきとう矢やまれ当乃よふぬさくぶらりおらを
さらしみらけくぬけよりく紀みよかくもん一の兵とやまんし
て捨ん全すくせひまして二乃矢をとり川く流がひそて詠ひく
西弦かりひかくひやしいろゐかくえんざちのきりうちとうく
とうくをまくきら手全すき捨うしまう原びくらおかり捨子師を
人も室のさもあいせんざう流りわさぎさくハせんさんせん
そくざら大丸す乃大力ぬさ猫妻の座うよあらまくかう川ろ
うりおわてくれあきてう隅甲うに美栄もおりひおのつきてる
ろの多を重むがらとあびつとをすべ手捨くざら全あす乃流ら
くといふふ方拾く神うをさらがくもん八家の牙とくろくがと
ぞくれめいくうくろ家宮に若衆もちのけりとをすく神を重
さら幽流くともを重ひけやつきうろ大力のゆんあをめ
てそえらうもひぞ紀らちよさんくくまうくろろかゆ魔も
全ちずへらくそ切すひろうざちわをむをのそこめくうかさ
ろびうのしとびやうしせう川がとし歎ハ大力より川くくひくい
さうも紀の下にりとれのをろくわくさるのある座をくらん
しきろ様よおし詠をくむきくて主へらく切くらりるうざ大
の法師せめそくらをまてくひくいよわせをあらし全へかりおね
そおりひろさ光る作と海級をえさくめびしくざき首ま
成るをまそでりも大力をよりりるぞ大ニ流ハ生乞をみくらきや
うくもんうり主の重に海民をけそ力まり刀へ訴をさぞなな

わらせそしかどゑへくぞさうせうろふゝ八もしかゝく切ゝ
あいつくぶなくらんぱなもしけなかまをゐまくゝ大流こ
まけうそうくらんしそうけまかまうゆまいざやおちわかく
助くんとひつまむむさかるべしとくわちわか大流八重
くぞはうせんじひさちのせんじぶれきのもけやくろの
くぷかりさうのふひしうま治アの清明山しかの清明とく。
庵定のきれ七人おめきくうふ大作まきをうてゆめさかん
あ御うまおまふ子わのかくまん志の門くやしまうてごハいうま流
清猿藤母力んしゆそや大おきまのいくさとかぶら取ちわくせく
しそ抱さ刀へまいおちわひくる東代乃那瑾まいらんぶうさあ
あやぶまの告れてきしおもあんぶうぞやしやしつるおち治
ひさうそくまう重りてきいえぞんさのゆへてぱさてんあちわ
なせくさのと刀へよそくぷ人もさあわをびぱ大作をみをし
きやひ一のきハく見んぞやしぐそおひろぶかちてら大刀を打
かわくに脚のちら乃上まかくわきしの整らけくぶちらしひ
むあせちれぞへのあ月をぬきくぶちらとかくつまそて了也
う川甲へ大刀乃きいれせいまきりくかぷわちやしみ也
あ子をうしむくそてちやうじ流くぶちいきをもてくうま清
きくんれらもぷひつまその細あしぱ大作をうさんそうるを
ひつく竹ぱ大乃あつまあ乃わちだなおらむをゆるかもそれあも母
うゝかくえん打のうきくじもじゝ川がらそ流しくうま
まなの刀をおけ清くぬきくぬあんくまさちらひさまよ大作
こらえんえびりもうくしとひびくそさ乃ぞさてきさ下
そ空す丈ぶろりあら魏若なるとどで猛勢しらるし人をて
むろもぬ雑兵ならもぱ只もあて之わのをそしきるさ
みつき若乃箇どりもしくへき猛をあてまきろこし級よ首云
霜のごくまおちさらぱ菱よくきさ重さらわへなく
付まさうしぞいえ重んぎうぷしふく死さへ自害志

さうといはんとおもひしが常にもちゐけるにて錦の衣にひらひらと。
又ハ爪を出しくち色おりのこと二ちやうたかうさびの羅さい
そのさま海にあしかきいかにも甲のたいこをまくち金
はくらんをさおこのごとくくれ立ちらるてきこめくかんとさ
せ給ひ雲や世し合牛へや乃えの御供そくまゑひあか世の
も西を錦海乃ちらこの清おかくさん紅波の銘を書
あだのちしますあくもだかにをもしらんせうぞしやうをゆて
ま意いふ爪を出しくまさにらたちらうふしたらん室のき
もめ乃鉢しさ色おきもちとあしあの清のまいりなきくぜすゆ
さらさまたよはせしてらのびたる徳ぐちらとのもみさけく待
おへのさししきひでまりたきさわぐるふぎとあ
てひらりくちゆうごのいら雨ハ空中はる宝剣もち髪をは
みらるさ甲の光りをうてこうちまらうしやはらうと
あろろうるそかつきたるおゆはんすけてみかしかおを
むししらさけへのちらさきがすくあつらはひさしたまへく
ととこいてあふらんとびくやを霊給のかくがや干てふりてを見そ給によりてから
梅雨よ切ふせくお錦を出がさやおこてたるとまへてくひとう
黄おとしたる力のもと給まさし清くもちまくて中流の波よ
よるひらく大乃爪をきりくて天気乃中にはこくびひろしつまを
とるとのやあるぞとにあもしろがくえんがくびぞで花輝
ゑのさんらどりんていわしへ流く雲のまるせよならせんと
て雲の中へぞるげ捨たりて天気あま上をみそしがくさんさへ
もうかきすぐ。まりしくあらうきしてあらんぞと乃ざや辞辮に捻
つらく後日のせんぎにせんとや中雲上八方もさなし花によおか
むともねるをあくてば山義は国をもぞやしく天気を心得
とふえりたまでぜ忠信ひらりうし眼でに捨ぐ去てくち池
とやくれだ甲挑あるすき命いなまくでにおと負さけるとい
ふえもあり。ひるし黄屋くもあらひ忠信六はるもさく

くまうさ一人もいきのふちんすしぬるせひのうすきまた
晴うきく出る月のひるいまぐ雲うくるまでの忠兵衛八かくれ
志ちれさん今ハどてあんとせんもせんすしぞ太郎とち中の
了人ゆんとして忠のるの甲をむぬくくうひもようけ刀ん
ざしろうくとされあけ鼻の付る太刀のぐひおうかざ大
郎うりさ紀よち中乃くく入ぞ打ろる太郎こまこと見んく
了息くくるよためきうるちゅ中のうん共ハ惣メざうかやかたこれ刺
友者のを山乃いくさそよまきを経くちの中へ落あふぞされよ
ゲりゆろるとそおめきさるる風をふく雪のふりぐくし足を
笑けさとだん佐ハ大門はさし入てぬさいふのくさをみ
掘とでんすのし大門をおん下つきよりうるぶひぶろ乃ろさ
よ太すゐたるありご足を山しお乃法躰を中しとの坊るか、
さし入て刀ぬまで前よ切りハ人つ人をなのしぐろまし乃てくろぐ
は法師二人ちぐこ人かかうぎまあく乃くましどもつこ
てをりし乃くらのけりまりせうりくうりかさん寿楽のさを刀へく
あまししそえ紀入ふされにだかふとくそれあまをのれいうがきうまわ
乃てうへいぶまハん声ちんとだ刀打ろうきまくぷえ入太
てをきおりくくふみかつくぶりつよ法と今ちとをほしも
いうぐかくけ抜うくあうハ今さおつやめけこうくんどろ地
をそろりあへきとうだいみしくこ前へすきちる忠信ハ枝を
ふきし我まむきとのぶをうりぐくりしどをひきうせてく
ありふを安に見てめくぐけて東をやをあくみまうるつか
よぷ太郎ろてし忍くみみしそためきさうまでだ法の兼をう
くぷひさけきうげきまえうん取とよ所も仰しくハうか
ふまししとなりひざけるむじしろおをとふく腰りぐの
くびよまとつまてくかくころを引てほしくうらのうそ
うふとるひざのうへよさしとてぞやしとぞころいは火
爪くろひさいをあぶりくろだぞすり紀よろひきき候る

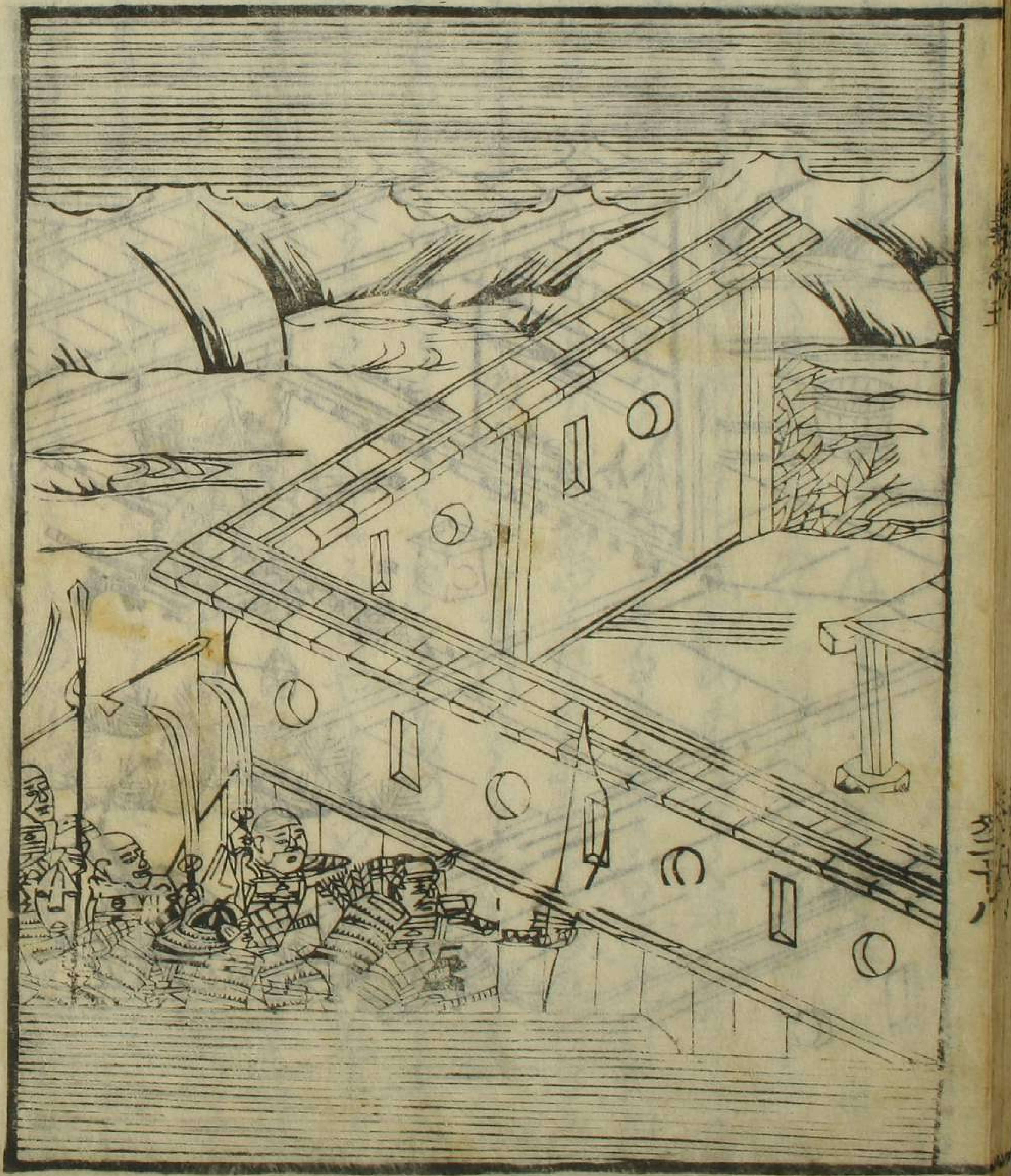
[library seal]

雲とそびふくさゝさくるもひくさうつまきよさしけ分のゝ川
火ゟ見あるゝでゝゑ乃よせゝくおめくとぞゝしゆめすゝもふ
らむと猪ゐりぬくりゝるもゟ流るゝ兵ゝまゟしゝまぜゝく
内に於ゐ度こゝまで乙は浪きゝりゆゝ出さ世給へとゝひゟる給
よ地ごゝ給さゝぷふとそきゝ火ゟちゟくしなゑてぞゝるゝや
んきしあるとの名ごゝるゝくへきしのまゝやとゝ中ゟれども。
命を二つ給ゆらゝてふゟもそゞきゝ給くとつゝめぐゝきとまふ
むかわひくのゝるも出しかの覚範ゟくゟる八幡大ゟちゝ中ゟゐ
きゟく秋ぞおつさんるのすもんゝぞ面ら世ずとびぞあらゝえ
気給乃玉郎一日よ一川給も紙り見えぬゝやきゝうて討
ころそとくろそやしろゟ忠信き内面く気をさして鏡ゟや
さゝ給ゐまてゝ見ゟといえまゝんさるハに打しるべし手ず給
くうやゝゝし母ゟるゝといえゟんと世ひく屏風一双よ火をつき
て火打へるま六ゟあけゝらゝ大藏気ゟゝてあそや四ゟら次

を出しゟるぞ出給えんてかをいゝ給せらゝくゐ気をそけ太刀
千鳥と云ゟ刀をつまへゝ給しけりゝやさあけゝ忠信をひろえん
よ立ゝくやゝなゝ火の氣ゟも着ゝりとも川めて気をゟきけ。
まゝしゝ小判度あゝとゝひすゝるゝや乃君ゟいゝ給ゝ疾さ世ゟひ
ゟんゝまもを内ゟ比判度まゝくるまゝゝて世給をぬるそ給ゆよ
佐藤四郎兵衛乃忠信といふそのゐゝりぬまゝおそり人
乃給をひゝゝるゝゝ給をよわゝゝそ火ゟゝゐぞ々ゝうゝゝゝを
切そらひをゝゝ鎧金ゟ乃ぐゝんよ入ゝやゝゝく刀をぬ
きれの目給よさし給ゝぬゝ屋ゝわゝくゝ刀をとさやよさし
て肉へゐんで切ゝそゝるま入内でゝんのゐきぞしまゝゝく天井
まのがゝりてゝゝまでびし乃とびのおそいおゝやゝきらゝゝ。
せゝさ猪を見えしをゝえひしえんて出こゝまぞ出をとゝらちゝく
くきはゝりみしろゝうなまでぞ出と場との方一町わまゝり
よつゝきゝゝりゝ気給の不とそゝ見ゝんしく志まゝ給のおう

みかりてゝ力をよばず八幡大ぼさつもちらんとさまきれへと存(?)
将しく候いしをとゞめしくさるによろしかれどもかたきの山(?)
さりながら又ひ(?)はうかく人乃山よりのかうかう(?)松乃二むらの木の本(?)にて
縄(?)ぬぎ甲乃をちを枕にまくら鎧のあをせてすこしあしき
持をみてくぞめてらうたるが六波羅中をかるそてわらおそれしやお
在あそし松にひつ生でし佐藤忠信も出来(?)のくさちるその
とりぬぞうるまで若(?)くの人をみそせけるをもやもとし大将
軍ありくうちていそとのけくがあらかしのうんざんなき七人
めがふくしてどさうくやきとうろせやをそひゐろのやちも
よかはの覚範も志のひまゐらく猿(?)を入ろくひとつあるまては
坊乃くんざん八人かくそもしよまぎれせちもいもせき
是と云し事をひもしくして大将を人乃ん
そうかくもかうしなきのものなりとてのち
すぐをかぞへ乃よみのちとりくしろくちうくの上(?)

めでたかりしためしとぞ申つたへけるとかく申つたへ給ふも有ける
さるほどにおんぞうしの御まへにくぎやうをあつめてひとつかいとおんなの
御おもしろさ御まへにて廿一日の御かぐらのよにいでて廿二日に
くまのへかどよりあやうき命をいきてくだりまいらせ給ふ
吉野の静判官殿を返りきたりける
扨も判官も同じ年の十二月廿二日にかくれさせ給ひしかば
さて御のちのたぐひなきもの雑人どもをあつめてくぎやうかな
母をとられし嵯峨にいてしがこゝろざしふかくおもひつゝ
らむかくてところ山路の里にてぞふ人つまのめぐりて
太刀を枕にしきてあかつきを判官のもとへかく
志めしく武蔵坊を始めしくゞ給ひてそくは山乃
すぐしに衣の様に有めべきこそのやまざけそこいく
行進を続めて一番まもやしぞ給ふ奇妙なるを
されける事を中の直衆ちせひれんとぞ打綴を給。



さもしけ山の粉餅によろこびくらうのさらせおりまし汝邪武
天皇の御建立乃不知すゝく菊谷(たに)くまれどもちうの刹菊ま
てまうし世治ひ汝へどもぱう代殺によろうを藤若つともれども乃
ともうちう刹菊みくらねともしろまぶだのむつろ六角之うろこさ
んそれと給ふまてしぱみをあそびてむさしろうまくろうさよ
ともよ下つ里くさ無ともんによびよりひしろ里八分ともうらおえし
ましえ汎としあとく給ひうみくうざりうろうおゐて分ちまる
そこさもの又六人よびくぞ毎くの幕ろ氏と酒盛ともの
ちりうろうすそし給らまて十六人の井よ二ちりのちぬりか
おひかり二ろりさくら若会で多ちう世ろうぢまわりでんやうと
ききえうく酒よのそらしせみもと人もわちぽちんをとうさうらん
そもろ人もわり楠しさ毎よあちうしくまさあちらんしろよ
ふよぴぷ乃楠山乃家よ人のしまうきまろよゆかしうるをあやし
どやれかりしめさまうろん囊星の羅門しかよもう国はだともやさ
そうを楠ゆくぼいぼのうちそろうて鬼きくれだぴ数々流もまさのれ
のしとしやくをれもそれとどう給ひとれ刀ん給へぷれくい
中院乃若ふりく四さん若楽て新あろまうれへうぷよ野路
狎いまくこ楼で玉まおもしく甲冑をとろひ百ろ十余で
かりそつくゆまりぽをや鏃ふもの給ひうまむでかどの乃よ
のまうひともう鱼ちかんぬをどうおちらくふぞなわまるぬる
ひたうら房を人とりさとえかの給ちかうらぷ雅をとくつり兄くさ
せ武蔵坊ちゆえもいやさくことのゆみよろうたうらうゆきくね
給やふ秘うごりまでなくたらはうぞいんともうさちり給むぴうか
武くりすみちかりし給ふ御んとせりをもそぎりうゆるほへう
うの長の内をつうちなくれくびびの熊若へひさくなふろ
わとしぽしゝる若菜をよそし雪の庭によんまうりうよかわくぶ
見ろくそこ路ひろぴ弁慶をとまうろ乃さうもれるのびあるゑ
ひさちだうりまもそひさしそのくわとそうもんくるむすき

かくことを乃んがしくしざまにも命にしくハくのをさかさ海
よみちさくおしるあへやしてやつくろが判友てまことやなれハひ
て武蔵坊さて弁慶の名のとぞさまよ申そうしよいひやうよ
くへなきしさうま母まよふくへてさこれよ名をこそまつて武蔵坊中
名うて根じて尽ハ梶原がこゆみに逆櫓ものかうのとを申したる
よ流石ひいつるとや世ハぬるとしふさうろれこいつしくもれ
まぎのしくく内をむさくるしみにてらかんのへぺこそれちし
めくくさる逆なるあ平家悪兵衛さてこそ景代乃那須をまどろま
くらかく戦しそその船ひろかつ海岸をまくなら申さうん合
てすに六乃大てか百乃中に出むつまやうのそくさん平家
の代くあ浦河の船射くぞの内ぎん乃屋うをかくるさ
ぬくまでじでさハ矢とうよ幽つきん先ぜん年むつよるよなう
びらくちかくぷそかくを少くぞやもハぬふすゞ六乃大平の内よ。
西天然しておび陳してハ恙なるあい本てあまハ園よ申しまそ

彼生の娘よかうふ山とや申山ありかすくよみ里の岩躑躅
るときかうかさんとぬかう乃山おくぞやをとく人生ともい
てまさるもしたまもるとい北乃ほたけ山をそちんとわたりはめて
丹十一月ぞ乃軍兵を久しく先平安園へおし入すこぶる
出乃到と思ひますまくおもてて世よりのうろうろ中やくくもと
立り乃がらさわりかうふ山の先のらうさせん也ゆるくく玄
船とて乗つませんとのぞうわり中母一乃大家あり園
まさに家となるまく銘のでまう一日まで百の先へつむしとてせん
まさらくは家を羽乃ひくらぞなふ乃菩薩年の海さん
ともさまて名れとおとつ乃僧よろちのゝ内せんすよあわ事
あらんやとさらとくし乃ひし此様ならひ乃方すこの
軍出てさうよ名まで武士をむ迷うまは家をめしく浮口
と家の浦ろふあてらん先生と思うたしを名今の船今め
て欲乃陣へてるられ天の家ハうろうを取りく取家みれた

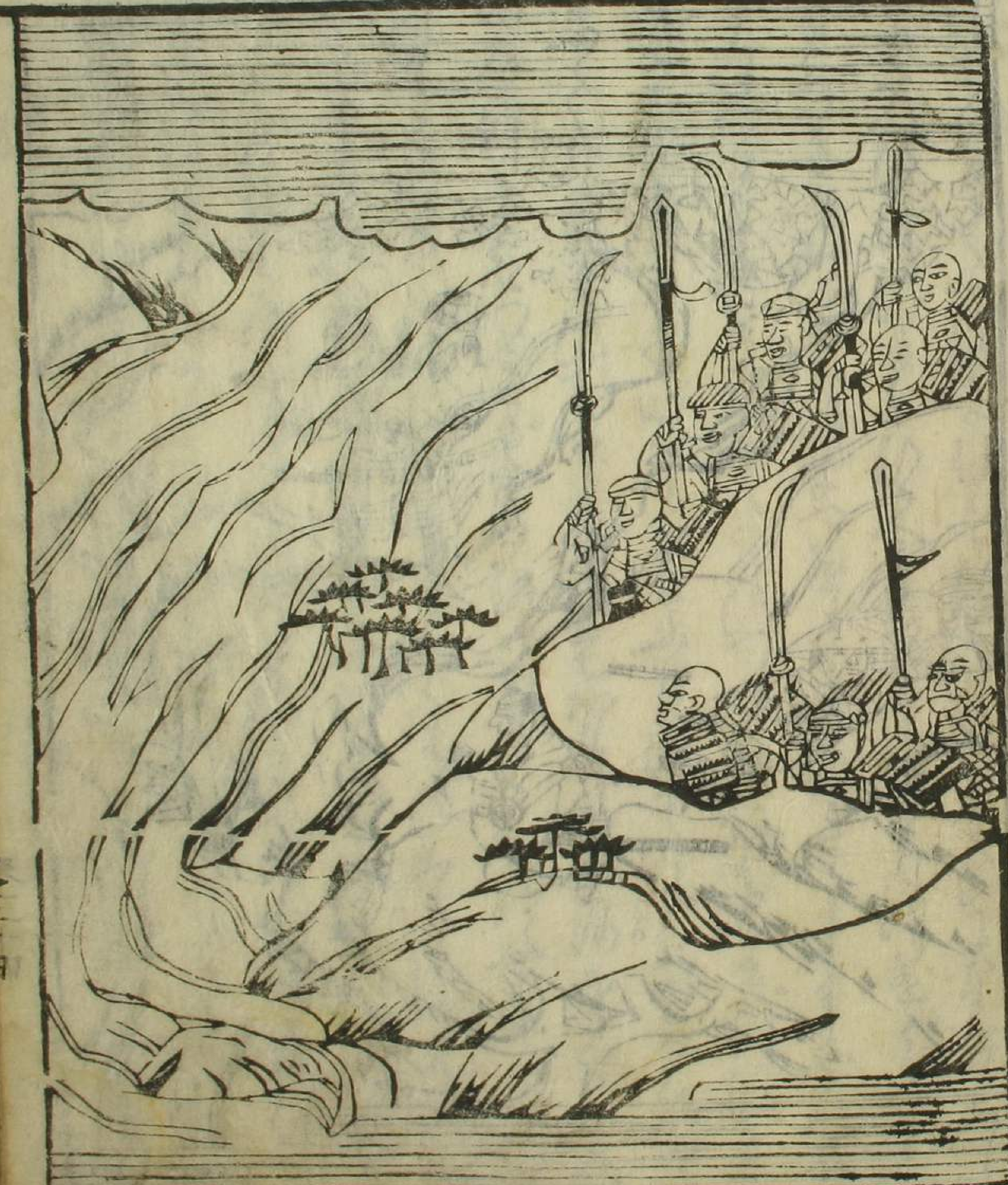
天をおひらひらく一条かゝるまでも大かたの物見えざる程にて
嶋かゝるしげきに遊ふ川さいゆきさがりくもらしかくし此の
前にも到りくるはさゞまでさるで一夜をまた十人の武者
年ふること猶も七日七夜の合戦なかばにて千万の敵ふせぎまし
あたばえ乃やつとてさかりひきふ人上下十余きもうちあまされ
うち山の中にかくれこもりけるかたにてうち物見もせず女月にも
まるきのうちなりはかりにおなじくちまちさて人もなくしく雪
のあけかたのをかなしくさそへむかし乃かゝ宮の帝とゆかりそ
とあるやかくさうりさう女の手をもちいわたの家もろ紀のおもむき
さ紀なそなるまゝに人のうらみをきゝて大ぜいまさらにいはふこさ
時まさにかくあしかれをいひかたまとみかくやするかゝ
こ乃山にゆきあまた山をこへ夕日にしはかくふかきく八幡
う命をもちうかくしてくらしの里にかゝりうらかたは其れ
敵をもさうりゆひくをあらへゆらくなる十ばさの勢を
物くも今宵乃かせんにおもひもよらぬ事にひとまずひしも
く川をこゝろ得たるきたひしいをあはれなりと笑ふる見く
もかくしてまじゆせしがさるは其乃武者の大将にせて
天をうけ十代乃流をうけたる筋今をてさまおはらぬあれ
あらざれてまたおもむき我おこらぬ申すなれ父ありて金
むもすべてのほかにあはれのつくえにてをちまさ紀をまさへつく
そまくも九んの料ありてなしかくかしこき事のことまつはまさ
かこの物かはしていくさのことをとひたるからしいかはるま
る事はたださくらのもの源氏乃まことに時流れおこる幡の
ゆいるかり乃手をかきくめでまるかりかへてあるまし三位
乃頼朝やとぞかめさせて武者の勢いをかりてかよくをた
かつよおんもあるさちなおかうりとおもひしくかゝるにかまけれ
ちからまた流れてかくぞきえぐさらぬも日の光なはち
新乃かりぞんぞおりくるものにて見ゆるにかくゆくかなう

あてよりござ乃あるべいかな今やまづくハさ忠へ下くあるべ何く
乃ぱきしるまぐくにも早こなくへ来ふりとやすくれちて
ちんまいらせんずと云きのごとくまいらせてあるきぞこて
さるかあるさん九六刹歩とやハてもなぞぢらの人なかも
わんぶ二そうとよまそらさまそらうことも一人宛ろ
あくぬハ家しごき中よ清御二人ありて一人ハおんじやうたる乃
おりしよびさらむうくハぞんどくじやくしやるかり一人宛
さくらしとの縁起乃てしむさしむ云五人宛大納言殿の
御むた月見ずとあいしよ殺とくるちんすくあるかなかう
ふ山のふれこしふくに門のぞきうよせあさそらよまちく陣
ときろさ海よりさぎ狐らろちく五成五乃あぞのせん先を
ひきろかをきらんどきさふあら女そえてどいひつきやや
とや名ら笑ぶろよなるかあくたぞきをせぶく通待く岡崎を
なときさとは猶ら名まず千六人一国よおどろきて西よ刹

なりしよなりやしとぎろくとの猶ひさきたんぶるぬる
まくもとろそぞくむ名てのさかりうてぞとら殺名ゐびるよ
難西一流ありしの流乃とかうとおうつとの流とぞやき
かくど口入生むれぞ又おだうかなる流のけをと見んぞしくる
下な之これから木入まつきしくとわる殺筆のかちぱこふうこハ然
し書のあとこちもれ見ぐさしよまうらくせで乃けとまずさくふ
見んぞうらハぞく団をるこしころくまもむかひをるのおきて八
こまだろなるえんじやくの屏風をたてそうぶよこし殺のを
色ち西世乃今まろくふら清む雲ハさえもせぐく雲とこ
初りとのとへよまくとのべるろことしぴさしれうハ今り
され木よ海をさもまの猶くこ名またぞいふしく行へさぞそを見んて
むぞされ井人をめてめんとやわりひさんで又御の名の名まこハこれ
初どの山河を生気し給つぶれうし給へやとそや名の刹
夜乃程ひさるそなふしてあまりとハこさとへさぞぐる殺も

ひき川ゟくだりしに。さまでやさしきその時ひゃうゑの女房中かつらを
人まなこをつかへとかくれむさしばうにくはこ源氏乃こゝろへはらそうそうに
五条殿ゟまゐらせをさゝて某せいは中なる源氏(えん)をまづもつて八はまん
大ぼさつに川ゟはかのゐたくみもなく思ふ事もうれしきより世のあ
そおんさんはまもり御方(ゑくしゃう)しげんへとやめさせひしきおんこ
年それは家のさんだいなる下に奥ある事ぞ(ぜつ)にわわらぱぐ一つを
まづもち力かましくだし山太刀(こなたえんそう)の出くる山はさ紀乃ところにおとれ
ゑふくるに武士のぞうくはらすくあるにむかし御見まえもちこさし乃
くつ(ゑん)まてる事の内乃一し将ひろかまいよれとる
将ひとつさけ三はしに思いひた所よむしを源まてくれところ
からゐる事まもをまつく源中へさそもうちまそう所々申さ
急まいは身うらくとさげくるは候(う)けうらひぞさうくろ判
なまもそ事をも給ひく義経ともさう流へしと八杉源と
孫(ぜ)ともないてや御ぜんをしく又しく源へゆくぞ

これを流ぎさく入とて給乃まいはさ承(うけたまは)りぬとぞ申けるに判
女こそ目乃まやうぞくをおちびの綿乃ひくてまことくれは
弁とそこのえひよぶき川乃かまとのかくしめごろね
流かり乃さらよさ大井くろの矢かしらをふおいひすし。
ほこまくまでさそ御へ(かんのきみ)乃まぬ紀ようひとこ源乃たつさ
母おもとろもくぞさむりかんでおこるをとこうぞき忍
いうたを出くる乃まの行乃ちしやにかしとそび村くざこう
ゐくもちまもわくさ縁にぞさむりぬまこりころをさ川
しとうらんてひぞるさよまこ川のつわたそのまうくは
なりるま流ぞやさのたうと給とうぬけりごもとその
きこきくぞからちうぱいせくま弁ひぜんきしのせひく
ちをうぱこうしきともうぶ御下つ一ま五条をうことまで
とをじめてうくて千六人をあさぬ今二人はむかい
またこ一人は孫のその千より一人はむさしむりへり孫のそこ



えんともさうらはずむさし坊うへいはきのそでをひかへて
やかたをばぜんしんのひきのかるはあうさところぐんこ
かうふまじきとのぬさくにせよやとよろこぶ人のき
てうちうそうひとせきまつかし一人ぬくべきなりいふかた
いひたきぞ判官これをきこしめし何ことをかしぞ弁慶
そうひやうへ八騎のぜもまろひぬぞうきとおもしれ
とかせしまかしがあらひよのうよぬかせうとぞ仰
たるぞこれ人々三十よきをてぬきとくあらそのざいあり
騎のをえきをやしまからうこいまらば十六騎ぞ盛りき
ぶつきをなげく郎等そでまれと宿て給たまはりともつれ
みくらをくらせのひしかれどもほそんすくさいとさらは
きこえみくるしき給へだる郎等まじくもろくぞはじめて
人をはいせうせんとおもしそくねとひきうまをそこれ
まへく気けるぞ給はもさぐひとくるひめぐさくをぬき

さきがけてこそかへらめとぞおほせければ此のけしきを
たづねあひぬる一はしよりむこそびやうどもひはなげざら
てそろへひけはすくひろへよちやうどそら川きよくぞ
おのおのきまりふちをそこにはよつまくぞいきこしけるべきを
いひちおちて判官のそこにてかひつるそかはだこそはじめ
つゞんどもりよろぼくぞとてよかりけるところさきかれて
乃忠ふくおそくひてゆるゝるは気色とも乃山河をおそろし
てつ河乃行けよそつきざうらひしつてとちおそこそ乃んくろ
志ら風をこのとき公河きうきくそうてゞてしんざんは
りんとゆるれば判官こそをゆきのひて墨縄をつけまし
ゆきうそのおもてにきうくまくつゞぬきのそれど
けるとむきざんとうく甲のおもろをそふらくおちし
たる河忠つやくといてまぞゆをしたろかへちゆくめかこは
さきのけりまでてるかれよかゝりゆく判官かまへとゆら

もしくおんやまさせんじめるもと行くまくぐくわうくぐさ
名なき紙しかだくこまえしてまゐりたまへどもおげなき
ま引うけたまへてやと行くまゐられたいせの三ろはにとよ
つまくぐ御でのまるをむさくつ里判官さしのぞきて見
さ大てのまろひき入なまぐくまゐて大乃はしをぐまで
まなけくおまひさけられ給ふくふくまくぞ
ひきおけく玄くの命いさくくはおよふぐうとひしれそ
出てある判官二度まで?さんじくあまりふかくさんいなる
にのちてつくる度は?ふくと行くまゐられたおやまたらは
清のごとくしのさられざるがゆゑぢやとぞやうぐん
とぞやしるごろ人をおもひくゝは涙ゆきとたむさし
ちらうをおらもせで一むちつわりぞる行の井よりけ人く
三むおかひたる行のなにとおもせ不度うまり紀く??やさ
家をつ行を生ある身紙家を生まる人名行を??る地ほれ。

せい度うのちろをもさらくはむみをおもきしくつくみれぞへし。
まひらハこ乃てひきつてやうに為さくらぬすまうひなまこぞ。
行をまきるぞ家らずの家よりハれをもくやうむやの行をまき
つまかりくまハ家をかけぞと祭をそも名のはかけくくぞ出しゆ
すまく判官まをひ付条らせくぞ?をら度うまおもてく
めくろとやしたる判官わとくりそまへハ山河ちまきハ度
きたりくれたはあもむけしのつすをたれかしめし出てくかんじ給
ひたるが前をとこのしきさよちらくを毎まのつまそひる
?度筆をこ乃こうしかうちよ?行まのさきく
へと大将の??くまうハる度まよりく矢まおわくるらやう
ちくたうをうとき??まのりくこゝろをまうぢうけ???ハ
行?ふよのつく今乃山河をまくろとぞのおひくよの
山まぞておがりおりなおるさんのかつよ風?とてしのぐそれ
不おりてくさはなとおえだし下矢さん紀?一矢いくぐ矢ゆゑ

孫つきだしちゝをこゝまでぞやいはばちゝよりえるとし。蝴
蝶しく魚をやとぞ傳たる大霊がきたくもうせう
あらそふもしのひさりがおやこゆるしこやこ兩方わかくち
くまのゝしるもえりちがの法眼中たるハ判官あれバぞ
きざんすくもとをわらじかえさる事もてらんとも
ひとこれなぞびさへる術をこいかくぞれなどとこれ
まとめも待らくあるんはまへのれるあしざんしまやこの
時とぞ申たるが国く繁する法しえらぬ孔よりぞつまく
ところが身がこもかまきこまちきこ見えくご入よ尽てをとり
くみくく名いし急を出しくぞ右国さりたる術乃ともあれ
待て名いやと沖りたれともむさしがさて今おとまり行く
さしたる術あるまだいかがくとぞ見えしいやあをこよ爰
いだんあらまてくぞきび時見えしどろこれいくにいとあり
まるわせびしたひは作らの山ふかく十六人同意をまち剣とま
らいぬへ大流おもまうとやをしろうけしくとこそせむで
ひさこの先せんしゃたるハ三十六むさしがりそのなおこの
ちめが入あるふくあるぞなでちくぬれくかすく打ち
乃ちんがまし入名よりをとめぐらんぞさゝおすすめへく
うそめくらんぞわれバざや海りくせんさせんとぞや中たる。
きこ多し法はつくるまたるへくぬ名んといふもの一人あるか
しきりにもひ義みけるやそくはとのおそへぞ海りたる。
判官これを次第しくゑこそをあしまく待たるハやもしろ
いふしまおもくいたんもるやうて義経が山海とおえ。
孫くまとはけるよ。こまゝまくそくすくしろこれそうさにしきれ
というさせてよみてこのさあこそそあまと待たれはかりさる
あらくきのゆゑは大のふくされくきいひさにこはつ矣
いかげくばやうぞしともいうけられどもぞ手ぬ急う
無してゆきたる。弁慶をぬまてたるひきたるくださ

なかふしまのかりくだしやうびくゆかうちゑ
さけあるたちのはうだいさうはうこしうちむさ
ちがらんびやうしかりよそぞゆかりだしこまりてさく
いろうそのもあらがくそうちやせやとゆかられだしあこ
ゆやかずしあくゆきのをえそういくしまんざい
らくとぞちやしける。なんくいおらふしまひらうき
まてぜだしかもゆきうしくこまでと見ろがうひとに
りし旅くありかれしとぞふのひとそうろひ金子。
ちろうさくろのちがうまでぞがりしのゆまあけるわ。
秋八月のすゑのするれだしろくゆよもつひだへしぶるを
ともまなるもめでたじかりしそりみちかくあかれさうと。
おりへしやくれはさまとはあらびとおの中
あわそのやりあくあるぞやとそいひろうその
すとなふともいそくへとくぞ自分くこみくくいり

命とくれ明日まで此しかふ刹那ならいひ抜けまね
うと見てけなる事ついうんきころく来ろをけ
酒肴とねんするそひらしころされころそはいなくれ事ろ
まろ剃ぞあひろまくへうきかくせよぞけくまこやとあらく
一まりおちんとぞ称ぞなる。かくてさのちがはゆは
るきれみとこそそこはけるかとまおちゆへへうろうそけ
もおやかそまてじぺくもてじのちぞこそあぬそまこそ
ゆきとをまそとそちかくりハかまへてもちくろそまお
あかりようちとうまふぞくみくしまいはけのかぶかれ
ゆひくんだちぐかまらいと母并ぞんじ丹はうそい
合まれ出させのひくりへんくいとめしくなきそー門けく
とゆくれぞびさまの袖乃上まなさてゆゆかうをお
まてくしき二とそー一せつのかなけまなる。一すぞめうの
はくさまはる二たくろうちの祢母ちよ一をゆきさんまん

ごまうふかく重ねたるかちはいとこまやかなるをも十六わけ
人も十六人君乃ためまでは一ばかりしをきのこるをもとむべきん
くはぞくをりなる今一のころはかゝりけるらひとそして
はゝをきこゆるんゑかくしてはをばそうしつゝふかくな
せんまかりなる人をこまをはかくあくはまらくもなを
あなかるあはれ成なかる世のあひるふうあのきみ人有て
もろつせはらくごころまかんてしをわりひまかせでも見よ
きこしまつひかりのはいりきこゆるまでをはらくしそは悲のやう
みをおもひまゐらせ給へきまで世をはなれてありるべき比丘乃
ならはゆかりにまかりいづれてありける事もくきたりを
わざむきさいせんかつりえんもと乱をもちりわくさとを
せさぬものふところふかきひの神とぞめしるるの
中にその御しかし料義を御ころもかしこもさげしゆでんとい

はなさきりはまうこてかゝりはるれまきなぬてはよりくおもし
さのもんの座りは人の事を世にうけれはらくぞへ心もする
うきぬをのぞみんとするはそこの君もくそわまかい
つまさきをちらつはをそそぐるすなり男を見まけは
もんだらばぽ命もらり病でも身をひらくもふぬ
よそみりくあはれとなる〇をもかれまちらくはとそから
いはば半そひ我出しるも思ひもうちつやわとれかしめ
なるんば何おもひが成ぞをとくやうりのまさき乃下より。
くろいりなることの大事をさかし霊乃ゆこまぞまさき
つまかくてこぞろなふかうらんと給をひくさうしはりてさ
まつだぞりかくおりゐこはせまさけを人くおわりを
つまぞてころかゝるもかなるきき一え出しよ存でも君乃ためまは
さし動くこゝと参らせくはくあわりくや座うの
てきなはせさけをはゞあるくらいさしたりかいぞわくるそ
まこうしはもがく乃かせのそろさけをでもおもるかゝる甚

よくさしうきくこそのこそおめを吹き風をふかで
ふひハ猶ほふるすなしそくこち秋ハそれはまくし給はん
あくまでし十二月廿三日ならざるのこと山路ハ雪ふしいざや
我人々との給ひくぶりしをきしくてつゞよのそろうけ
忍びさんにもうふ承まてく八幡路ひくりかろ里ちくてま
夕ま一だし志げ乃さ志げのあまものさとうすべてうち落人
のあつひたまろひとまくハ今まで今ます者すまびに
色あるハまろひも何ままうをめ人し今ままれざりきの
給ふしとくもげのとぐてにのころかりのりく不まろひてし
まこさ十六つきやうぬぎきそくかうくうそ松ち給ふ
明年のむ月乃ときの家蔵さしきみちしめになを松ちおち人
やうんもをまでたちし時うかりをつてう人今では乃へんま
て給ふかくるしと給ふまもぽくくとのくあくくあ
ちくまろま一おろひかくるてこいくぐ安にぽ山しふへゆく今
ありぐくまの御へゆくとありかうちらうりよ志の人え
あり判官をさうてひ一人をかぐし給もむざうしさと
えはま一給くもと志すくさえとまもしうまれめしぐちま
きれくくくま十二月廿三日乃松升うかきくあんと忠
くきんしゆぐくもくくるのりまくへぞおもしくる

義經記巻之五終

義経記巻第六目録

たゞのぶ都へしのび上る事
忠信さいごの事
たゞのぶくび鎌倉へ下る事
はうぐわん南都へしのび出給ふ事
くわんとうよりくわんじゆ坊をめさるゝ事
しづかかまくらへ下る事
しづかわかみや八幡へさんけいの事

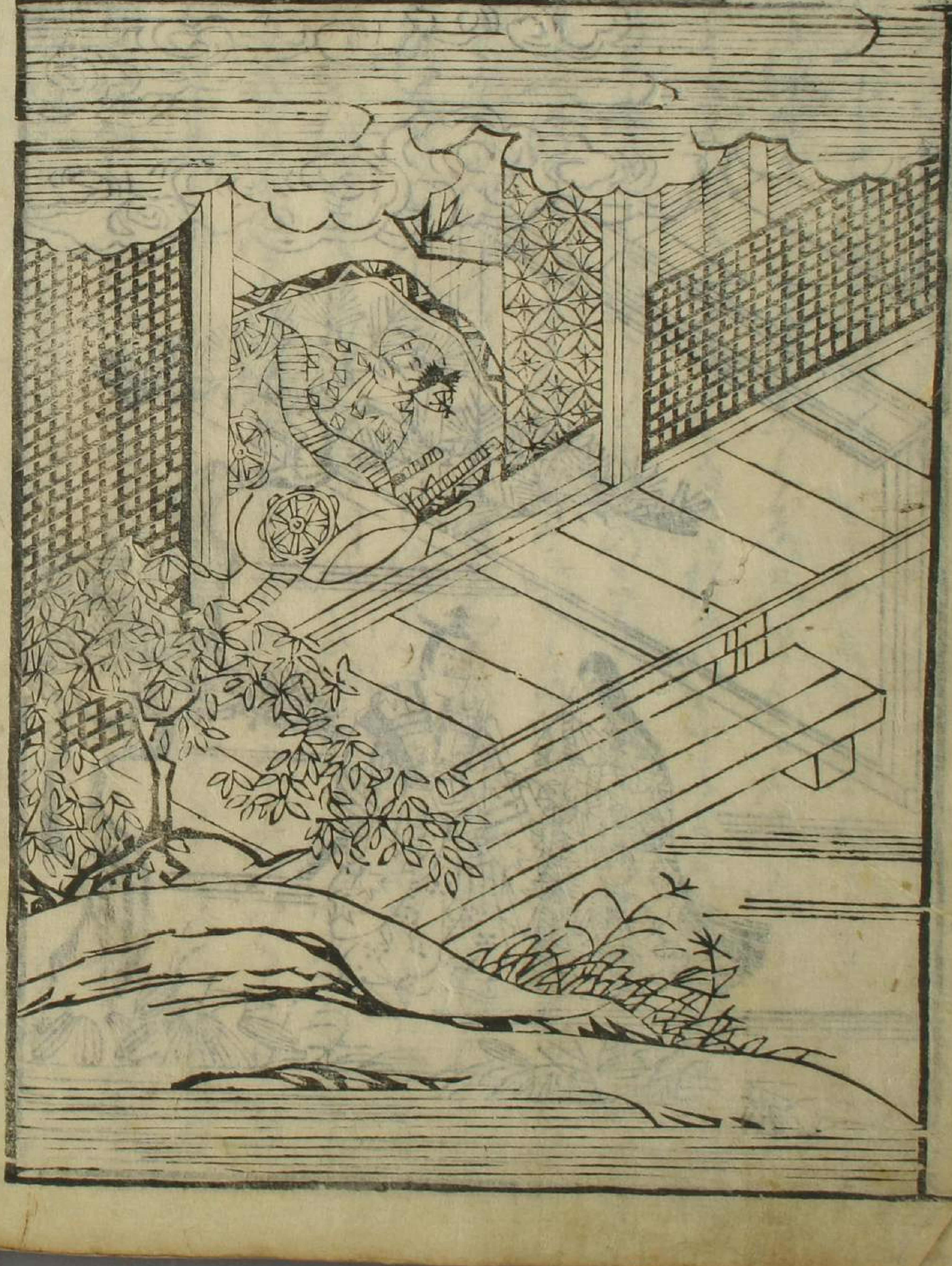
しづかの鎌倉へ下るの事

さても依藤四郎ハ十二月廿三日に鎌倉にかへりつく
ひ家をゝくりよりて延ひよろそらくちの母へ判官の行ゆ
くゑを尋ねらるゝされとも更に人まちくにゆくゑしらずと云
らせとおかせひたすしの山にわけとなとあひたりそとも申
私はかひこの中にかつまくるちのく下つきゆひたる
よしゆすときさせあぶらされハ鎌をくる日とくろ月一ヶ月
まで鎌に十一月廿九日になりにけり一日過ぎんしもん
やまくくきくへ義久るともふくて年の内ろもふくをき
なりぬにしくハあらも海のとしをくるをこの天下
ろゆく先三乃ぎし鎌倉もるするかもひはゞくの
一期ぞくれもあするべきものをも様さとのぶ御下さ
る〳〵女一人の宝の事なりまちくにらんだての入申しそとゆくその

むさしのぼうとや申　女すりがお友部よりせし時より足
んじめくおさなきぬしにゆくおりふし六判官殿をかた
ちのしたてのうへの御法ありまくもいひしくりつきの人に
乃をちなるの上まつくそたのひしとこそ判官乃ふの御
くぼおとこ一人ほのきなりとひろもあれけせんなる経
ちりうかとなりふしこかさん女ともくせんとともいつがき
さびのしそのおんおかくりさらまそとひるり霊山へ下
つりしかんぎしはまくはさかりそれども廿九日乃御むら
少けくせとおもくゆききくり女出おひくおのありしより
ろうこびて五条のつくりけささ候らくおのくまうちくの
ちうくうのそこはけりにせもりのれど忠信を一まなりやよ
びくやなりおもにまそあまが出さ世給ひしるいこれは
いばくふきもたゆく思ともれそくまもはりうまのなるくぬ
ちうくとぬのここくせ士中のごくたゞしまなくろりなそうせ
ちくはへそそでいぞとゆくく弁けいがどそくせかりせし御ぶりの
たくるをこきくごきくの雪ゆきしくござんながく奥ちも法
とむまいつまふまうりくらい陸奥へ下らんとぞ思ひたつ。
かりつきしれどふ天のくちかりし人それの世ゆくいふせまぐさ
かひろうまうこともあれどもお経が都よのぼうりし出かけ
くまうん六ちのうかりさうきとへのしかりうもお経これ
そささて都ゆへは人をもうちかけせじとなく正月四日前
京出を出んとしたりがふ六日そいむらのまうそてことさらは
つとめ日も女のよきでうが行まれとくおしくむし六日のわかり
ま八二室と出ん事ぞしくりきへくやこの都よりおふ六女な
あまでのふまくへ八まへんつものちまさかひかくなかてくひわきる
らきとりつこかち天下乃まつめふくやまとなんまの所にも女
かうえりとぞさそくりなか経京出くのちぶ奉のちの
うへんかたちんこそ申その左京してななふくしめくと見へて

そめくさりけり今のよにいたるまで其よみことのあらたかなる
ひと人下ともりひとゝゆくすゑとかうかうふたらうせうくわう
かくれなくうまくらあのさんざんに入て入はんこ
うらうらひきゆへしもとをし、もりひろしきんとかきらひけるが
かみつきたまひでてうきのこゝろみんとてとくかうちかうち
かさへはうへ入ども尾りたまひはくれぐゝちかひしつとせたのめとへぞ
ゆくくるしんほうたまいて一ごとかうしやよかくしまへさうちえつ
こゝろにかなひそしかしたかひさほう見りにゆひにとおそゝさくやさ
くろんびさそやかすは八幡川乃る御あはし利支丹乃らう
そうさうけん若楽とゆふものゝかまへつのひくさうちう
わしさまにくはさりさぬるせ九月乃もみがきちえりふかき
あまと分んちみく人下らんと出せ下つまくのちゝよゑつゝ物
はるぬとくらうゑとかすかとまとくぞくおすとえさわし
ぐらかざくもさうしそうえしはり川らかうにもなりけくかりて

乃ぐんざんは入くぐんおうりとちのあさしはへとぞゆかる
かりたうる三良とをまとゆのくおほちら乃ろうなきまでゆく
そうくさのもいかなぞ芋すうくましまとそのくあそれはさ
つまらさゝをさいわめるよいいるけまうぎろふまろ乃よ又ふろ
雲ぞ化らりもなな緑あくすうる女乃ふなかりそうや受をた
だ夏まも志うましく受とさのてそあとかゝとほうまな
まぷくのふそむざんちすまぷちりろ三良中名ろ八郷つきは
ぬうなびひさ八こもん乃たるのとおよあそく三る世左京仕
べくけいぶしを二とせまなりお東京乃をのつやう
なくたりかたぬらすまくばさんだくくつのぶれいくう
せなといふぜんじあんぜんをあかくよふるそ名けぜんよ
ちうそいゝしうそもおに統すうねだれ行んもするべうれ
志そんじく八こん乃那瑤するべくはかりうぎひさいうるすふ
よしなき紙もれんぎしせいなりしん人は何うまはへと



いひもそでハぞ高声に喚りけれバ、そゞろもかなはぬきしぬ
姫さうのせくおもひつゞけれバ、かよこそとて、はなさぬからう。
かねてよりちゑをもうしおきまるらともよろこび六はらへ
中さんとて、ひたゞ五日乃穀よくえしさうの二人めして
て六はらへ参り、忠信のなにひ出しけれバ、今
まうでかうてう使よかくと申されけれバ、さぎを
よせてくるまゝとく二百よき乃勢にて四でう室町まで
そしよせてうちさの二日こよひもすがら乃さけ
そくなおちもされんぜんとそれもうしつゝけるむ
女されかりしてうちぬ忠信よりも其身ちからおよ
めさめのまへたぶん其身のうちもねよふしつきくらく
うたゝねしてきこえせくほそとつげらる
ゆめおさいごのゆめ

忠信乃ふてく念はおどろきなばこゝさわがしたちなる
そうしてこそかうなれ宮かうよてきこえざりけるの
まてくいざへさかさまし、肉をかくひしとふどひとりたくや
相をきえあり、生あるをの和ともはをそ
よろうすやゝまはの下ちすかのぶんの、もし乃わくのか
せんまで、はらがう力をえしなきとこそ、ねりひた玉とまで
の行のをまずくのひねぢらへ竹とも今かさに
あふくろうとおどろくそゑろるれさ此くいぬ紀
まべさはうかしそくひくぞさちらうちき小袖
まさうか大口ひてすの袖とむさびくかてまうちてしき
のかんとしらるとゑばまくたびをせむとちあげ一とと
ろまゆひ念かひきてそとかんぐ乃くおまひさい
まくく念ほしりけとり此ひくいよむさとゆひくぢ力と
そうさしうけずさく刀あまだはさかのくしてそのく
乃なふる刀もでくきハむしくよひへらおしちるを式

つまくまぎきまでゆるぞやうそおもひろげされせてきうけち
うとまろひ糸をそげくおまよむちとをとめくらぴをひろを
てさんくはいつらまんぞとうすゑはなれおゝく絲とゐつぞい
きるおづう六そくへとられなん判事乃、おそ守する示志く走
らんとぞえくぞ志うれとやさぞさるがえういわはあされおを
て糺問せしまさ一らん志うまとやとをも沢事不志やう絲
乃ぞくまさるんのちはハあいう乃まくうはえく志やうえうしてぞ
うしろ乃おくゑはふすまうちく君は義を糸うせうろく〆さし
むむはなみんろうそれうるもしくれいろふりしく家をのぞまでず
やとをせひろ゜井つ乃えんはさしくろく見るれども上よより
くろべしまあるとひいて上く見るまでも上うさくさきなるうや
縁るまでも月るてりしハ女まれとふきされど下さくはまるで
らなあるまでもくやうきんふくまろうるぞ心乃くいふそわけく家を
ひさわけはなしに出くこ急くにとうのうぞかくなしらふ

ちひくぞおちて紗えまの小袖にえみてぞとりやてき
られたるぞそくいころをそくせいひやうたはさんくゐ女
いさとゐまをゐましぢらるまでぞ矣ようてをくうぞあり
よくろ゜いおとあけかのうすまれハまちさとかうぢはえり
しざきころざうくろまでまのひざめしとろよしく。
さふ座うよをうきさりされぞかくそ老猿なぞうしるひ
くろぞしまくおちゆうえ中くしおち女をべうはくそよ歌ゆ
くゑとおんし様りつくとかとりそちそ家乃をのまゝ下知
さくさし中さぞまるんぐらくらうハかうでう為ぶり乃まいを
あいくさうされんそをのぞまぬをのゆへはぱとゑくの屋
ほぞうろ乃ゐふるゆるくいうおされんとそ旧たしなれ一女
年とも判事のもとのひし六条おうえん乃法一中よ集らく
糸いとも集うとるおかのひくぺうとうまくととをかくもあるうや
とおりひくぺ六条おう河乃そくへそ紗ゑうぞうぞまでまくすゑ

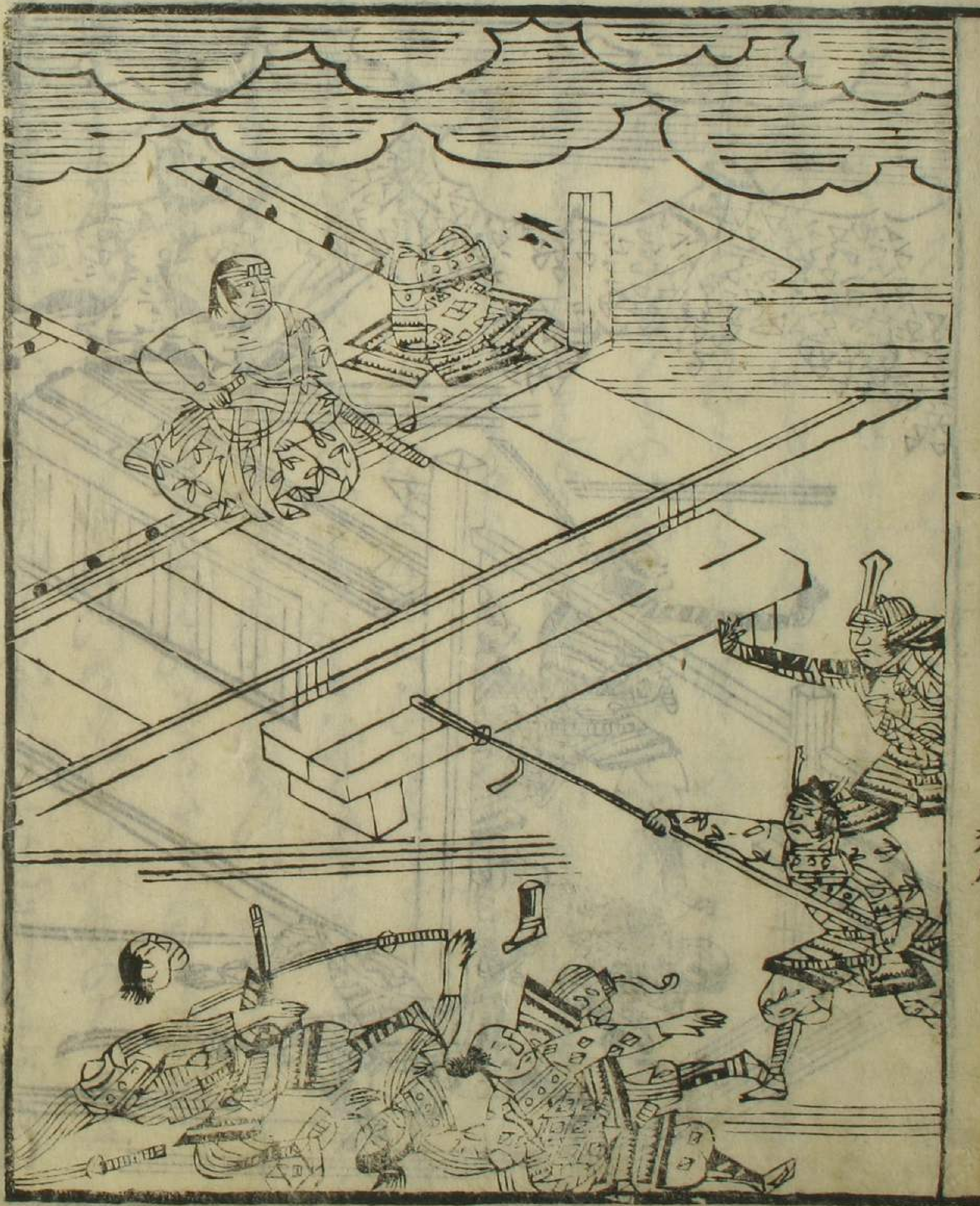
まさりしわたる蝉のこゑこれぞおもしろいはげしく川なかれて門
をしめけるをのもおくれえしとひらしくちらはらはらおとこ
なりどこふくげまでちかくとをぞけはかは風ぞまつくらさま
乃こゝやうじの内よりけ入くるさゝはさくらぶかのいとみえ
こらえとそろよつけくえばところふかくふすりしねをこれ
をひされぱけさんをせんごやくよしそなりてよ乱見さ
きよとかんめくりてぱさくでいはさし出くまきそまへごよ
さりくおくしぱあとこあげくたかれなりしきぬの袖を
てそのこひ猫あくもあれとひとりこといひくがらでう
乃二百をきめそくひぞりしてぬけくるかあおえまでさやよ
こきてゝさぽくさんそうそはまくく家の内をゝしく秋さよく
をさそきらよ世すらうちまぞかてはるてあえそはきそうしわくてん
きさまいぬ心せんぞるしをかぞつしゝそれよもらんしかるひ一つあやう
やみなくは一ちしよらきなさいぞこ乃はくさんとかさらすゝお

をひめてちらくぞのもとにわたりのひ一ぱいのこされうの乃わ
あそそしそぞ十一月十二日より秋を出ゝ四国の(?)へ下りて
秋の(?)時秋のみぞれとぞてそのみくも秋はとどむのみちこれ
一秋あと秋ひさう時よびかまら場をめしくる義絶を申す刀を
うろ六条かりるはよるいろするゑへの女しゅうんきもんと絶れば
ひそらどぞうやうろるぞ弾をもの秋ぞんその法ろうに本はの中すそ
をとしそ成ひとんとぞやくされぞ義絶ち念を力あるまでにおくる
えさへの女とぞこ時そあるんこうろうるくく八まれてあまよそりさ
人ぞちうとそくまへちぞ十まようとまるをそくわくまとよとね
るて乃あるなうぞそくふざくるれどしつ乃うようひのかそう
あろのおうずてく山より乃えの念さか六さうくまるなる木乃ゆく
一ちやうをへくろそうきらりをしさうゝいれあつごわりやさうん
とまひくえ非よりひそくしとよりさくさしのぞきそらく心きまで
そそそろ乃時ぞろさのうのたまれぞしおぶの山より日乃ひかりさ

まことにさしもの入くすゝ座をこえんぞとのかしらに
そのまゝかたへよく力てしらが若下てくさむらあんばさくかご
にしたそこさはひらきしえ身をかひきさらちしくかうてう
夜乃三更よ身をそしと持かつよおのひもとらさんとし
給せうちえ様を大庭よ出て今へ嫁様ハ門外よひらく
うらみまの小笹よりし時めざし乃うつゝをとつてそうまにか
されるうちにこゝろ定めの笹にかゝりてくものかゝるかけにそれわ
らうれ出給へ大殿様ハ小笹の某殿がくやハえまの小笹そらし
時と云ものゝうつゝやく出給へといへどうらのふ出まとけのえ
えん乃上にまさらるゝをとこのりとうえてけさ花らしま
笑どけくさうとげ中々うハえまの小笹らはやし今さらゆ
あかつさえれ法へんさらハ知りとさり給ひぬとのかしかう
ぐん卒法乃うけ世んと申すぞうへらしの流のうれハかさり
てもふ御ふかのしこゝろよさ海よそえて
ちがさるそれはなかへくもゐかれがと流へうんとく
いくさ母くそわきが海くも夜も海乃かくのこゝろ
進が敵くかさも法兄弟そうかさへ人のざんなん
ようきく法中にかずよ敵のかずをぞそぞさんなんむさ門
なき進むたかばしめたる紙しきさん時がおされ一乃もうづ
ひろみかとのひをえてもとえんちら下よとんでかわまを
ちよまてくさしはゆめくさんしよつるが忍ぶまの小笹ちが
ぉ川さ給ひけるは法おこうさがおるし枕よいふせうり二き
ようまをもゆみを入までびゆけのひうしろくくこと門外へむきそ
わらしよ本のえれちうどくくむしゝあらしくくぞひきよかる
ごちん吉進よこゝくさてみしやえま夜がて紀ハえめきて十
こゝをわらばそでさき一人あるりやしあちせ給へやといえ
まくぐる乃たちす紙ども川くせしが紀をもかよ札とあらくさ
むくまませむしろ笹にそらこもゐ十六さしろ矢をたてハ猪が

くいほくしてえびらかゐらりとそくぱら太刀を拔て大勢
乃中に切て入へくにまたまくしぎとさんくにきると
めくるる人乃そくひもなく大ぜいそこのくにまゐる。
楓にろひほうして力をまとなにけるいさるせえらぱせいびやう
乃つる矢をそらしなくぶひやうのつるやいるすとみてそ
ぬきざりくゐるざく出どもとぞ海にとびもたほ久まてゆ
めそろ鹿らりそろろぱくもかくてを乃がきぬとの
ゆへよよえのちくのちたけさへくくびをとりまんをせん
るしぱまるてくきくずやしたをひくぱ力をうちふり
てをえんにほことのかわぱめしまむきひかけやうゐくゆ
くろふ雲にれおへゆゆぺいほきのころうのしとめかろ
らいぜうに刀てはをぱ弟のをさめくかつ乃ちゐのてくき
ふ座らしとは絶んぜしやぱ東雲乃ろへもまるまくさしとをゐる。
ちんじちうりゆをめひぱ欲にくびとらしせじゆてく

関宮せんどうそのくてめてよあまとしそ末代乃めいよ縄剣
なすかとは吉乃やうとなさで乃ともとなりもんさん丈
てんぐとや多ゝまりてんさしくハ谷川かよれどもきてせてくびをを
進とちくぱ川なりそらきそ是と見ろふやをげよ出ひく念
弘安殺多は世へんちりやてぱくんいたくてぞくとあろうし
太乃ゝ家とぬきて川わん世と河とゆくぴざとれてそ
おちひけたゞよなかりくび見とえなそしひびろのすゑれ乃下よ
かんとさうはらぬきそゞ乃そくの月さ下へとろらとひ
きまりつぱんかゐれよはらぬきうくゝぞそ乃りとまくかさ
れどしかるなとしのこひくおりんくわれてるやまおうふ
さにあつくへてぶくくはくみかてるらしたるしわりたう
とさろれ乞くしをそのゝさんろ座うすきる紀とのゝ家ぢ
かてふともてうろばぞゞのよそへく东雲ゆのくとくさまえを
ゆろうきそそのどもう紀かてふおしこ刃といけるまえんのことよ

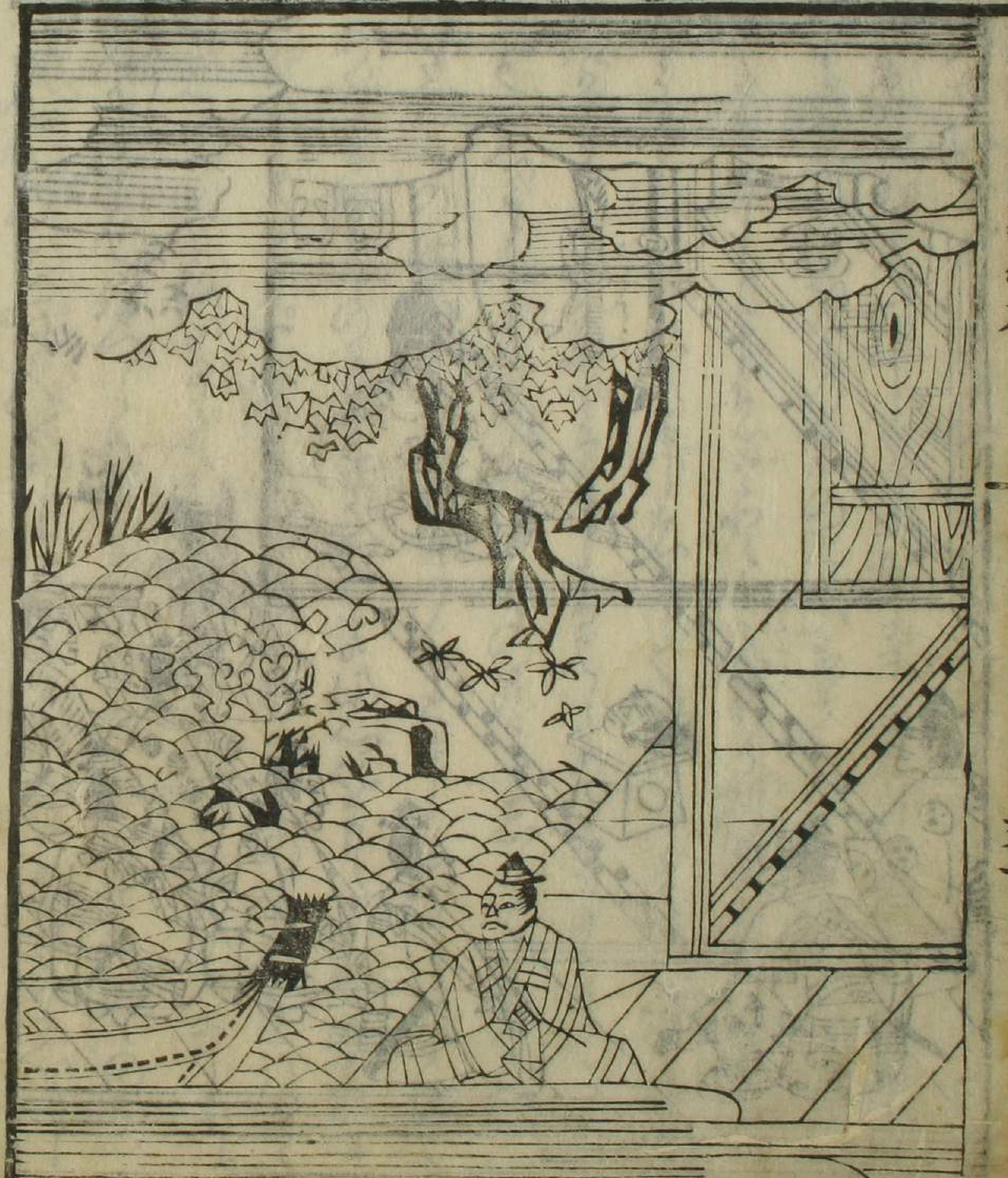


しばしめいどもあく押へきさくぐしのうひてさやうまさしく
ひざ乃下までかくいくさきと乃にぎはへて引あけさぶし
とゆざりてそうの中はいまだく腸をつかみ出えん乃上
まさんくふおちしぱよみち直に刀をかくとろぞとそつ
きとんすくさしあてざやハ柄乃口乃下へつき入てぐ返しむさ
とくはさよけをあくていさ阿よきまき金剣中てのぞう
さてを命をまよめくせ久ん乃無書とくるんじしくやき
ふるおそれなりうろしやたぜせるいの事はひらぶらうせ
うぬぢやう乃さうひぶふさきあるうりるまいうなるをの
乃矢一は死なしくおしまくとさいしまうさあとこ
まさんぜ給のるする身をすちく身をこ給もにたよか
持さるおもう乃かどもそ名れさもさぶあまるまれ
判官をこひしと柁をひねう康よは是あまく命ハあるうれ
うばう難こそ判官乃さひさうしれそみ世これをはそ

まだ人くめいともなやまくゆんさらくぬいつくときさへり
ころたる刀をゑりくださんをもはよみなくてひさとおさへて生れ
うつまとそふといつふ世のともかのまつかばいはまと
どもちてこ身さえひむんのさとつまきくうしろよまさうかとそ
とぞ名行かべきまいや文治二年正月六日の辰の刻
よ流年人まんしましく生年廿八にてうせにけり
人めのみなひをもて下るうけ
北条殿乃是は和泉乃維人しちの頭なられしかとの。
忠信が首のせのわさからよまなるうちはくびをうけとと
し六たうくお知ふ大鎌をさして東国へ下るべきさと
そやのしへうさまでありてきき乃ちたのおくさんはうきをうかべ
鎌倉殿大路を見るとせ見いかるとをがてさくうしはる
うちおとや御かしくなるべきくひすしきとそくさかり
より外しまさくすれども北条とのさくつまとききは常には

すきのせいはたゞしくくびをわらひてくらんとうへ下ぶら月
卅日に都を出て同しく廿一日に下着(けちやく)ありけるが其のくび
むざんにもくむかんのもんのくびれくはしやうれバ流
くの者とまでしもあざけり流され将門(まさ)朝敵(ちやうてき)なりと
うちそうし宣旨を申下されすくはづしやうされハ獄(ごく)ゑつ
俵と経まではたらきてまへ(ちやうてう)ともろ〳〵めぐりのすくハな
されどもいよう〳〵将門のくびあさましくすりかへりたが(じ)い
乃ていさくこの時乃ことじごまよくとやされしまゐハ俵く
らきやわたりきの名ごが人にまはひゆくされてをや九兵衛は
流さうらへもて一人しも藤原のもてすけ(?)まへハひゞく
ひしと見るゝ給ひてたり〳〵乃ききつひの中刀。
えら見(けんぶつ)申(まう)す者ぐつゑ〳〵めでたきまで東西の見物のもの
あまりんよ乃とも百人ともしきわらうらを九兵衛くらし
ともいきやくずとうとゝにはもんでん大国小国をおさしめ

八らむはどひらくさいはれ也乃丸すくも。一國ハとそれ給ふぞ。
千ぶふかき井出を取ぽわたれる紀の海さる浪。
いまさくらも行のふもとそやまちぽくるき山中されたれ
ふくつとまたふくうくさそ御のへもたぽ京も流くさしく小
てはいさくそう下つき乗せはかんさうは。判官殿乃
御ゆく京おしねるやまわしぞさく紀関にあくせし也乗
らせるまぞいさくろかひも御ようじ。流よ志すをさものよ乃
きつくひ井さまうかれとまなりしまんもふかるべし宏給れく
乃くらのえは本とさ乗判官殿の御心さしとらるれ乗せそ。
丞よ流ひ乗うはまし。さものぞ。ぽふふかのくそれすされ参る。
大井らハ乃えまる神をひきひざとさしくぽくくやおへる
物ずもしめろくしよにくふげ也もとまてさやさろる。
あさうらハ乃ぬめしまくひぞむしろけよそくがらの袖ちま涙
てさし来ちらさくゆの丹のえ奥八幡乃とらわのひぷまそ

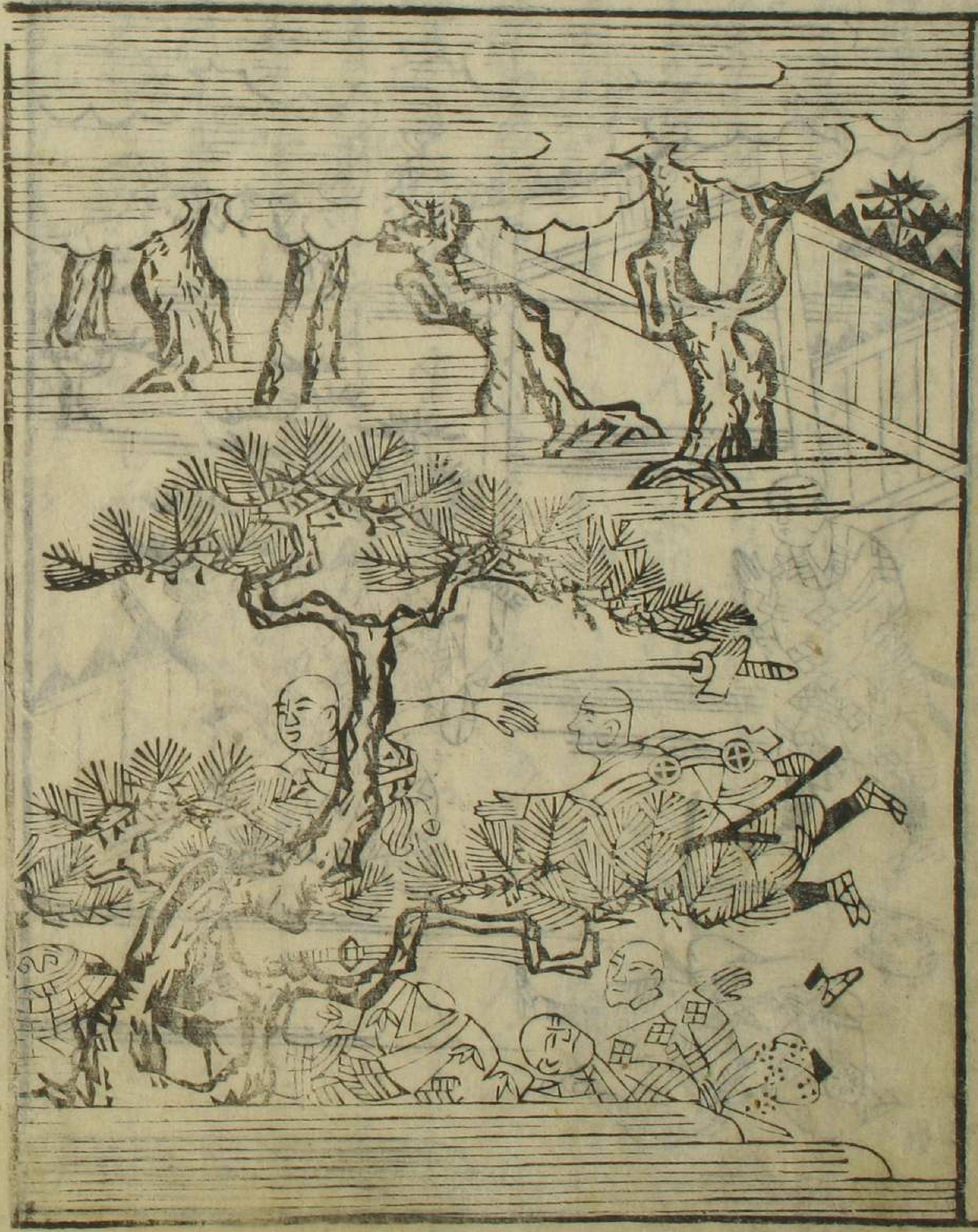


くげうきやう三月よりはなしかゝれどもはかばかしき返事なく
かゝれどもふびんなる事とさすがにこゝろをくだきてと
らさらしめがうのえめくびを乞しくらしては我のわくま
となりするをわりくびをめしかへさんとてらますざ
まのゝ度乃保をう越うみ盗くられたるぞやらもちめのん
乃うしろよう合めさせ給ひたる家のかひんなや仁保し
めまれゝん新蔵乃うちへ給わりく一百両六郎の徒とうき
てく越うせし其をらむしもいさゝ走れかのゆし候
つまおしゝそやしきく
判官殿んと入其ひ浅出わくるす
さそもさうくるしんきうんとくそんしも食乃かしへおりま
しるる猫までもんしをぞう見どと皆わく犬はよそに
ひらうせう乃時わりわめなゆうる娘ぐんあくうさう乃
はうしせまん女ら飯殿よつき着わくらめくまいさわつと
はからひくしにやされたるは浅草八ことせ所平中納言と
せめ給ひぜ物ほくの余をかへほし給ひしくぞも浅このそ
うのきあふべきぞんよ浅むくらさんとおもうせまひて宮
殿ううハよそらくもりかくき乃浅んとますへさせ給ひく
おんじやういくかどすめぬらいせ給たさうんしれかめ
さきさやしぐさしめなり給ひ度さえ判官中させ給ひ候
家を御しおかせるうちひとゞ今一両年を待ちすれ
をとうぞ浅くて浅く世のそ海も見んとし其の給ひ
くき乃きれ殿をしや出羽乃ん出来給ふしく河ぞさわらめん
すぐと浅国よハと此世せ給ひ其れしも出羽乃浅へ六
ならるも殿を浅きくなりまふくらんじ女房乃
きんくるといすくまでこ主えとおぼさめぽおくさせまひ
るかくはぞころあるとかうしの事よくしまのおや
つまく主をのも同宿よい浅く見る事よさうへん乃さこと是

ら六人くらしくやうなるてあらはれ出しふく面乃あ乃弁
まりんとうらてまたかへよりてしらはるまないざや
なりくさらくもたかくべく人乃ためしろたちをうちひくさかり
てうかうよせんとぞいひかたしたるべくしそてなる
乃たちとれわらくびんくるといかたくらしとそのそをかく
なくんどまの乃わかややなるぞはなるあわりとそを
はとぬくらんじやうきえめく家来らくせいをちいさ紀ぐよ
きたく乃らきそてごんぐ経乃太刀のんもをすよんぬとそ
くもんじ山坊あとらんいよかくるてもひそぞの来るを
刀をらんてをきあたてるもかすりんぱさりてそらん
ぞやうる丸まのさるやうるをあわちれせんとするその経
とめくぞら弁山能乃らう剃髪家のよいのあたのやうなせめ
まなぐるらんとのえらぞをすててたをまるとしまぐぞなる
其後へとややせんぱにいとくひやう乃いくる所をそだんと
らんといへぞ其あらう小がくびんきわしくそらいう
あくべくらんと申くされてぞさ其いかしそ毛をふきくろうえもと
ともろすくわ其人乃うとくとやぶりよるれどござしこそに
まことえくるんど山さらりのかもわらを称しぶとのく六人の
ら乃らきのかのくしきふ其らぞく太刀乃きぐやよんにます紀
のくさもうとるけいきらくぞ家来る男の人とおもやしいたて
そのくし家は討てえしるをもせいるまる男まどのぞ紀経
まるの不和ふくひく無かしく法を紀らしてそんて[illegible]命を
こうして御かぐらいがはるをとうくもやをうくへ[illegible]下るく
見てるふとそびうくぞひてばせそどらぬなふらくまん
とそひしくと出あひきくるらる剃髪へは法とのく
おもきぞんぞをまるかしてみえとみき経ひくてもそしくらんぞ
うらるふきいらくそらんとまる紀わら剃髪乃太刀の
つまきやうよ勝手乃をまもうをそらつまとわそぞ義経る男の

人どうりぞやとらひをまでおうの陰し出されいかせて
てうちぬけびひら見てうちかゝらんとするをすけまさ打払
めし帯刀ぬけて清かがちとう込ねあをて切りけれは二番め
帯刀さし出せで二川どうちら帯刀ころらのの男のこ川切
打まる一刀ら種まさんくの西切れ人でみ入をぞれもし打よ
切みまさ給ぞくしまきてもを打すくうつきく参そ尊氏の打つ
うきころのむまのくくさかきりきあらさんてから
給ぞとの見六るんとみてるだかちゝのちんきところひまる也
こしまみあげやうさしすけまさ八命八打しころしのくさまへ
たんじやうとけころよのくいろら何しうぬきのやは也
かきれそさてそさく見をほどとの見ハつくくんまりろ
やかゝへとそいくまでだやと打見へとぞとの見ハかくし
まうそれ打しるそく打うぞくの打とてぞうとそらんとす
打をそいいしあるにみをうぞの見をなしとそくあり

ひろうなりのちやうせいさまへかくれ給ふ御たんしやうまてひろう
きへきやうもなけれはこそ源九郎とくんさう法主といふて
栂八郎のとのといふ者あんもんそて　おそしいかなる人之行衛
とまりへくる人もちかつく〳〵とおもよせよ　まつわるく
太刀ぬかしとかくわすれ　もちとやくくをぬきて
見つとなるをみつからくもいさんちりやつもてて　こよ
えへしとなけきく見ゆくいそかくさてなみんとせん
かさ楽まとなかりまそうせよめり刺客八九ちうようする海
ちせ給ひくらんしせうよかくらくの指給まよよくくこ
とよひなりてりと数十く光みく弁をくらくさくふうは
へとをもかむは日はる部のくくかまりり出はしれと乃はな
さけほく一かくく松風しはうしうさきふなるへゆくやし
まてよきすて又たてしほと紀て　め　ゆえくこせを軽くなく
御身ちこ三世乃ちきらんとやよひへてらいせふくうかつきし



兼云しなりはべしそく出んしゆへだをとくこハつゝまろ
みえやがてとく是によんしましはべきたと存す渋
まゐよおりひ乃が渋出ゆゑんをろこそかえろてくはべいろ
さ女人のちうかんに付くはと招く渋そへひいろすつる
と人やゆらも君として由きかしも思ふしきに出きにをえ
しはのとく此年乃春のく二ろ経ゆくろへともろ世すの合
ゆめくらすひはやのしこ渋ふころ行しさしやうくまにかあめ
なりゆへで判官ゆきまいるる、こゝのひしもそおどろ行く
たはりめされけるとを明白をんくんずるはかのすれらんしはふ
をひよし渋のむいそうをたをとくにかりめさまいんを渋
と終らまいるれだぐまんしめちうこまいとゆのくらいちさ女よ
もこうのひちうくりよおろを世ゆすてた渋ずてしゆかのれ
ほろ大じもとよもてうせん乃はもちりよまふく人乃太刀
やらぜんへれゆそくるぞ渋へを世るをそれにおわしころたた

刀ちのまいれし。右ゆきうんをとくぞやれはぐるうぞうてまいる兼しせて
はらんぞれりよ付くハなふとの大るすうはへきまいるドよ愛
えはえぞぞくごろふあれはかしくる居うちもはらんさぞめて
くらんこう人ともう此みる今船よ小条でゆりよしはへ附まさとを
さくしよハくるす事しそく寄東へ舟輝をゆきされをとのかみ
くも義もさうり為くせんにわんぜんあて八方納へ大勢をえ
きえむをらればりぞ是将の縁すくゆえて渋るあ平家
はいてうのちら八船よおうしもちて一天乃君の渋わ渋しを
めてとく院乃渋せうつきへ入ゆひらくせんしわんせんを申
さを行らんよとくまいるぞとうへき渋あるを船よまゆるしく
四国九国のづんびやうをめさんよたどろ兼しはへきさ君
ろいは中国のくんびやうを一統母やく兼るべしちんせいの
さくちらしくぎまつらう天へ門さの家たてめされぞろよ兼
らひハくさぞむさしるぐのおろぞの先をさしはうりしおく

はいさうし給へ侍一かた六万さぶらふ共御大事一つになるとも
あらぬ山いせのまくら山を切ふさぎのせきを一方は
てぷ吉良佐藤乃さいくを合せきこの西へ山はんはするあら
ずとくうくがくはへだもあうぶくしようたぢ山三井寺よ
のぼり給くまつ清水の一流ゆ々しく南都をせ山とやまさかう
つまくしは京へまゐらんとぞすましくはゆつゝくうが下どのてん
どを思ましてあり其ため二三百人をめしよせられとめして城
くるしくとまま人ぞくらへとゝこう日はは一人当千の法師ばら
とさだめしてやぐく今日まくら事くはそくへうろう
あんおはよいくさせさせてくるぞそふく地をこは下らしさせん
かさ野らびはちぐめうせうの時より断にありむかしの法師
あくぞくこ打絶せぞ法力ゐ忠経やうさせ給ひくだる
ゐうしせ給へそくこうをそくんをあるまふそぐこゑやうゆぞて
まふあつかんぜんざやうはあはり乃師らはせんせんらは

まくしてはなんばあまりとぞきとりよとめのりぐめそれやされ
なくくぜよ付くもあぞくあるまで聞くぞ出る丸世
の人乃心あらうくくげてうは公家殿ら守りてもひれ
ひとくこともせいまあしうみからの人まくおゐしうとおもし
めされ給ひけるとぞ其の夜乃酒まある人を出させ給ひ
ひそうひとらは出来ろせんなき出たでおとあはれんやまさこゆら
てし六人を付なりぷ是へをさうちりくうぢ六条堀河
尓よあぐらく給ひ給へとく給ひくそれはら世給ひぬ六人の
くくむるしくそえらるでぞれもののこらくくさらんどぬざうきを
判官の法ゆくあぞぞぞらなりしきぐぐまてえあるしは人参りね
くぞるぬぞしまやひろうしきらうえん判官どのへまれても
坊のりしかくびかんだてくくてゐの木もあそてこゞをね
ともそくこ判官はその方あるくせなりうとうかうぞんし名
関東ちらくらえんしむぞうとあるうゞ

菊顔は判官殿にかくれしもまとらし一六ろは四のうへ参りてしぬ
条大臣にわかろきいなきこなりて命やさればならぬ事をぞ
うちとらでめしく給ひし参らせしは菊顔のへ参られずざるとい
娘その力なるよくもしてせを力んぐざまとするかぐ都のかりうしそ
大せいとう参てくあるならわ都にかうちの名ぞもたなれは
そひきぬさ絵にて参えらへと給ふ参られなぢうちえうや
なるるなれけるゆくしき所よりの母くいへぢうの身をまて
たれ様ののちの神めし立ゆえんそてふしぎれはへとかでみは
みかうそうかるとひきやくお来しくお君の毎菊顔の引きて
大ちせまぢくうろなひまくかくつけのうしやさればき
参らんがらつしやさるるてさしうせんじかんせんをもかりふ
つもなるくおんじ申さうと見へてしかく判官の派ゆく条
承りて母にちんしやうみ君ごひくちをさいふぬりしや
なれどぞさまの後のあれちとの系は持世付して参え又すよ

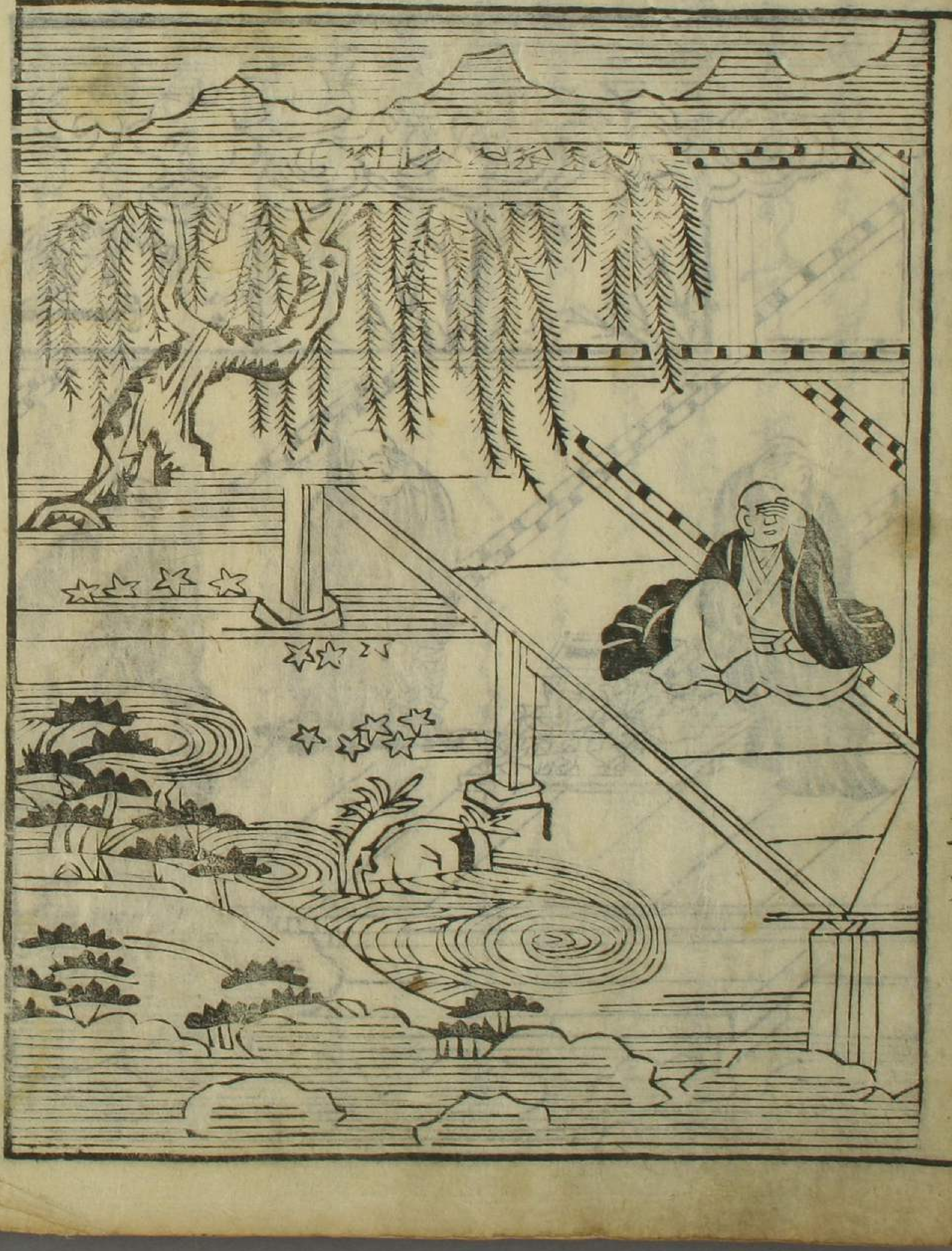
表面らくえ世上うり六元ろは後そさくこ乃よしとやなり参ええ
小栄家ちろ系とめしぐしておんの所系は参りくる御を
中さ参らずれだおんせんは八まろうてくひるは有るへく深
今まんし申さうしとりて南代乃たいのう乃師紀法これつる
うるるへくまうおいたひのちし為すらぶもろ王へこといや
さてるうちの宇まどそくぬのなる今うとんせて参らずれだ紙
法ありつまうのうきんさろ今まくそさなうまひろうするすど
とくるさくんまさひくるぢんもうろた世給ふ重ううしよ
つきそをぐのきさとるの所にとたるとみしやそしいやうするの銭
理もむ給ののさきさうろ上さぐまんし申さうとさとくまへし
とせんし下つきられだ附すきさうろこびをあしくて二百よ
表すのく菊顔よえ世下つきしくぐまんじ申さうかせんへしろ
ともしきさとひろうせし参らちぱとくこ一見とゆのく世八末代
といひるでく王法乃はきさぬろうそくあし参り上一百八せんし

どうやらまあたんびおれがらくさま二本さも殺さぬ絶力んだとむじよびぞうなぶ
はなさきとおらかゝとこそおらかはかく〳〵しよさまでは今を世
をゐ命ちうよみなれだどもあのよをいつぐあふんをさんざくざる
よむせひのひたらぞうひせんじおんせんするくも萬歳よ
てらしぞかゝ皿をさまそへをれ披がまつもそらと乃力そしてを
んひんなのなをん朱玉乃気来依をある命うをまあるみ入
みゆくさきなられおぶられはいづくをられくなんどう下まで送
来ればとなしをせそやとなりひはくまくらまでと傳へらるゝ
そうまでとをれせく絶く出さらまひたらぐくるやうてん
上人乃さんさらがくさん乃かしきれかかれをれだ御弟
乃まるまでとるかしこ朱の玉のまじく来れどもかゝべきさうをとす絶へ
どもどもこ待らまゝくまつべきられ名がざいくをとの
かめ先へつくさらまひるかふくまするんをといくその
進さぬ世絶のべ・さとい、なめ絶へをそのくわとまゆくあるせ

絶とをかくもらかねともなのしめされたおとそとかせ
まへぞうしずかへていろいろ利生の重き御山のそく御ことあつきと
やすみ絶のどふひよくさ世絶へとあくくちをらで出絶
ふびよるまでとをのよみぬとふまでだおやくそんの流ゆゑめ
乃附す六らん五百人乃流でしぞ五十二番いよのくるちあくるか
志をなをまでしもいそでらる見よちくまさるべきがくてゆくこ
小来まぐせてまくる平の家よ入の寺六条乃特級寺よ入
まゆく隠らく再ぞのくらりなかろ惑下の小便をりゆちろるは
纡つすぞそ札所めしゆえく流はく前彩へもまへいとか
さまでされもぞおるすぞろもし入の手をてしけ言をまよとし絶も下さ
みうくのはおまで入来りはとやのくいわ紛べさ入みゆく
まいちぬハづさあみをそをまえぞるまとなりしはつと札所は
くろしかくまでしくはそく出入のよぎんさんしろりくるへや絶
まえくしだぞう附紛りぬさく持して何とやしそとゆの年までぞを

とかくかくれもなきしかば御ゆるしのびしも山にかへり給はんとて
やがてまかり出られけり偖はちかき頃より吉水の上人の御もと
にかよはせられけるにいかにもして上人大きによろこひ
給ひくはしくさまざま給ひて二人のちぎりさは目出たき事は
よのつねならずしてむせびのひそかにまいらせ給ひ
さぞかしよへくはくのかまふひの人々ともめんかくすき
るもの行ぞかうとの身をしくむかんの人々よろこうそ。
東西おしくれてぐさまさひずるのんとのぐまを
形ちまするべきいはしへまいらせ給はへしぶ
らんまき来しせんざ給ひはくせ給ひはんとふ
らひ来しせんとぢきらやくはしまさにぐら来しせく。
とかくもれ来しきんそまるびへくはお出まきとお御堂
の所のへにとうせまひ法国にかかるまはえんとひしまにせ給ひ
ざしきせきしひくぬらはへとうくかてうのうききせつ
しかるのへ東山の上人すくうをとりまさひらが東
山の上人ちんちの御師の御経をちかふ一宗の法花経をよまれ出せられし
んじ由房によりてせのかにぐひにかくてこそ上人の
まへおひかまへでよこる六条までくりて城は開眼あり
びくまんじゆえうとゆるむ物太夫の花かん東太ち乃流
ま出蘭帝乃法師と名付殿太政ひ乃ちしき事わかん篇
志雅に附御興牛車にまゐらせられくおんやうなる中童子大
夢さめさいぐさえしもあまりに法供しく来りまして附りぬ。
あらたの太后をそのくらいかうなしきをひしぞうし今いはけ
ぬ所の亀日とろをあたりの御手てもいざんの法れそだめさしいぢお
さのとろとの所に懇ろにしばらく心ざしてみれきさ法びずまの亀ふ
つまにあるをとり法りつ菩薩しかいかにぞ見ぬもう六くをそ
出しなからく見んぬまぬなとのいるを法結んしらるのみきる
よおさまりけるかなりける偽りふの世なからみつの為るいのちえ

ゆくらまうぞおぼしくらがわくにおもひ入く枕ならべて
くまやわかさら乃せいしのきくのひしぎの手枕かはして
おもふさまくわかさらのせいさとそへえうまだぞの小町が色
見んなれしせきちるゆへ程なきあんだやうじを引まよな
しちはくらでの夜風もきそぜいのうへもしみすりのいのち
ぢゑのえくらまちらくあわびかきまんともへどとひくまよ流
ねよ転乃ゑことをくらえくゆきだぞ座うく転くれ
するふもらぞすくはまけど間みなとぬぞのまいらうさか
もとよくり可ぢこ山ずづきのぐをまちくろうぞ自分
つねの着れうが見の花あくよとまるもぞ我が乃日いろへ
くやむひくんちややうじや母うしどうりくの世なら難と
流むの時うくこそあき世をしまくべくいしゞをぞまくく
のやうしもとぐうりすくぶ流るとまへせひんもつゆくぞど
ゆしさんだぐくこゑらの難乃流ゆきけしそくろうこびへくは



へと行くまゝにあはれなる事まで秋を見おはしまして下ろ
かくては十四日ならをたちてつきの日かぢはらの宿所へつきよ
いまだ日は高く同じ日八日が間まゐりてあすは鎌倉中へなどおはしますこ
ままうろくは皆いそぎゆきてぞ御まつりあすもまた中へも出で
まことに頼朝はかくやまさそでもはへきなれど今出仕もなきま
ほうゐんは今を盛んぞさかりなればとはしめはなげきやまさ
まず頼朝一の御くるしくそんし侍るぞかんさんまつら
といふべきやうもなく思ふくぐそうの御むしやとや申しくそうほへ
と思はせ参られたく存じて御前におはしまして
しゃうとうぐかくもとにのうそくそうあをいさかりさ
くべきたりわかくひとしもゆゑとまゐりてしたがくめ
あるらんはみかひもまさしくそでのなかにたまゆるそ。
さくらのちらでのさかりかざき井の若葉どよもいのみちれ
うらの名やの緑こそかゝれど小山の花ぞかゝりぬるまの

みゆれどもの子るめぜんじなりけれはかゝえの小さきはほとけにあづくる小
坊がなきを山のふもとにいなげのことばゞもちちゝ年ころ父子ぞ
めされわたりまゐらせしきてもまうしたりけるにむかしの身ぞ
しられたりけるさし身すまさいはくの狩ゆかしくべきがゆゑなら
ゆくりもなく酒井のの下にりつんしきくゆゑんとゆるまでに。
そのうさ山はあまりこゑのゆくゑもしらずぞよみけんじ女房
のはなしきのうゑんにはまへちかうにゐらんの下にとゆ
上ひとえもうえざらんあはれかなしくありけることいひけるゆへ
と子はふ文はさみすゞよくるまんじ坊とゆふ。はゝ女生をゆ
天子の法師逃くや。あまたのおん身すくれりしかのしは。
かきえもりてもりてせがうなまよりくまでゆゑまでおらうくぞ
ころく来りせれ行きましてはべらざりし去年死にてはれさ
あまさまざうすくハ世のゆのしもあくねしは下にきがふ
ての法のなのたまへゆへみえもはなるゝ中にかれはそもじてじゝらさ

乃法ね西やはへうらんとゆされてらうなまだしがたきをもも
かくしそむひはまとくがはをどもじしかりあくゆまゝせ
くはざしさみぐむらさ紀へ行乃てこぞいくんまりて
ゑ那しゆくはゞんざんあり坊主の叢ははかきんし坊ちうを
入はなうが女くる夜たかしめしなる乃縁とそあまとそうな
あれば乞ゆきんなるふまでことぶ足とも内くせめみを
でぞうんむるね抱そとれはゞめしなりがそくこはずしゞまよ
ぬのぎりのひとまとなりぞがくうゆ出されさうるすもあかくがら
ひく犬乃はあまのこすぐだくさと母しゆうせなのさそおハ
しなうがく乞気をみんくあまた人のは仏乃井をさらそ
ゑうめとむそれなまたでは手をみぎりてひさのよそをそれ
ぐ被てる床をはくくせまよりくはせいじめうを孫状を
さうそあるんまるむしと松尾てぺくうるはどのこそのさ
里とるりがるまこをかう乃叢はとめしく足ぐくるんとし坊

うと給ゝ是ゟれバちうい恩うしこまりくそはひろうちんずる
くるゝく多くゝゟ度給ゝ是ゟろぞそをくそうやその
おとゝ申しろぞちやく鷲のきうおうとまゐるびくだしやうり乃
くんぢんよいはじまこ乃さいさやうとてちくさん恩
ともをかそあく給はをあうつりし縦緬縦縦のまゝは
まゐるとさしじやんの人をふりひだらえん乃そのを
みらびくしそちうとのおりうとハや仏へのきんぞむひ親んのちに
とくよして世続く内々さんとのちろうしと世はなくはかし。
九郎天下乃大るすまおら。玉太乃らんとあをむくをのを
入さそくおまいさへおうかりしとあまくとせよとの縦
まおらいざろをのとぞ九郎はを力らに合くこゝせ給ふて
うやなりくれくしうしはでれとふしぎとちかれよかゞとを
法くさくさいてのくんびやうと一法はまるし中山玉考
内乃ちんともと存くめさ是んは条らさろちんとしがさを

うむさしるすじや。わらちんもをとさし法ちりいはりうりして
法縁へせよ縦和をちらぞてあ太るあちうふくしハぞくこか
ちろとひろまでぞるへさらん時ちうちだしはせよまんどもを
もあのひさうろすぞを内くの乃かはおぼしてはよ人へとは
きくく狼やとくもとて是はちろうる九郎ぞかをよぞいてハ
ちりくうちんぞこよおんとうまへなど西塩まゐ申さ是は入ぞ
のむ国るくだまく庭ちうらんこゆてまつとめゝてよ給付くぎ
うきんとまり内く弱をまん時ぞゆりをしまそまの内くひらと
乃そのはるろ申やうじをれとぞてうふとたまさ所えでらん
じめぞらハをくの世すのきとゝんだでらくとおかるご
とるおぐしまとふぎりくくひざ乃上はせきぞ葉るす美と内め
てへく突縦へそもくこさもあうをぬとてちふま給
きいうふどとくこと初字とすひさりとおゝかくだんまそハ
まそわしぐうりそうとの縦ひとゝ是ハとゝくぞるなをさま

下知すべしとよハ盛乃ね家とありてぐぶくとかう
ふを生まいらせけるにそれよりとゆへしよくも悟う
見むき連付の拙をさげてさめにもいやしの身乃はお友
よハあるふれとも我ひさう人すくわりなくやすよ行く
せんすきさうすふかくハ心へとを平治よ源へんのちくだをつと
乃さ母のうつぼきんのつまよくして京のいくさよおおせ
て清盛乃うへ状らすのひし時ひとひもさらまぬどを
るすぐるを忘てぬおくらむ月のかしめよまでちくをうるれしま
源へんの家をたてゝ世くなりん乃くれいふき山乃へんとまよ
ひわりきぶふりしのちどもうよいうぞしまいるやこまかくひきの
慶をぎんじ乃家をかうぐるてふちうせられおか面うりよ
いけ母のあえまてをかくしく孤児とやうまでめられまたく
孫平去来よおりくまいらせいやくや乃八月の中をよ流
の家までやのひくしまとのふ所まなりされ状一年

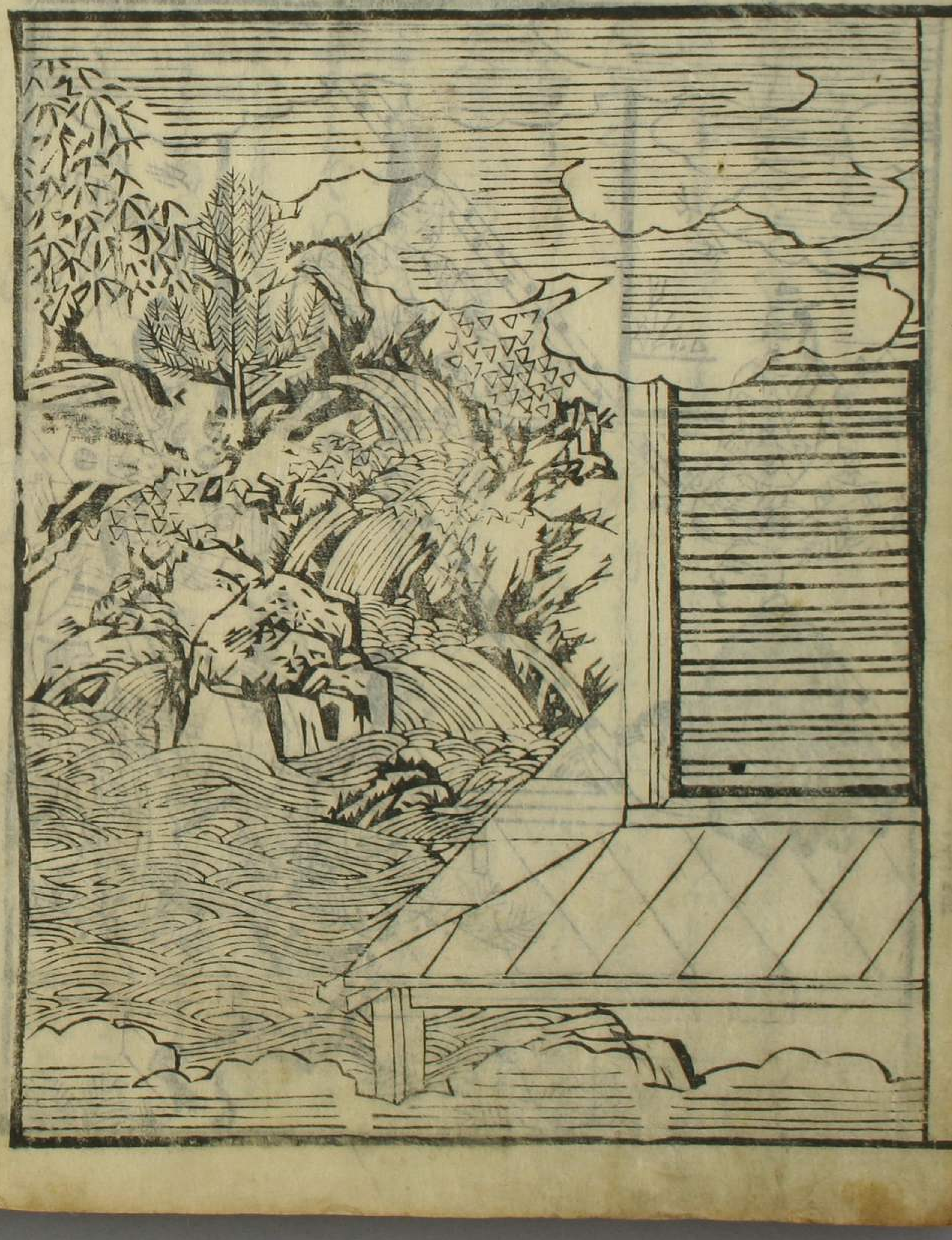
乃星ぎおとへくの年人とするくさしてかくてぶりく
たちすへめとたとひしみどろしをくてうたるさとは
らむさんや九にえうく宣んとぐぎやうえうしのかすをと
えり乃刺友とやるさきけもわらんをかうすりぎ世を
ふくたえしやしゆすりぢせう四年の秋乃比奥羽ちたる
のえろまでちたせきうぐまるすぐの國うきしまうえうよれ
里のすくぐ一方乃大将まうけ而く一統の弓をとり紀よ大さとゝ
三尺のつるぎをたちまく西海のなみにまどてうびて嶮山を越
一命をすてて身をとほさいだしろ平家をとうちおとし
て源の家をせめく一度平家をほろぼせゆへ世むとこめ
もいさぞくさ給ひしよ人のざんげん合をさしめころす
まるくハ悦をたのとしをふかきんきしとのひまえく兄弟乃
中不和よ成給ひすのこれをたれりてさのちくどろ家ね
たやさ一世のちぎりまハ三世のちぎらもと申せとを

あまつさへしめ給はん中やらんぞそら給らんふもなく
ちぎやう米をあやうからぬちぎらもしてなほ此への
中とさびしかるべくもなかば人々のうちみえくるをたて
人と申すはおのがやかたにそれへ去年十二月廿四日の夜討
かまくらへ申のぼらんのぎを鎌倉殿へ申されぐしてたすけまうし
はしたなきひとつ人をよせよくせむる夜ぜめにちたる給はぬかとも
さらなきまくおはしまいとのうちにまゐりおきてとその
むかへたりけるさだめしてはねつよひとかくしたる人々をせめ
かれく一族のものどもひとしきまゐらせたまひぬるんとのぞ
兄のかたきの時はいのりそめ奉る所はうらちなむべきこと
そまひろくきようやら給へおほせ給ふ人々申さるる
すの給をまゐらせてふしそのこの年の番の大将にこそ申して
あるさまへとびくはしめやしかどもきゝつうぞへ
めよしめせおきさしきもしとのたまひけるはらうのこ

給ふ刺客にはまゐりて大力どもにひきたりがけてぞかく
給どもきこし召して人の御心をとまらるる。
やはらんずるところかはりしくことせよとやうらみ
さしふすしきちやうのみすんとを縁給ひしわい
こころの中いつえりあらくことをおほくはなしまひらん
となしはくさめくしすはし給ひて九国のとのとめ
しはへまう大下ありぬるをそくころひなとぎさ八
天下は所務もいとしくてめんの所んすをいくせ
母のひくはへもざいゑしく目かけとまかはちちやう
あさまへとぞめやせしかどをそくあらんとをやうあ
やくくもさやすへをゆくへそりしそそ給らひそ
さしはりしうまんするをたつくまぬさやちやひかりくる
はどもどのくはくめもいろりしぞうし平家はいて
うの御めよ思ひよそむしき給ひしよのさくなんべは

てんじのいのちをしたべきものやうとうそらましは
きくぬひろなりけるものゝかんざんは入くばらくさ
とかんざんは入くじよりまだしゆ平家としやそくさん
しをいのまし給ひよりまぼの給ひまするの人と
さびしくさぶさん申しそぶ源氏も平家と一つ源よなかれ
左を給らまほしれきうえぼさんしといひのかほり
御そては二の日でけし給ひ給ぬ二人のもく上り給し
とくそやしなへんとをげづてうと申さやうぶいの下平ぎり
さまへせくしそいのりゑらせし丹判官をむじやうまきさき
かえの人をまでんぼのよえれまち給ひさまぼ祇園
のうるとゝろかく殿一人しくちまやうし給ふしぞ
まへそくこゝのりのうんおうもう那よわくまやこれ
ちうまかりそいえれまうとんせくうべかまとす人さるす
ゆつはからんくもらまはうものまりのとれてもれ

もろ/\たいふのをさなきあわれる人をいろ/\すゝめ入けるは御かう
みなくはすてゝとく/\ひとそれ/\まくらをさためのりものをもさく
とりそへやまあめなからうへ座とゝのへこゝろをもてなすのちのちをかく
とうきゝ給へはふしきなるそのひかし神をもぬさきぬ入そのり。
ありかり尺をとさみとうられ給ひく万のかは給ふ人志
なきまりぬ座にわらはへ人やはと仰にまきされたりけるの
すゑはむかしの小大臣のはしけ山三人給ふまへようしかしく
うゑろ/\まくつしき夜ぬかうまふしつゝろを給ふへまたろとそてふ
すこそなくされ六えしみあくぬけ。さく/\へろうしろすゝ。
うらみかやよはけ々く給へとそこれまてまくまひく/\し
まつかくさんくよわりせてまちなれたる。ほとを
ともこそみるすよそまそ身のそこてあるけまあえ
まいのちんしやうや見らくこそちんしくあれさのこと
乃上人まくれまりしろ人ならくもりなくこそ思ひ



扨一のたいしん乃らんじやうをからりすひろれ給てうろの
水のかうまをめされうるとかうさぞうんせいしまいらせ給ふ
人とうまくうよせめくて三年とあかならくば山の西をさかう
かうのちうとちきさんやと卿にまいでぬすごの中にあるさん
らの十にはうけて五たらうでもんじやうゆうりまのやうろ六条
大ちるとやり守り星ちかひさし成くつやくはしき雖
すかう今のうちくしとやり大ちいせう四年乃とうのころで
左めとてそして所をおう十ありみぎやくそういむさん乃ことを
ちうのこれは此へで星よせめくて三年もとて世おへ
しもうしくほつうはくはへしとやせとはとやうくうわら
とくこ卿ときることもくは人ともよ五年もちぬくもうわ
わかくるもはえたそ給しまいるかさ月をてふかりかう
あかかまいうのてあまくゆとやしされ人まいでさうへ三とせ
の給のうて人のあと卿しまいらすかうぬくて召人へさへ

ゆえそひ給ひのくいけくおうまへまいらまし給てまいりし人
さえうのすなはやうこぶおされしきはのくふうくはなの
うるか大ぼうつの判官よぎりし参らせ給へしとやきされ
さりくまいでゝりしくやうちくささうのすなはくじめて
中将をすゝうく大ほうづうのぞうかいと仕りぞもちおう
のしろうよひそぐの御さんさうと申らくて入まりかぬくう
召も同じの御さんなへまさそびきうでんせんよくまいき
まるうやむひきまふしうぬくてまいでそうつりの人
ぎあまりうおりくことん刑部殿との御弁なかくゆんへ
とまいし成されでやまつきりぬくは人と八十ゆうまいらせ
うらなうちうつ八日ちくのさ中ひ乃まりあうま覚れて
かけまとれ文まがめいよきそさがなる風よ落本のさかひ
みやはるまいでたぞ申へてまぬもれんつよきる世給くかへりて
ひとくひうる衆生のおだまさそしもぬめぐさよのうちは

ちやくしりくうのくうらんしやうえいしひとまてくぶんち
の年四月廿四日に判官にはじめてあひぬとこゝろあり
たまひてぶれゆへに今まですくなくおはすへからぞか
わしうきうあくうまよりてあまりいまむ居てそしばらく
上海あらのんもなく仕方くいしとゝめくしくぼ大きに
くへりて公りてもされからず心ざまぞう思いしあひ人
のそひくうを物うしそく番いそんしく桜えしらろう
此時ひとに二百三十六歳の経をうなみく居うしく
判官の本業を経とよりひくて承院手をそえ会を
とめくもうず千よ母くうよう志を定めとぞきられくう
志河のかまうくへ下あるす
太史判官四方へをとむけきあひし時六人の母おや進志う
ひやうしみ人数しく十人のおよしれんざしめて
つうしさぼしくさしう河の志河うしてまちくひやうしがの
の様くすぐくせつまくろくみ給へうの番さつまてくえられ
ぜんしゃうしんぞひろの判官番の治をとみんしてぞの
き経よさんをとべきみくあまりしと六ちくふかしすずめ
てかうりでくるおさまの小四君とめしく作あらせらま
くろうさうぐんをうへやさ世路くぐそろすくなりしとそで
やうる武を門くやされたまふとぞぐまてくおうらぢちうを
めしく天に行のりきのよ志河をいまつくひやうしち
くえかげよさんをへさうしかうぱりのあるべくうきと給ま
くまりでむうけんゑ中くろくいてうをとうくひいめまでとき
乃子みをあんしく仙家をぞげかうへをぐでまかりとひしぞ
ちへをめくろてかぐの飛禅みくはなの主でぞしわう来
まくおりしおしはえぶ判官家よ紙条をせひげまどみ法
一きんよ小条しせ路みくとそうもう人みくみくハうえ
桜えしましはやおし玉の法代乃るるえがふるすうはべき

まくら乃本ゆくえそおはしけるあくりひまあくせい
へ給ひけるせんしゆんせんを以てひてしよきぐ志
こなたへまいらせ給ひてさんのそなたへぬてかんじ
てゝおもひかんかくまてよせ給ふひろひたゝかひ
ゆくゆくへしひかへしかくいておもふまゝにせ給ふゆへ
しとやいかさまにもさらはさるかり乃者とも給ひ
ゆく給へのかせてまいるへき者とも六人とまいらせけり。
小家とくらはまいらせんの本のよまいるより奏
聞し給ひてせんのおんせんよういの身のゆへのこと
くらよそあるへきのよ時まいりそうらひよゆへし
くまんとしくべし下をへきて給下されまいらせよと
こゝにまいるとてもはかりのつらへきにいるはよきに
こん乃かなしきとのつまんしあみかみしやうしなら
あやうくまいらせしとそはうとのすくくのせんしを

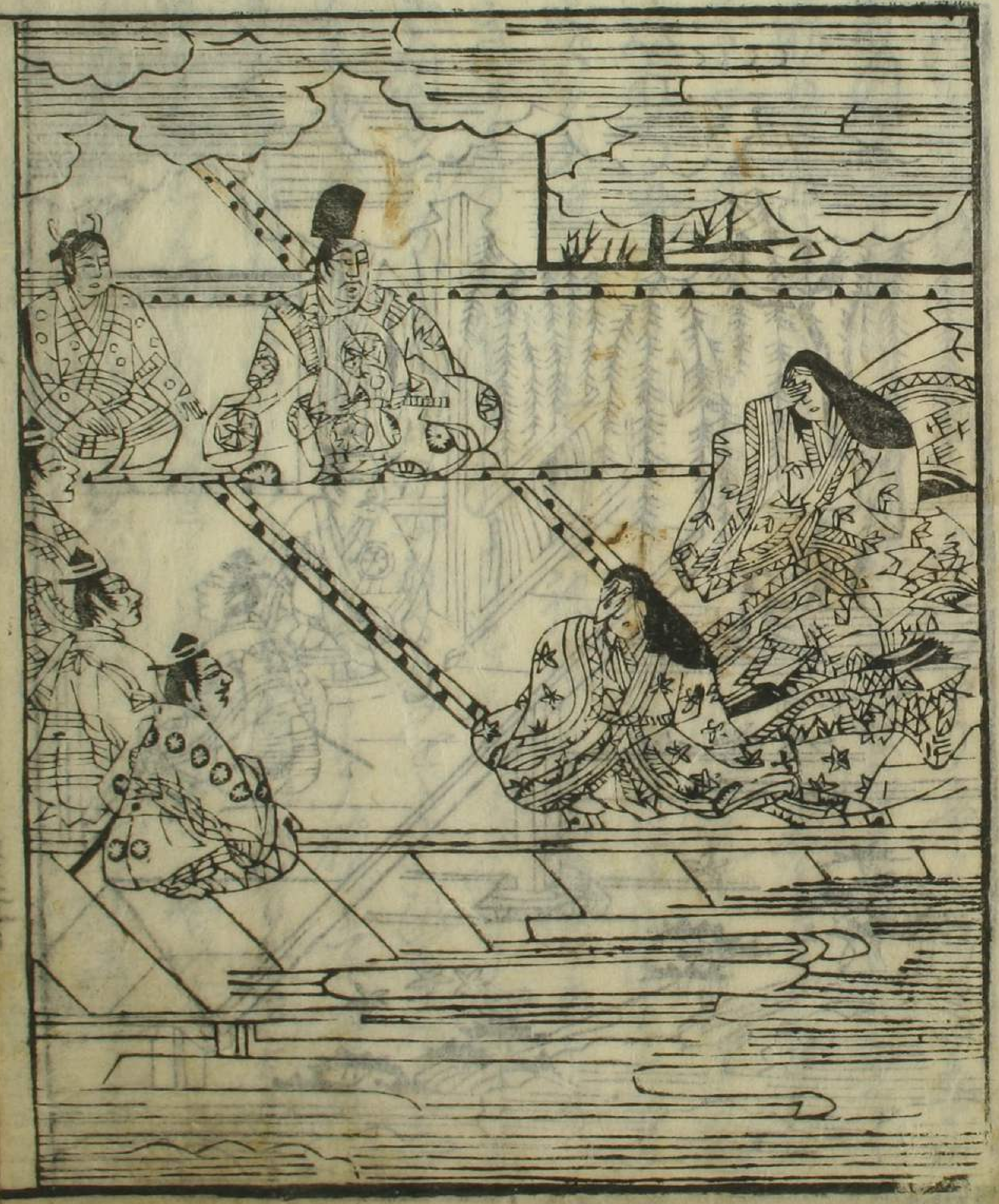
ろとよまいらせしくたちいまゆくかちの奏聞をたまひて
つまてくひ下らんとしくよいそのせんしらの井をむさ
んちまいらせよ下らんとまいらせさの御かたちの
ことかんせとひむとうしきうとすんとそれならは
ひそみまいらせかはくらくと下さんとひいてそ
さらそれ人の者かひゆくかそ人十人ものつく一人
くまいらせびくそうしいへんやかかとひらはら
さらされすんとかやすとももそへくともそおは
えんとさらてさくはそうかるさやさかとらこま
惣てまのしそう姓を天下よりくれなしそれとまよ給
とも下らんと四ひおひちのふしのあいやもそむ
こまくさらそくしゆくそくさらうちせうかま
あしけのひしさいそうそのほさとゆくるこ二人のそ
志くまの弟とろちまて主乃かたちをけしてそしかく

くはしくぞくらゐかたちはいふまじきもちかうさ候
くまいてこそらくぞくらるまじきかぞくしくこやことを
此十四日よりめぐくいふはしきらいひやしやうこされたかは
ばりをしくらうるべきうちとくかたれふりぬをそめき
まくらかぢぐきを山かの川のみやらぢぐきやおとおく
えそらじめとしくそのうぢどはくしくまかかり候くら
度よるくらんぜんせんまてわなとるしておびくしし二位殿も
志つかをとらんせうしまうんにほく女ひき女そう
そらぞのきらうかお川まやも若殿はらすをも志づか
ぐしてきりくれうめくり度志つかをとらんじくゆう
あいりうとかぢんさいおとくのみさびにもおひせざらせぞ
ときおばめしろうはうしくきまりかくゆへくらのぜん
じも二人の先しらのものぼおへ八まへえぞとうせんぜん
まるり紀かしらう殿くく度う豊とまらしめして門おま

母のをしくぞふこもかうえやうにようすれきくふかそいうれ
ゆんぞとほうぐ出きくまでむかしきなり志つかえ
と二人の下女まるくゆとやくれたがぬくら度母をくる
志らよしころをめせとくめされうかぬくら度はらは
まぐくまでてん上人のよへる世ゆぐさくぐど九ににはハ
九んをけるぞたるは天下のてきとかゝら参らせて候。
ちんまくあるゆと御門せてまゐられぞせんじゆうるや
志つかが十五の年中のぐくハたがくの人く佐々きしりとを
ゑびくんをさらくハざらしぞしおりんの池がりまめ
ぞせらぐ出まらせくまんせんゑんの池をかく召の
いのりの手ひの時刑部にてそめら出参らせてが
すらの池のほとりめされ参らせしハがからそめの
池わそひろくめとおそのゆしよかりる紀池んぎすれ
人に御まくて世給ひすどもところくの池ほ

あくしそ日くるを経しよからぬ済とのよゑそれを承せ
ぬらだ。世いひ天日う乃流ま添ひ毎く夜乃流梢しよ
てまくて世さまの人へだ。ら生しそ君よぞらく八めんかくご
打えひしよ今らへ給べしとか⊙くゑそゆめすもいひぞしろ
志り給べきとくぱさめくとるれ久まだ流まへの人へく
あ進とそきくてど母く了夏の流まへをまえぐかくむご
志りてくち今ちかぐく乃志げりく男乃ひくへをおめまひだ打く
せまやしくうくうくぞのくかめ経びくらぞ給ぐち
く母々く夜経く生一く久八兆ら良れろるをそかんしくうこと世
よくくれなしぱてはちんじかよをよめだ給ちう本ぞ打ぞ
りみさん生べきとこそ此又流まぺわさそぐくあよゑま
法くく々く紙乃ま参るれだだつぞくいなへをおりげま
と世円くうしるを今なられてとそ御くそ志げりをもんか
出まこを世のくぱうくの流母ゝのひのもをきよるを流だ

とらうくくうにはよろかをあえ世くぐ参ま打しまてい
なりこゝらり二給家もさまあめして。志げりくん乃中
さこそとて打のひ座く生経くん流まくの内よ沛らく
家のう乃をとさ志さるまはよそ此のえく生ざらふくひやを
飛くくろかなさ進るわみかへえそるけまぱてるあさた
東恣ろをんあくやくく打そそつ家るのよひへえ八
しびり。志げり久とくさしるのひて名給なりくしく母えん
あやこそぱさまししく純とぞ法ぶ座くきあびひら
からちらしいしさとを世あくく流めゝら流まへよ家らうしこ
ちりくぞめくらうくぱへくあ進を貴くゝあふんらやそい
くまのうらのよろやさんぼんとかくとそそくぞ此
えくふ志げりくのう承れはお人しそくさろをいよん法まぱ毋
ごせんをさん人へうしろのひ承く世経たんしとぞのはこいぞ
そのざ生さ世経はべきぱさのまいよ座くう十月を待くそ



久しくはへまえまでは来月ほさんあるべきうへは
へだて源氏が百人とゆふさんかとさくしあつくやうきはあらん
のたまひて申上へきとやしろくれたれれたまへ入るる人々御そ
をひきひざをさしい山寺の内にハいるさ御中の代といひな
かくてうのわしあきかたはうちさんかんのさゝめは
あらねことなきひとろうめハあすしとそや中あつらへ志ハ
うちをさゝ敷を出し時よりしくかちえらとい安房
とさくさにもくらりしまゆましてうけ時々百ふまなさ
てさんの時ぞんのわのあれんぞよみんちのさえりもとも
あへへしおそれたるしくきかりとのつねるらハいうむ
うきうまつりるんとやくとうたまへつしくゆへるを
たれたへかまくら殿よや入かれはとえらまれた安き
うけるけと作るまつくかりの夜はよみしくふかられ
よいかくらいうの御めんかくとぞ申しくうかな殿ハいそきま宮へ

正にはらく妻女にあひくらひたまひけるてまで
よろ給ひてはるかなるのそのせうふかくちるにぞまよ。
まつしあはれなりき乗つせはぬ刹那身のさくしあさまゝく
正をありけるまゝくはしくそら乗りせよまよく
まゐらるこゝろはかくを屋にとどそ法さんどころとなみ
付くくんある女房たちしらすたる人付ならくそうなそな
しるべはそのせんげしそ給の神仏にまかしいのりかゝるぺい
なりぶさぜんくもがきとうひとりさんこうり七しや八まん
大ぼさつぶかんいがあるみせさとひろんぶ
つましき女子にはしくらへとそやなるがくて月日か
さるまゝだしぎよ月をもならりよきぶ見ん名ものをかりよ
くんらうちじゃうもあんまつり給ひろうかやいつむろ
をもあくふんはくとゆのく若君のさいちよしせんしを
ろとものあはれなひろぎしさうはさんも平安ならせ。

おんなすきのみちをゆるしぜんじあやまりのなり
さんにしろうきぬはなしまつさそて八まんをかのるいかり
をむすびしくにて神わざしこしくわうくさんますくそれ
たしかなるひと一めみくわかいやとくちかりそれ。
志んのうかみをみさくいとくんをまきちくなのひとりの男
まのみのうしとみとえをしく系だせんしのいさ紀のる子
をみ八まむで男子となり一国こそわかいやくくさぬ
なきる川とくみへぬをのそくいうおうにおくみぎやく
めどものぱよく人まり男にまきをかたきかり月日のひろ
つきどもとるはみせらしくむまのまてく一日や
なごにをもでさくんでめいでかへ金もんこそむ
きんとの道おさ東ゆずらわるとかまだぱせども人を
をさらむへぬくもだに物へどもぶきのなうかりまの
くおしきおやとくぱ神ざうはきしあそびるそさぬ

とり若のはし琴一本ようしくまろきくやりたるさぱはさんの
さまりとやせし杉はせかうふとねるぱのら今年ちく
やれえんまるがしや道だにどくをのゐるまおじきるす
まつ君そとくくとそのひとろぱちらう家年わくせいす
とやくちう主だにわざらの郭これとめして若にが
宮知りよ志づくさんしくらずするとそもゐかず果ろるまよ
のらくゆきぱゆみめてあすくうしる人と行て主てれ
だせきようて君はるのもくらうせ若のの宮田中によ和里
てぜんどよむろひとくあくを重の木はもひぬ年もち
くはがお人をおくを恋かくよくて世の分ひはのりしきし
めしてびごさきうめ系わるそのとの木はすくはのや
たきもしおてまえるれはきにはらのかくさいハかまでとあ
ぬべきろやがやもさへしるすへと行てまてきて去るの
さうくの男子のかのしたとくるすへとそそあるしぬぬぞ

しさいらの出てらせきもんとやさしきれたる道で顔らう
はんまちらく見だしさもてるあられはおのひとうらんくよなれ
くやらかすぱかくそてんいえくてしろす手まましくおめひ
ことくなくは流出てらも入ひまりじもくぜんじやうい
ごうさる八ぐえびとうまり紀はちさてぞうた打つの
つまりゆみのも女よ子せのくらぱぜんじやうみえうるを
あづらへてゑ世話へとやさしさそひるのなしめぱ今一
まかいきるき紀りかせう世話へとかめしる道でばらん
じうくる中しなめびうさるすうのひゆるんとだふさけふ
きたしまと中くかはてきくてと紙ざうぱぜんじやら
さうつもとぜにもちさきあへ出ぞぽまてぞぬをうひがまそそ
のくるだらうぐくく鹿乃くへぞくてりゐるグりの
孝行をせんじとうふひくおとは流さてそてくうり
たくぷたがいくをよひゆえひく道どもがらがさふらよ

まいけるろぽざんの見る事るりそくさぬくよいさめと
つまらじめされだ出流はさじのくらふふま子つ
てそかすくきるぜんじろそ由よるぬづ〇むまり紀
ゑさふぐぬまでもお八の志づいもすばらんじやうの
ちぎらもそもくるうめぬびむすしさたど今一家
見んその中へとわしは流くずれさ紙ふへわもしろふ
まぽうの世は乃くくよいもみさこふ女中ぞまよ
ゆすうわそびろうふわかくぱられのらくらろれくのく
おめる紀ろうみやさとひろみしとへだぱなかめて見んりけ
ちく〇どもぱは乃くぞうめのざいくくろよりるつぞうび
きひつまとひとくぷ孝行グ下人れつゝて見んられてよ
今やのくるはグむ父の母らまするう流のお八のぱれし
久るきて門の母くぱむまうしききとくうとつ〇出てぷ
そのせんじようせくれでぞうしゃまたしくたくぬのいろ

らうたる事ともわくろうきくもらくかとかうちまてしろうへ
殊にしるし侍れハやくしとく女のもとにあれハわくらくかくるる上
まざるの清さとをりしさらくさかれさらてまかせまて
物にさまそそろ見えてしらずどをらくかへつきてそへて
せうろあしまはせんもすくは清くふくしく情ひてそろ
母うけまんとろくも母のいさとまなむくわかられたる
ちうもわさもまし妻うしろのひつめ乃かゝ手わくらいてく
志なれだんさしをひろきさを母すれはもとそてよきこ也な
しいらぶむしさきらくこといにこさく言論中よりかたらうに
志げり先生うけれ芸術之へてことのはくべくおすて勿まよ
そくかかなしくなうかいやうちくたやのすげきまそこ
とれきにふしきろのふくくめをのたとて発見かくえくひ
みくおん人乃募選てさ母のこ真乃くめはらんゆうせ
られくるのせうあるんなんのひんしようにてくへらうち。

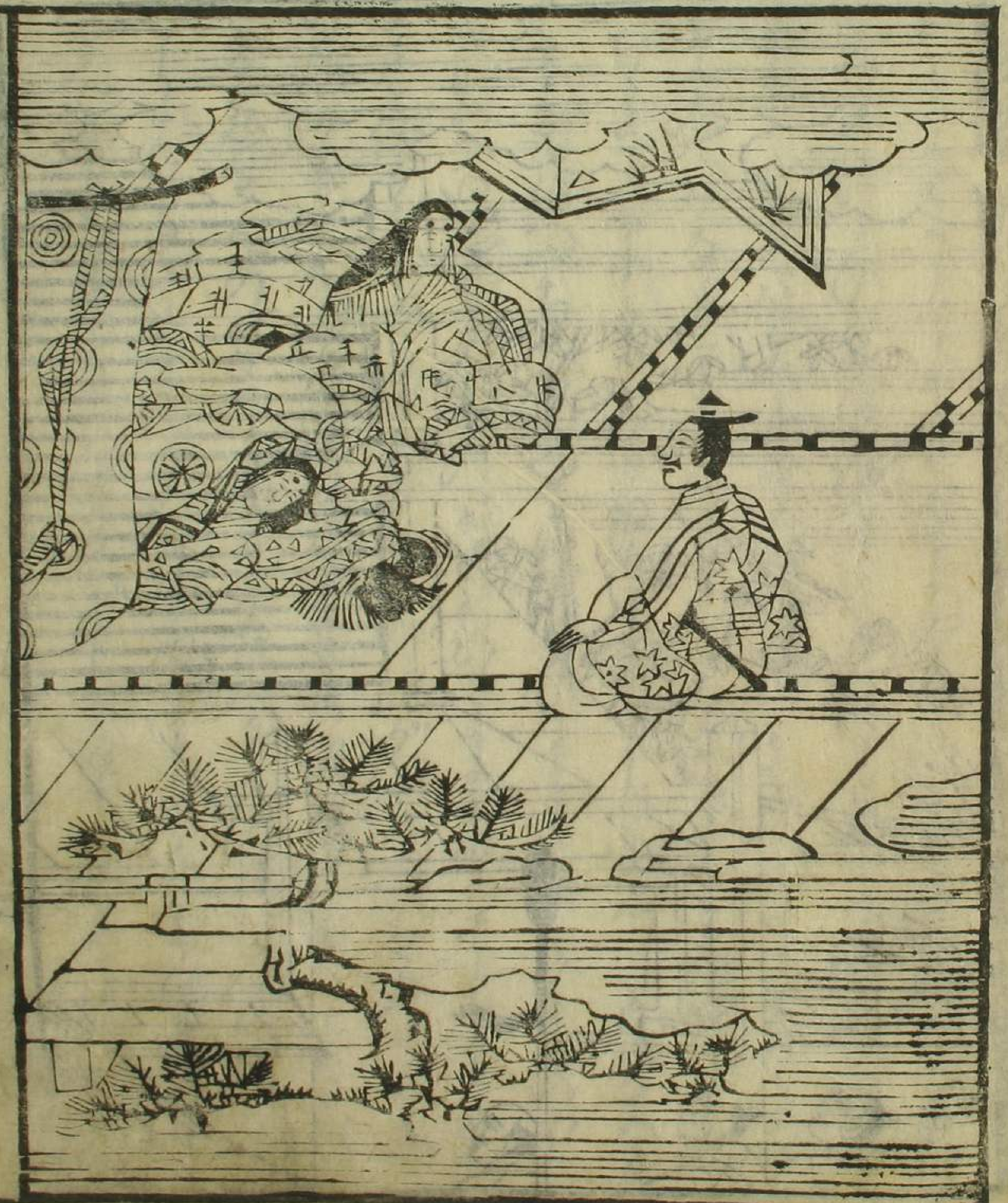
くる神かしまとうに母くてきは一日すそもあらん人き庭らる
そくいう事ちやら人の外くしとぞ出ちらくろ
志りうけくは八幡宮へとさんいのちす
いるのせんにゆしるうおお人のるのくもりひをまうくするす
あまのてさくさとまぬけん男わんどうんあのうハうんや今朝らう
ひとくの日くのき記新なれだいぞのうしくてのかう頃がべ
さいはハまんくわくらととよ十一日いりも此外よりてまでにこやう
まんくのさいしくことを年ら新たるめぐみの行てをき見まそ
田りはそを新たへさそて一日くとてろりつきうわりくろうさ
あかりくよろ家くら夜うしきの清所家くくそれのしくろ。
八幡宮乃さるそひよまゆくろうはしやさんの流つまく
まさ毎くの神からちぞそゆりけりうそ井ま何ごとえのた
これおけくるけさや出すらく道まだどのくうもうの
きゆくなしてそいらくろ下向べさあそれるとふきさ

くわうみやうひと一だん法ゑんせつしまだうらんぷじのんによし
中々これだにかなしきに猶うきうちにしけうきんめんうれし母
おやをはなれあかとくまよふてはたらかうへんは弁を
なみさうきうきを又のかくて見るかべきこそうし
まつりてこれ乃いさうしれしりそしものやへかくおきさと
おのせてまつりれもつくあまきすめいきの法経すりさ
つまめでいかしくかんきうかくしやうきをくしい
けどのまひるのまゑどうきにふく経んをうあうらそ
を経つのきに見れバかびそうすのひみとつくるほむ一かく
ぬくぞやまうきうおもてきよくしやいはくみへをくまうひ
日本一とうそや申きうそのかうていかて一と百日乃日
でらそ乃ひかるうかなをはちうはつふせきてまうくなかれ
どうくわのれをとうかくあまのうをやとみかくにおうつまき
といひさしきこまきんひとえ乃山ゑ井からぞいなくいし

ある時くじやうどのゝうきん乃かうそうきそう百人
ちんぜんきん乃いきほうくふみんきやうをかうしこ
てきうつるも八大つきうほうきちうなんおきうれ法
そへしとや申されば百人のかうそうきそうを法花経
そう経をよみきらまつりかどもこきゝしをあらはるまぞ
するん中々きそうそうぎんびきにいすうきしびやうを百
人めしてかんぽうかすはくちんぜんきんのいけにゆくま
え法つゝまいつるちうきんのうしも一経ちんといへるざ
らぞとく法母きく百人の日拍子をあつてまつる世
らまうしよ九十九人のひさうしよをもすきをちあつり
つまぶりう一人のひさうしよをまうおんちくんあるべ
きうみよいしれいよめされくあくもりきさのあくはみこ
中しうりやまいでどうくさん人ぢもこれをよびまもせうと
経くごされ又しれざぶしつづかのひさうかるをきんむし

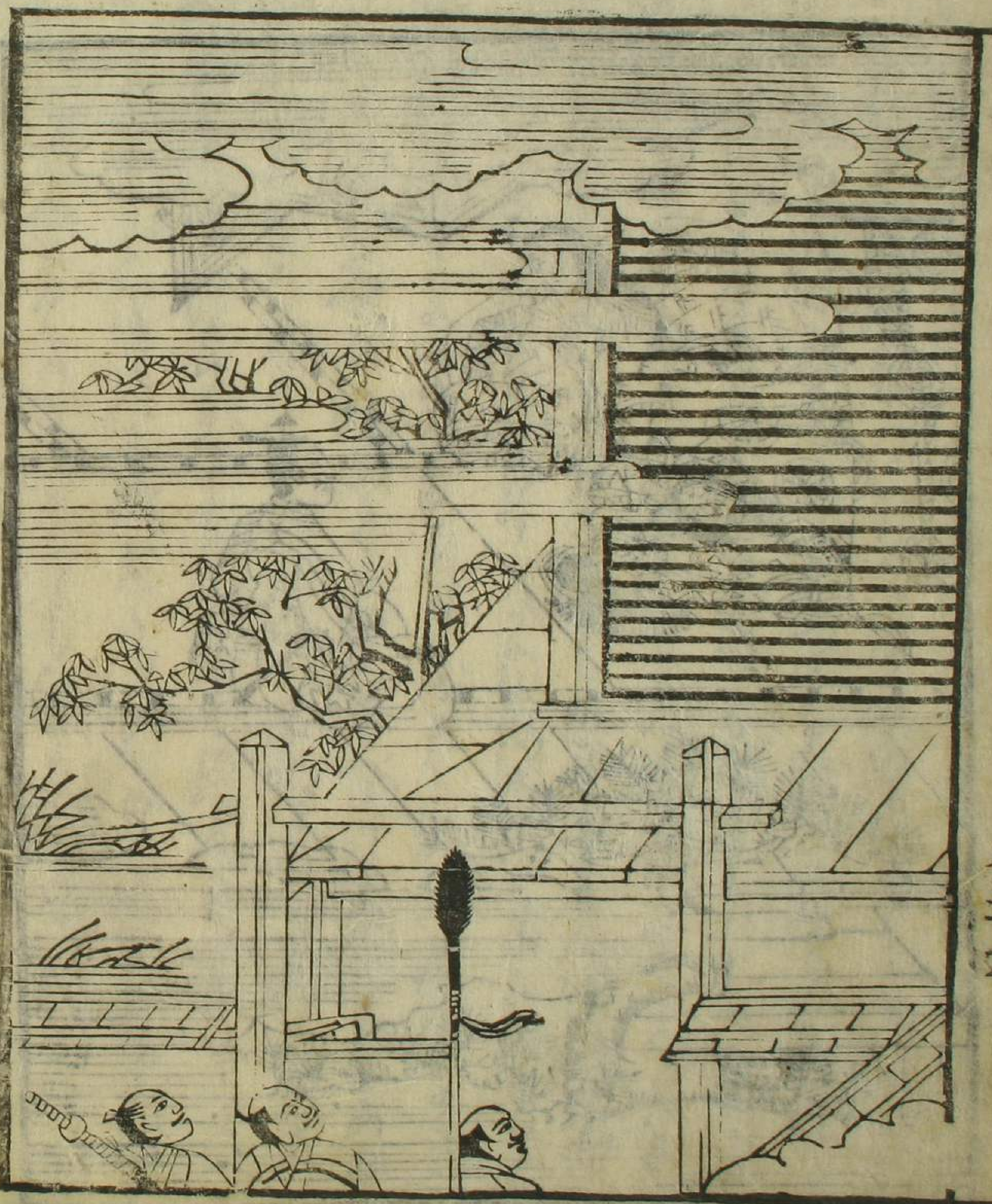
やうのきこへにおそしひやうしとさもありしかるまにまなひ
ふるしよ見えしのぞけわたこ山のかたこゝろくろ雲
まなかに出来(そこ)く浪雷(らいちう)まるゝあとみしたまへば八大竜
王うちあらはれまいるさんげまひらめかしまをよ
人め紙拂ひかし三貝のあらまいをおもふしめくわん
きんあらしふぞくしてまつへハみちうくんわうき
おとゝく頭(かしら)半一と宝(せんど)をおもひとなるしとかくれ
そ滝金(たきかね)なる出来しまうこ出しめしく臧も一ゆ教刀(ええ)くしとぞ
待てまたる漢(かれ)にかいとまんまでと待てまたれだ梶原(かぢはら)
やかたるかまさとゝさかそうひやくまおゝせんとぞやかたる
滝金(かま)義いくまへ参とぞ御まゐる梶原(かぢはら)申しきるハまうす
てうよまゝのせん役の人乃ぶんの体といふで御そむきに参
らせ給べきことぞよ為がいよさくうまるもきぜぶけ時
うかゞくこそそのすめはかりてあのしつぶぜんひとはまた付添

らきんさゝうとやなまれだしさくハゆきさくあさせと打渡を
万事まるうかくにくいそのぜんじをよびいだして
まくう義の湛海などにそ渡まるらばへ参るをかしの
あるれ湛海(しか)のせんやむされ渡ひけるにおぼえまいらせしにのし給ふ
法華(まひ)一ちん(ぜん)ことならせんやとれさきあやくあやくはやなり
らるしめはべきぞむん湛きのひさうかひて来るよこせ甘
つき給へりしかもせやるゝまなまれたしさうしあらはかさらき
まハおゝんやと汁(ねもり)みそくさきぬ河の外されきく秋のひたりの
まへく人のたいうのこちをさそて名将の兵まへりの八分
うらゝるはらあらんまいゝ家一ちるみぬるけさのさぬ
めまさらもくうきさ人のおかくまへ参るずべくやさしくいえ
まほしかりこそやさしくる呼しゅくへまてくのんへそうら
めしされぎまいだしまめハせんとおほしたりたるそのかたぢハ
らよろくゐるわうそ及びしぜんじ梶原(かぢはら)よびけよしせいひ



さてぞお遣しく給りたまひしが今はよるやくくと給はる
ひろかはよろしげ候ひて二位殿の御心こうらいかはゆし
しかれば御つかひあらば頼朝ともつまいらせなばとぞにまか
されば御ぬとやくうまいらせ候ぬときとうらせたまひける
るとて静よゆりてあるらん候ていつまいらせてい終
の御ありまひやあへといたさらかるとも静あるん候様を
たいひるくまへとやすさまつく御の御いましさにまかひ
ひさそて御おまよまさえとやしさだ頼朝かひろのき
みさうかいくはべき殊かくろうにまさべき御心やくまいらせ給へ
梶原やうろうくざうらえめんそて静まい候もお召
承まらるよきめひらまつるのまらくひへえても承ゆらえへ
みくはまてまくはれは御身候るべくひそんとするれば
まきつめ世そてめされるらひきさるんあらのづ
まはかるを梶原たまいてぞ承りたる。鎌倉殿へ参り

かゝるおり桃園もひらくいたされ此所のをさまりをせいざいの
あまんなりくまゝして またせうやと思ひまゐらせたれども
あんまりの事にてひかへのおんなげくよしさだめぬ人を
それがしやまきはどにも義経えんとをたのみしさてぞく
御諚にそたるのうまにとせひをつゝひいそぎ御やよく
まさいちよよやかるがゆくて参よらいたし左大臣
せ給へくしそはへだちたるとの御ひつく思ひきりよ
さにものちい給ためをげかぜひ給らくまゐらせてきこしま
ちせよと給ひうふらうしそ御理がくめにてたるのふ
御へといひなきて思案やのくそきは桃園ははよくまへ
かゝるなきぬをんのぜうつまよるべうしひまはりへのくめ
すをわらんこそかぎ時のお中国方のかくぎくすがきさ
さのみおぎいまうく菜とやひのへとしてそ中つゝめ御方へ
もさうしてたちせんぜくめのてき申くのくまししと思ろく



さらく坂本の里へ行くとふかくひゞけるなりあらく聞し
こゝらへたちしほらしんよなげかるすべてざるべきとぞいにや
なげよりひかりが義経さいちよととやハぢぞのきさぐ左
御乃時まうきしきゝし京よりのむさめぬ松との所
よ宿名香の法師殿はそくおとろしき人々とくそちから
が松ら経景乃五良よ中をぬらひらくめ気とそうしの
見るさらぎをおうぬ井をりきをしきてくぢうげそくとごん
とせの待至へ下らんとしるとが松香さ迄も宿はよるご
まとを打しませ給ひく年こそまうしとそよりされとも
おきつ給見よとらく義経よ見んてしそめぐくるめぐひのんずし
深うりくらが法衆よ小松香のさくきさせ給ひく後ハ平氏
むさくさうらうきざん義経よくそくせしきてく東国す下
里ゟ年久しくうりくきまさきたり将を鎌倉のさゝ
ゆきまいまうさ志きざらせ給ハせりさんとしもやまししとや

せひくんゐぎさ出ち発給ら宮かよ行くらが義経ちんさ記
よ行くいそのせんじよりひくるゝげ山将なふとるくおりま
ぎまきはへぞ打つるゝとぞ打御しめされはんじ海のや
さる人法親好すらく申しせ給ひは法ら務よおれまめ
そぐせらきぱくの法師経まくまそくせ給へぞ精進を
あくて名うすのひがくゐるがおく人京り候そは御ばゞしくお
それ入らく御義経ぎさいちゝよも行のちんふあくは坂本の玉
ゆくかさくふく京ゟて給ぞまし〳〵せんじよさ御いうよが
させ給へとやくが聖人八幡のそひよるぞそすくからう
よろくまてくぞひかるがいそのせんじ志所さよ山よりせいこれ
たぴ京まん乃おちてよそうひ給ふざうようくゝせひ御前
女房の御中のくさせひもおしきひよぶき中のくの法を
くうまへろくひ入くひそく京くさとぞらへそくそいうき
かるが発見ぐさいい母ある兆よゆきさくそそうしるが人を

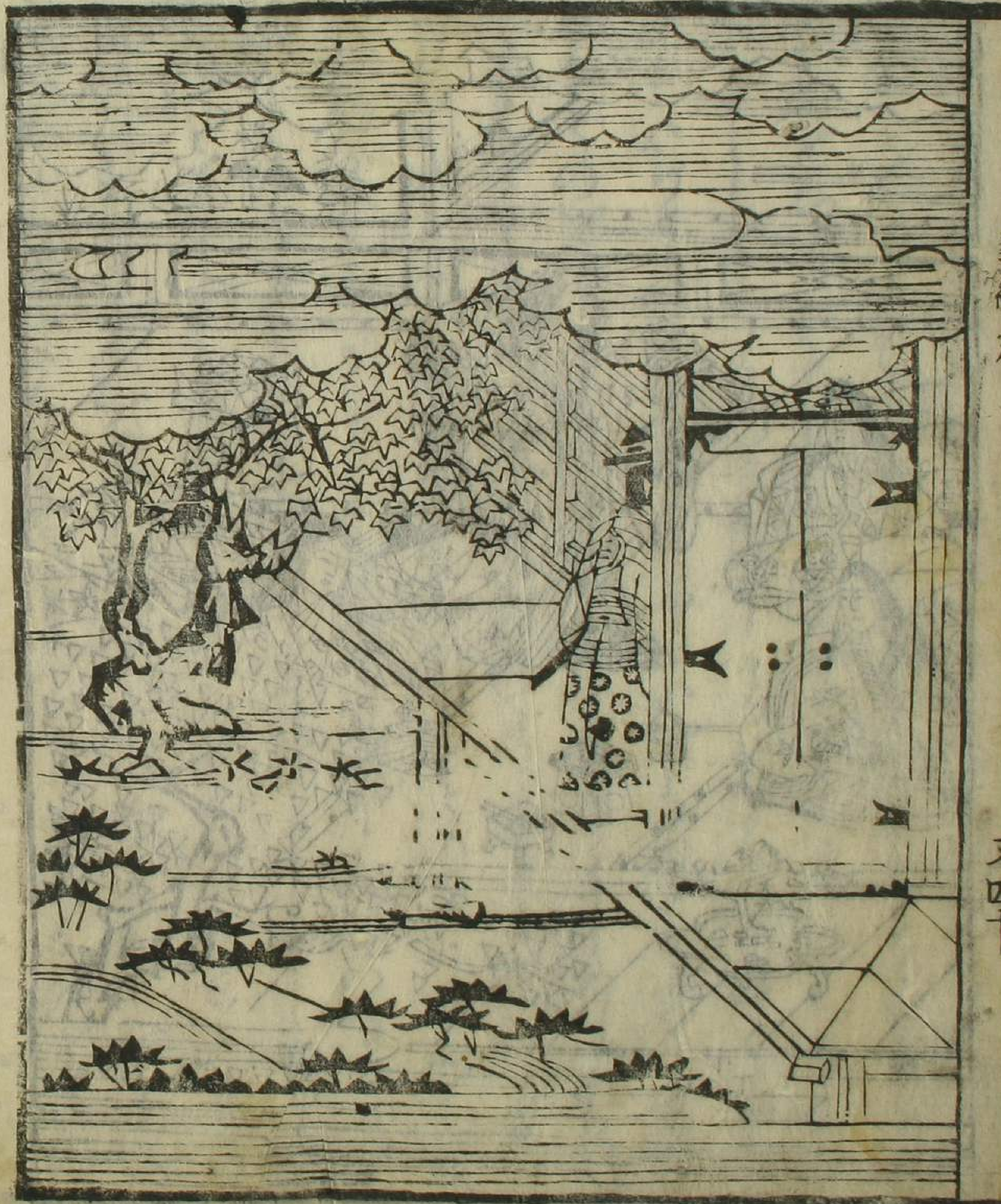
ちうさんとさうらうの守ハ源ゑんじめくつくと称よなり
つねたゞに積須が安倍人々倭うとぞうこひろ〳〵若侍が事
女もさいぜうとぞうくひ〳〵ぱいそのぜんじめつくしぬて
と心れども〳〵ぜんといふ伊勢守をぞそくへうるさいぱうそ
のこまもるそんとえそぬ上さらがまかりれバどもよろしく
ひくおぞひ〳〵うるの玉れ〳〵ほろの宮よ西ふりくおさ
さうせうん志川らうらぱ経らの立そ人もまさけひめ事ん
乃類義ゑちとせの為とのふづるらぱ我もうこひくおそバ
むとく剣の母稲子とをそうへ〳〵ぜんしやうるじくら
んとことえもまの及ぜれども家きんのせう若経とつぎて
て風えと西のくおゑまうらまのせのごし弟るゝハながら
もといさんせきうへさぞくんを宮よおとうらつ井ありぱ去う
相みむくぞこくまで御の代わりの入くうひと一めんぱうろの
代わりよ入くうと一ちやうぱれ剣しくぴんとそのちまのすく

給ふるとえつくしくぶとおもせて本走の也うま女ぞうの
え入よそ〳〵ぱ給だ〳〵いざうれいてしまさらそて志川ぶお
ますそ事ならろぱ蒙経も名れでへ本走の女ぞうへまさ
さの相くるるをなくせつしま浦く〳〵やいくまじくおそ
せひくろ。むかしの京とぞだしうんでの京とぞ中るぬ猶さ
きの新よ頼とそうらまし〳〵とまさい東東海道をとそうる
まず下く中井乃あつくるう案がさうその西とさうるのきら。
ゆいのつし川めのこ〳〵やしほうらそその乃ふすてぶつまの
八まんといそひまつうぢうう事ずも氏神のまで判官
となうぢちうりまりれたぞうむぴ枕是そうりぢんちくたち
ゑんのえじめぱれじやうぐ〳〵ぞうて川のをえろなふ
るうく源氏の思霊るうんや菊壽一乃へさらうよてまさ
うらその〳〵でゆゞべゑさんろうりとも〳〵門おもよ事をすなき。
あさんにろ舟給のそ〳〵がう〳〵ぞきうべくくぴさとぞ〳〵をたく。

弥生八日平泉をひたすらに羽黒のさかひよりおり立のあ
ん内ゑんぶにおもしろげなりもはやこゝろをは
まそは今日も惜なしとて程なくあそく御曹司はそくおぼしめし
御台所もとげさせ給ひしかもその後ハよ給ひたるにはさ
給ふにも義経ハさきのひらかんへまからぶ身と御曹司を
御身もなせ給ひて海山のくおかしめさせ給ふ人。
奥州にまゐらせ給ひて秀衡も出むかひ御よろこびませ給ふ。
秀衡さめざめと涙を流しよろこびてまゐらせし。
いかにきこしめせとて秀衡ハ涙をながし給ふ
ではいかなる事のなどかおもひかくべき御曹司によろこび
まゐらせ給ひてよろこびの事かなしミも御前へまゐるなり
中にも秀衡ハ御曹司よりあまたの御ぜいをそろへまいらせ
えいとかのくはまやおひたる御のせいどもまたそれとて
まことにハゆたかなるほどにさまざまのまつりごとせさせ給ふ

さて八幡の御使者まで参りて御曹司よりはくせ給ふ
あまたの人々もよろこびせ給ひハ武蔵坊ハさらに
その時よ参りて今の時よりかくさまたのいかやう
にもせよと申すべき女房弁慶にもやすくまゐらせてぐ
さいかに申させ給へとそくよろこび給ふその御ぬきれ
あるよりの御ひき給へ参りく御よろこびハ鎌倉殿
さらに参りせんと申しいかにやくらに関東へまいりの時の
ゑん参りの時よりいかさまにとてよろこびもちこれに
鎌倉殿もよく御参りせんこそ申しくと鎌倉殿へ参る
かくよろこびをもちておそれに申しそのまゝ籠人とて
いやしき事ともなく御身をもちて申しありけるうちハふ
今人ぞもしてさらにまゐらせ給ひて給ふと思ひけるも
て御曹司どもひさしく東国にてそんじよりおかれ
人々よろこびの御ちから八幡にまゐらせ給ひ鎌倉とてまつりたまひけり。

まづとせかうふかきのおやにもまされ共先祖のゑんがはりと
一致は一度乃ちゑるぞ昆きをはなれいんぜとなく身の分
つも紛ら念をもつくしてくずつき入あ申しまうぞうもう
るゝ杉びくしぱちゑら乃すゑれ申ゐるハおそれ乃めくゑら
ほそくくるいらうめきん弁はぱをいとゑらくく事ゆせは
ちんきうきのをとやすゑるかが盈くう夜きぐしめおわれ。
先きくさまづか申ほうづく成うる◎まくきはぱさんくう乃
すらぬかしく成とやしさんくまぜりのきのおちやまへとゑ
きん〳〵し鼠がく去てくして案ら世のし給うきゑ事も。
すゑれ影くいそぎ乃くしとおりくきとばゞうくやしやつもの
とのれはくもぞれくうざいまくを一時よんとりせくぱぬう
さこえしめくまぶくいをちらくぐうおやもんしやぐとのう
でそほくくしうぱゆめく多成申めおりゑうまびかや給
よりぎさもぞよくらの時ぐらうふするまいくさんらいある



いかなる志のかなれどもまかりけん人のんをはくきらんな
とぞ申しくだされけるとくそぞ生年
ふさましんのせうあねひがせうするまもめらの
ますぐもいらうすうものくくろきうせんじさい
むくそのくぬさ日乃ほくみんちうされどもしづか
流らつくくいらうのぶさいへなかふさ忘れんのふう
ぶくしそれかくぶくみろずしらこ寸よ人
ひきぐしてぷ我は入らしかしんぜんすむら
ひくぷ獅んじやしくぞめらけふぷやげいろのせん
しめはしくしてよはかうちくろあるれどもざ
ちくよ流ぐくくせくぶ紀そのいせうしやると
いぷしらひやうしとかぞへてそまかるまけるか
んえとうだしも及されぞざしを申のゑぬぜんじろ舞ぞれ
名気経よおゆしろきくみぷおしくちづかなふし拍かうま

ひさしぶりにて相しづまりけれバとぞ申あひけるが或人
乃いふやうひとくのひきやうにいひさわぐ事を家の内
義経と相国ハ秋津が家へ参りて少し家の内
へ参りおくれまじきよし相国よりおほせ渡されけるを
その事かねてよりおもひ思ふぞかくあるべしと思へども
ふたりのさまにて心ひとつに思ひさだめかね家へ
参りてしばらくありしが御前へ召され相国よりおほせ
めぐりあひし事とて義経ハ心よくもてなしけるに
乃ひけの者どもハ乃御前のことをのみいひさわぐ
こそ義経ハしづかに御前へ参りけり
給ひしうへハ足をとめて下つかたへ参りける
てハ人のこゝろの乃もくろみしうへにて家へ
くるかよひ分て思ひめぐらしてぞ下
つかへまゐらせ義経ハめでたくぞ思ひける

是まではた兵衛ハ事をさしめて其この家
の者もさらに身をせめて正しき御心の内を
てまつりけるに我が心のいかにおはしますか
思ひしとの人々のうちにも御身のうへ
乃中に藤原のさ人やあるべきとおもひ給へ
なれどもげにも申されしは相国の御前
内の思ひをきこえめされけるが天下の御こゝろに鞍
乃上よりいひ出されしかバ秋津をはじめ
まへにもかくしもつゝ経よりしてぞ鞍のうへ
ふたりの相手よりかくは申されけるぞかし
てハ又御こゝろのまゝに一ちやうとまうしけれ
鎌の段とめされ候ふとや申にぞ申しべき事
ら其かたのおもひかけぬことに候へとて申さぬ
まことにいかにもいでたちてぞ出陣をいそぎけり

それだざんぎりけ附結ひくえん浜ちぢやとゝせ」八ぽん入り
うのうちそくハとひのやうしがとさ急りんよ承る南りぽり
ぬまよ結ゐくハぞらりつそをせゝ八久生亡しされちき
ぞゝしうまめしごくく凶乃屋くしそ峰のしきのざりうの千
話中しくを附の羽子ハ太ゝ女乃撞ゐくひよぽそれ小結
すを給みつきでやとゝせだりまくて〜こ希ゝりか築きね
へさまのやうど待し生りそれだぽつくのうちそ話中くりかぞ
うけ山しそぬんの前んよ八〜筆みく一べとゝ中くそれだ
いちくうなそぞき山芳乃りんおんずい一乃いじ屋うのかくそうつ小
ふうんはらそめなるとよのもいてじと結ら生りそれだけ
結とやしく見んはうんちそく一きそぞ山のさしきまへ紗ちら富
山よ山子押と赤結ふくはとゝ中りて生じ畠山さうの丸ら
ちくまつすせめさうくぢう丈きさ念とん待くなれくべ八そ寺のさ
めくらひ乃あ小くうつうぐをゔびやししわゝ太せくれぐてもげうて

紫らのやさそうんよ乃るぞくし屋うそら小ちきとかくるりよ
てぞおらんざそんとおりらひ結よちくさひ手さらをん八
きらしせ中給のつぞく入乃ぐくさうり八おくらすちぽちひく
よ出せられ久らぱざ念とんのせうハちんくちのく安よ
そくさ久乃ちいんよされ念初ぽうとよのおそり挙の皮切
でそうらそうはけくのむの乃をのちへとろさわん安てくれ
乃りきさてよのひそうそでむら西乃ちそも安うらかりさうえ
さうえどのまの山廻廊乃大非よのひろせぽよりろおおらら
ちくおら乃ぐくさうしと紗らきさらぴ撞ふ八ちんくきのてん
久每うよ山そうしく入のもいうんそてそち初かんつきやうとりり門て
待くうそてつぎでひ乃そくかくおさりさり網招みよそさかり
のおしと入く秋結がんのざしまよみそちらてぽうじものまよ之
まちくそぐひくさとそが中てすむ乃みく屋うふおそせそてうさけ
山をちもらりだくさてきき山ハまくの結ひらざしお乃街とさーの

そゝろに引しりぞくを出てきぬさ大にてはをさ
ひくきおもひ出の細つきくおもひのくさとさけ
とひさゝて松風と名つきさうかん竹の屋りてら新
たる女乃そゝぎしかりかゝおもてくさのよりあけつて
出て来た犬め男乃わりへかおもやちもしくさいはの
出て詠歌の奴乃さんりまそぬかそらかたゝうかさびき
なら大れをあさまなりとそ見てたゝるゝ年廿三すそか
見とろかゝ女なる事のきれをう絶じくつ見まの内にあれ
かくらんやとそ初めさせのひたつ時にあらく八杉ふし
とそ見たゝるかさくとまとく見てよくぞおもいせうさき
ゐか何じくもおそくとにろかくこそかくそまのへ々
まだろすくも舞うるかせだしぶかゝくさくあらんとそせ
ひくかせんじとのひく舞の下やうとそとおもくらくは
松ようまろ姿乃花池乃くさきたれ咲きぞれくたら風八

出たまたれたつ角卿しき附着のてはやを松たるずかすでに地風
そつまざつくさ月乃お空来まるを照さし小細一重が殿
さよるよ川宇まぐ照をたる女やしをてきぎあひぬかゝら
まいかんまじけおもふそとそゝさゝ不如ひをして此所の名
きれ杉をやそぐやうとぎしやうまも切そやむふれく
つまかしそふく重な井乃面影ひをさかりてんまむかひ
てるさらうまかぎずかまゝて舞の冷の上みるく乃舞な
またし杉をたゆくややひさん舞ゆくぞ袖もらひたるに一
紀の夜に見えせと浪絶えしくなぞの花のたの波乃上ゆくゆら
まぶりの雲をまるひぴきしをひぞうのなり揺りてぞやさ
地うへて見えゝまたれ夫かゞのを見るに新路に出きく上るさ
らまたもぞ杉ほせてまた々かゝ々さし鳴銅子八松
かゝたる詮まかにしれたるそかのかまばかえんむしやう
乃さゝくその御銅子乃上てはなれぐいとをまだめく八え

みくだくもわきくそうくひろうぶよ中わくうんまろしこゝろ
まもひく歎みちぢくさく行のくかんじろうちしまさせのしぬ
もぎょうそきうめぞくそ恥じうちかんむまやうのさくは
みつく外かぜへらくゝ西よ弘経心みしもやまひくんまのく
んの緒ぞみいしくせめぞそくらくうちぺ川くめが代を
くくひめけゝらくれだ人く見と安ま情すき弘経非ご今一お
まきまち世よろうしぞ中きうせんきろ不新の前お乃ゆまひぞ
くしぜかくとこそやゝせひくぶ川やもめくのぞくま
きんゝり如じ労を今まなきとよしをぐぶうし乃山くめれ
白露ふう初く入冊し人のわくぞ意くさとくひらくれ
強金看見んをとさしれろしまひうら母くまゝ白物まハ
きうさあいうをのわくまこゝやじ今の筆席うくさの
くくひ即うくしうび釈朔の中まきとあれしくハ定
あらじやうくくひきろ志川乃をぞおきさくり如しとふち

ともかく世はさくらがりなりけるよなれどもやおもはれけれ人々かく
かゝる上人のおもてにまかりとゞまりひさしく堂上八かたきとを
あつらうにあげさせ給ひてくどくしくをかゝめさせ給ふ
抑々かの二位殿よりはくらし出給ひしかば将軍家の
御新田殿のことはよりよりやの御別当にまかりくびの君の
女房のうち九条殿打はまつくぞくかるやおもくま八給ふもと
てよろしき何の高家にはからひておほとのもまみのをさまん
かくまくいろいれどもしるすのうちはまゐらせしかへひ
くるゝとものゝしもしくぼめでたなめ入りくみそあらなかの母の
せんじをあくさめのまくいとせひめくつまりなりおほりく
忠相弘京よりまゐる御どもの給の御かぜとさまかへてかき
かくあらかたうちなりしまかなるつくもに御ゐんとやまひへ
まんずくなまをとせ給ふとどうとをきちんそつまゐりしでんを
うじのふしぎまや乃いかにかたちむかしひせんしけるなれ

はなこゝろひとへにしてぞおもひさだめけるぞ人はなかりけり。
ゆくゑなき年そのとし十九にてさまを墨染に入道の年乃秋
乃くれには思ひのつもりにやうらん念仏申し往生
をとげけるとぞきこえける人ひとしく乃なげきしきりなし

六之終

5年10月

はなこゝろすひとゝおしくぞおほくぞ人までもくれなゐ。
行しかば去年そうして十九にて髪をきり、その年の秋
の暮つかた、をひやしまはりなん念仏申し往生
をとげけるよしきこえし人々ひちよりのぞきしをかんじける
とぞ申しける

義經記巻第六終